

910.26-Ta54-2ウ
1200500754500

910.26
54
2



始



27. 3. 20

②

910.26
TA54
2 3



高須芳次郎著

明治文學史論

日本評論社版



自序

昨今、明治文學の研究は、加速度的に旺んになりゆきつゝあるが、一部の詩歌史などを除くと全般に亘つたものとして比較的詳しい叙説をしたものを未だ見ない。本書は、聊か以上の點に力を注ぐつもりで、著者が嘗て明治の文壇人の多くと直接、會つた経験やいろいろ親しく見たところを土臺として、組織的に明治文學の全貌を傳へようとした一つの試作である。

本書では、在來、餘り注意されなかつた方面にも、力めて眼を注ぎ、當時、價値を認められなかつたが現在、意義を有すると云つたやうな作品に新しい一瞥を加へてゐる。それに自然主義時代については、紙數の許す限り成るべく詳述し、その缺陷、長所、歸着點を考察すると同時に反自然主義運動をも、公平に見わたして、その代表的な説は、これを紹介することを惜しまなかつた。それらは在來のものにくらべて少しく新味を加へ得たかと思ふ。

明治時代の文學は、これを研究すれば、するほど、新しい味が出てくる。また資料の發見、考察の多様、その他、いろいろ教へられるところの多い新收穫にも、絶えず、接してゐる。従つて、完全なものを假りに作りあげたと思つても、後になると、尙ほ附加せねばならぬものを見出す場合が少くない。本書を書くについて、私は左様したことを痛切に感ずる。が、私としては、嘗て公にした『近代文藝史論』に於ける明治文學についての叙説、評論が割合に詳しいので、今は、それを土臺とし、或は添削したり、修正したりする事とした。そして同書には、自然主義時代が全く書いてないので、之は全部新しく起稿したのである。従つて、いくらか在來のものよりも、發見し得たところ、發

自
明し得たところがあらうかと思ふ。この點、大方の示教を仰ぎたい。
それから明治文學研究については、嘗て前日本評論社長で、もう故人となられた茅原茂氏の獎勵を受けたのであるが、今度、本書出版について、現日本評論社長鈴木貞氏の厚情を受けたことを茲に衷心感謝する。尙ほ本書の「自然主義時代」に關して、材料調査に盡力してくれられた文學士渡邊竹二郎君の勞を謝する。

昭和九年十月

高須 芳次郎

例 言

- (一) 本書においては、政治小説を在來よりも少しく高く評價して置いた。これは、昭和維新の聲高く、新しい政治小説が要求されてゐる今日、も一度見直すべき必要があらうと思ふからである。
- (二) 本書においては、文學と密接の關係ある演劇、美術のことを各時期に亘つて、略述して置いた。それは、當時の情勢を概観するに便利だからである。
- (三) 在來の明治文學史は兎角、創作(小説戯曲)本位に傾いてゐるが、本書では、文藝評論について可なり注意を拂ひ、自然主義時代の如きは、ひとり自然主義派の評論のみに留らず、反自然主義派の評論をも力めて紹介し、叙論した。殊に漱石、鷗外が自然主義に對する態度については、聊か新しい發見をも附加したつもりである。
- (四) 日露戦後に出た戦争文學は、量において相當あつたが、在來、閑却されてゐた。本書では、その代表的なものについて論述、批評した。
- (五) 自然主義時代に於て、筆禍を得た作品が割合に多い。本書では、その一端に觸れ、その意味についても亦聊か觸れて置いた。
- (六) 既に故人となつた文學者については大體、小傳を附することとした。それは、何かの便宜になると信じたからである。
- (七) 私は明治の文壇人には、多くの知己を有し、日清戦争時代からの文學運動の種々相をも親しく見て來たので

左様した時代の空氣を割合によく知つてゐるつもりである。従つて左様した文壇的知識が、おのづから本書の特色を爲すべく、多少役立つたであらうことを信ずる。

目 次

總説 現代文學の大勢及び進歩……………一

(一) 明治時代に於ける文藝發達の由來……………一

(二) 明治文學に對する西鶴の影響……………二

(三) 明治文學に對する芭蕉・近松の影響……………四

(四) 文藝的進歩の五原因と歐米文化……………六

(五) 日本國民の文化的飛躍……………八

(六) 頻出せる文壇の人材……………九

(七) 文藝的進歩の四期……………二一

(八) 第一期の後半に於ける文學……………二二

(九) 第二期に於ける文藝……………二四

(一〇) 第三期に於ける文藝……………二六

(一一) 第四期の時代に於ける文藝……………二八

(一二) 劇界の新運動……………三五

目 第一期 舊套墨守時代……………七

次 第一章 英米功利思想の流入と啓蒙運動……………九

(一) 大變革の時代……………九

(二) 英米功利思想の流入……………一〇

(三) 福澤諭吉の文明觀……………一〇

(四) 福澤の啓蒙的・改造的運動……………一〇

(五) 福澤の文學方面に於ける功績……………一〇

(六) 中村敬宇の『西國立志編』……………一〇

(七) 當時の教育と新學術……………一〇

(八) 新聞雜誌の啓蒙的勢力……………一〇

(九) 新文化開拓に貢獻した『明六雜誌』……………一〇

第二章 舊套を離れざる文學……………一〇

(一) 假名垣魯文の戯作と新聞小説……………一〇

(二) 劇壇に於ける河竹默阿彌……………一〇

(三) 惡の詩人としての默阿彌……………一〇

第三章 翻譯文學と政治小説の流行……………一〇

(一) 政治思想の勃興と英佛獨の思想……………一〇

(二) 翻譯文學の種類及び文體……………一〇

(三) 翻譯文學の效果……………一〇

(四) 政治小説の作者と技巧……………一〇

(五) 當時の青年と文學……………一〇

(六) 劇界革新の微光……………一〇

(七) 美術界と歐化的風潮……………一〇

目 第二期 新文學發生時代……………一〇

次 第一章 當時の思想及び文學の概勢……………一〇

(一) 歐米文學思潮と國粹的思潮……………一〇

- (二) 當時の社會思潮と文化……………五
- (三) 歐米文學とキリスト教思潮の勢力……………七
- (四) 新島襄のキリスト教宣傳……………九

第二章 新文學の黎明……………九

- (一) 坪内逍遙の『小説神髓』……………九
- (二) 新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義……………一〇
- (三) ロンヤ文學と『浮雲』を書いた二葉亭……………一〇
- (四) 『浮雲』を書くについての苦心……………一〇
- (五) 『浮雲』の着想と新構寫……………一〇
- (六) 『浮雲』の缺點と特長……………一〇

第三章 徳富蘇峰を中心とした民友社……………一八

- (一) 『國民之友』の文學的勢力……………一八
- (二) 評論家としての先驅者櫻痴と兆民……………二〇
- (三) 當時續出した雑誌……………二二
- (四) 文學評論の創始時代……………二四
- (五) 蘇峰が創始した人物評論と政治記事の文學化……………二六

第四章 尾崎紅葉を中心とした硯友社……………二八

- (一) 言文一致の創唱者山田美妙……………二八
- (二) 美妙の『夏木立』と『胡蝶』……………三〇
- (三) 紅葉の出世作『色懺悔』……………三三
- (四) 紅葉の人物と優れた藝術的氣稟……………三五
- (五) 紅葉の『新色懺悔』と『二人女房』……………三八
- (六) 紅葉の文學に於ける一進歩……………三九
- (七) 『三人妻』の文章及び内容……………四一
- (八) 硯友社同人の文壇的活動……………四三

第五章 紅葉に對峙した幸田露伴……………四九

- (一) 詩人としての露伴と其の作品の特質……………四九
- (二) 出世作『風流佛』の思想・文章……………五一
- (三) 藝術家氣質を描いた『一口劍』……………五三
- (四) 代表作としての『五重塔』と佳作『血紅星』……………五五
- (五) 『五重塔』の名文章……………五七

(六) 『五重塔』の缺點及び其の他の作品……………一〇九

第六章 評論壇に於ける逍遙と鷗外……………一一

 (一) 文藝評論の先覺者……………一一

 (二) 諷刺を好んだ鷗外……………一三

 (三) 『漫理想論』についての論戰……………一四

 (四) 鷗外が逍遙の說に對する論難……………一六

 (五) 談理と記實との問題……………一六

 (六) 評論界に於ける綠雨……………一六

 (七) 評論家としての北村透谷……………一六

第七章 硯友社以外の作家及び作品……………一七

 (一) 逍遙の『細君』及び『圓紙幣の履歴ばなし』……………一七

 (二) 鷗外の處女作『舞姫』……………一八

 (三) 鷗外の『文づかひ』……………一八

 (四) 小説家として綠雨と實村……………一九

 (五) 關西文壇の人々……………一九

第八章 傳奇小説・探偵小説及び歴史小説……………一七

 (一) 行詰つた寫實小説に對する新要求……………一七

 (二) 傳奇小説の代表的作品……………一七

 (三) 探偵小説の流行……………一七

 (四) 探偵小説に對する非難……………一八

 (五) 文壇に於ける歴史熱……………一八

 (六) 文學と史傳の調和……………一八

 (七) 歴史文學と傳記文學の價値……………一八

 (八) 歴史小説の出現と其の作家……………一八

 (九) 當時の文藝批評と作家に對する要望……………一八

第九章 翻譯文學の曙光……………一九

 (一) 最初に出た藝術的翻譯……………一九

 (二) 二葉亭の『あひさき』と『めぐりあひ』……………一九

 (三) 思軒の漢文調と鷗外の國文調……………一九

 (四) 鷗外の『水沫集』と翻譯小説……………一九

 (五) 内田不知庵の『罪と罰』……………一九

◎ 第十期

◎ 第三章 ロマンチズムの時代……………三二七

◎ 第十章 新體詩・戯曲及び新國文……………三二四

(一) 『新體詩抄』と初期の詩壇……………三二四

◎ (二) 哀世詩人としての北村透谷……………三〇六

(三) 劇文學開拓と學海・櫻痴……………三〇八

(四) 新しい有意義な演劇論……………三二〇

(五) 逍遙の新史劇についての意見……………三二二

◎ 第十一章 文化思潮の特相と美術及び演劇……………三二四

(一) 文明批評の先驅者大西操山……………三二四

(二) 哲學の民衆化的傾向……………三二七

(三) キリスト教の發展と佛教の復活……………三二九

(四) 此の期の劇界と新舊勢力……………三三〇

(五) 日本畫の勃興と雅邦・芳崖……………三三三

(六) 青年繪畫協會と明治美術會……………三三四

◎ 第一章 思想界の大勢……………三二九

(一) 日清戰爭に對する文化的考察……………三二九

(二) 日本主義の提唱と其の意義……………三三一

(三) 日本主義の長所及び缺點……………三三三

(四) 世界主義及び帝國主義の提唱……………三三六

(五) 現實的傾向と道德・倫理の研究……………三三八

(六) 樗牛の個人主義・天才主義・本能滿足說……………三四〇

(七) 哲學宗教熱の沸騰……………三四二

(八) 網島榮川の宗教思想……………三四四

(九) 社會主義思潮の發生……………三四六

◎ 第二章 文壇の新機運が生んだ新しい小説……………三四九

(一) 戰勝と文學……………三五九

(二) 文壇に於ける黨閥と新人……………三六一

(三) 觀念小説の先驅者泉鏡花……………三五五

(四) 川上眉山の新傾向……………三五七

◎ (五) 廣津柳浪の深刻小説・悲惨小説……………三五九

(六) 柳浪の代表作と心理描寫……………二六二

第三章 群起した文壇の新人……………二六四

- (一) 人としての樋口一葉……………二六四
- (二) 生活を藝術化した一葉……………二六六
- (三) 一葉の文學的進路と描寫の特長……………二六八
- (四) 一葉の代表作『たけくらべ』の藝術味……………二七〇
- (五) 新進小説家としての宙外・抱月・天外・風葉……………二七一
- (六) 風葉の出世作『戀慕流し』……………二七三

第四章 社會小説・家庭小説の出現……………二七五

- (一) 文壇に於ける社會的風潮……………二七五
- (二) 内田魯庵の社會小説……………二七七
- (三) 最初の家庭小説『不如歸』を書いた蘆花……………二七九
- (四) 田山花袋の新進作家時代……………二八一

第五章 新進作家に對峙した紅葉・露伴……………二八三

- (一) 紅葉等に對する非難と嘲罵……………二八三

- (二) 『小説の米の飯』と自稱した『多情多恨』……………二八四
- (三) 『多情多恨』に於ける巧妙な描寫……………二八六
- (四) 藝術上の時代的要求を綜合化した『金色夜叉』……………二八九
- (五) 露伴の大作『風流微盡蔵』……………二九二
- (六) 『新浦島』の思想及び技巧……………二九四
- (七) クラシックの味が深い『一日物語』……………二九六
- (八) 水蔭・美妙・小波らの文學的收穫……………二九八

第六章 後半期の小説と少壯作家……………三〇〇

- (一) 鏡花の作品に現はれた神秘的傾向……………三〇〇
- (二) 此の期に於ける蘆花・春雨・秋聲・春葉……………三〇三
- (三) 天外が踏み出した新しい第一歩……………三〇五
- (四) 風葉の藝術的得失……………三〇六
- (五) 小説の新傾向に志した人々……………三〇七
- (六) 『水彩畫家』を書いた島崎藤村……………三〇九
- (七) 『地獄の花』を書いた荷風……………三一〇

第七章 此の期に於ける戯曲・翻譯・雜筆……………三一三

(一) 新史劇の先驅となつた『桐一葉』……………三三

(二) 逍遙の三部曲の最初に出た『牧の方』……………三四

(三) 鷗外の『兩浦島』と『日蓮上人辻説法』……………三六

(四) 劇壇と文壇の接觸……………三八

(五) 二葉亭の名諱『片戀』と『うき草』……………三九

(六) 鷗外の『即興詩人』と上田樗村の南歐文學の紹介……………三一

(七) 寫生文・美文・紀行文・隨筆……………三三

第八章 此の期に於ける新體詩……………三六

(一) 擬古派の少壯詩人……………三六

(二) 鐵幹と子規……………三八

(三) 新體詩界の黎明……………三八

(四) 藤村が開拓した詩境……………三九

(五) 冥想詩人としての晚翠……………三三

(六) 泣菫と有明の詩人的特質……………三四

(七) 史詩の流行……………三七

第九章 短歌及び俳句の革新運動……………三八

(一) 直文・鐵幹の短歌革新運動……………三八

(二) 『亂れ髪』の女詩人……………三九

(三) 竹の里人の一派……………四一

(四) 正岡子規の俳句革新運動……………四四

(五) 子規及び其の周圍の人々……………四六

第十章 文藝評論の勃興及び演劇・美術……………四九

(一) 新評論家の輩出……………四九

(二) 文壇に於ける美學研究の傾向……………五一

(三) ニイチエについての論戰……………五三

(四) 樗牛の美的生活説……………五五

(五) 文壇に於ける現實生活の問題……………五七

(六) 梁川の思想と文壇的交渉……………五八

(七) 文藝評論の勢力……………六〇

(八) 劇界の新現象……………六一

(九) 美術界の新現象……………六二

大 第四期 自然主義時代……………六五

目次

第一章 自然主義文學の本質と背景……………

(一) 自然主義文學とは何ぞ……………

(二) 外國文學の影響……………

(三) 日露戦争の勝利と一種の悲哀感……………

(四) 自然主義の描寫に至る過程と日本的特質……………

(五) 自然主義時代に於ける文壇の概勢……………

第二章 自然主義理論の成長……………

(一) 評論家の輩出……………

(二) 新興ソライズム……………

(三) 『露骨なる描寫』と『神秘的半露主義』……………

(四) 突進時代の評論……………

(五) 自然主義の支持者……………

(六) 批判時代の評論……………

(七) 理論と作品との分離……………

第三章 作家及び作品を中心に……………

(一) 既成作家と新進作家……………

(二) 『破戒』を出發點とした藤村……………

(三) 花袋の轉向……………

(四) ロマンチックな自然主義者獨歩……………

(五) 人生派の代表者徳田秋聲……………

(六) 四迷・泡鳴・風葉諸家の作品……………

(七) 白鳥・青果の進出……………

(八) 其の他の新進作家群……………

(九) 『寄生木』と『土』の作者……………

第四章 詩歌俳句等に及んだ自然主義の影響……………

(一) 象徴詩の時代……………

(二) 口語詩の出現……………

(三) 新傾向を求めた俳句……………

(四) 短歌と現實生活……………

(五) 歌壇に於ける新しき人々……………

(六) 啄木の自然主義時代……………

(七) 啄木の理想主義時代……………

(八) 自然主義が戯曲に及ぼした影響……………四六八

第五章 自然主義の分化及び功罪……………四六一

(一) 破壊に終つた自然主義……………四六一

(二) 自然主義の缺陷と歸着點の考察……………四六四

(三) 筆禍を受けた作品……………四六九

(四) 『火の柱』に現はれたキリスト教的社會主義……………四七一

第六章 餘裕派文學の主張と製作……………四七五

(一) 文藝革新會と反自然主義理論……………四七五

(二) 夏目漱石の自然主義觀……………四七九

(三) 漱石の餘裕派文學論……………四八三

(四) 『猫』から『彼岸過迄』の瞥見……………四八六

(五) 漱石門下の人々と高濱虛子……………四九一

(六) 森鷗外の高踏的態度……………四九三

(七) 鷗外の『青年』と『雁』……………四九八

第七章 享樂派及び白樺派の作品……………五〇三

(一) 文壇の新氣流……………五〇三

(二) 潤一郎とマソヒズム的傾向……………五〇五

(三) 『悪魔』と『葵』……………五〇九

(四) 荷風の初期に示した傾向……………五二二

(五) 荷風の後期に示した傾向……………五二六

(六) 薫・幹彦・未明の諸作……………五三〇

(七) 白樺派の代表者武者小路實篤……………五三三

(八) 白樺派の人々……………五三五

(九) 戦争文學の一瞥……………五三八

(一〇) 結語……………五三一

第八章 明治末期の演劇及び美術……………五三三

(一) 歌舞伎劇の動搖と新機運……………五三三

(二) 文藝協會が進んだ道……………五三九

(三) 自由劇場の新運動……………五五五

(四) 文展の創設と畫家の争鬪……………五三八

明治文學年表……………五六一

總説 明治文學の大勢及び進歩

(一) 明治時代に於ける文藝發達の由來



明治大正昭和の時代を通じて、最も進歩したのは、何であるかと云へば、私は第一に文學だと答へるに躊躇しない。政治や、經濟や、學術なども、勿論、相應な進歩を示したにちがひないけれども、これを文學の進歩に比較すると、大分、と云はねばならぬ。現時の文學は、歐米の文學に比較しても、決して劣つて居ない。其の優秀な部分には、獨創的な内容と形式とを備へて居る。少くとも、一面に於て、歐米文學の模倣状態から漸く抜け出ようとして居る。かうした現象は、眞に空前にちかい。平安時代、元祿時代、文化文政時代の文學とても、現代の文學的進歩に對して遙かに及ばないやうに思はれる。従つて後世の史家は、必ず文學上の現代を偉大な文藝復興期として、當然元祿、平安の文學と相對比して論ずるであらう。

以上の中で明治に於ける目ざましい文藝復興は、國史上、それが對比を元祿期に求めるよりほかはない。元祿期は、日本に於ける最もブリアントな時代の一つである。今まで抑へ付けられて居た民衆が、ある程度に於て解放されて生の飛躍、生の歡喜を味ふことが出来るやうになつて、そこに始めて民衆文藝の花が一時に開いた。近松巢林子、松尾芭蕉、井原西鶴、尾形光琳、菱川師宣らの巨匠は、何れも、元祿に於ける民衆の新興精神の中から出た人々であつた。殊に巢林子、芭蕉、西鶴らの藝術は、今日も尚ほ偉大な生命を保つて居て、日本文學史上に於ける尊い收穫を示して居るのである。

けれども元祿期の偉大さも、これを明治時代の偉大に比較すると、遙かに劣つたものになる。少くとも、文壇の上
に於て左様である。日本人には、一種の尙古癖、過去嘆美癖があつて、すべて現在よりも、過去を美しく重く見る傾向が
ある。従つて近松や芭蕉や西鶴を産出した元祿期を以て、明治時代に優つて居ると見るものがないとも限らない。け
れども冷靜に考へると、恐らく、左様でないことを發見するにちがひない。假りに、明治の文壇に於ける故人を數へ
て見ても、尾崎紅葉、高山樗牛、岡本田獨歩、長谷川二葉亭、正岡子規、樋口一葉、中江兆民、福澤諭吉、網島梁川、
大西祝(操山)、川上眉山、河竹黙阿彌らの人々がある。紅葉の小説は、決して西鶴に劣つて居ない、黙阿彌の戯曲は、
巢林子に追隨し得る丈の光彩を持つて居る、子規の俳句は、芭蕉に肉迫するに足りる内容を持つて居る。其の他、ロ
シヤ文學に於ける二葉亭、短篇小説に於ける獨歩及び一葉、評論に於ける樗牛、操山、梁川らの如きは、何れも不朽
の光りを放ちつゝある。かうして、彼を對照すると、明治の時代は、文學的に最も偉大なブリリアントな收穫を示し
たものと云はねばならぬ。殊に現存の第一流大家のうちにも、不朽を以て目すべき人々が、少くとも、十名に上つて
居る以上は、私が、現代文化の中に於て、文學が一番、進歩して居ると云つたことは、決して不當ではない。

(二) 明治文學に對する西鶴の影響

明治文學が、それほど迄に、目ざましい進歩を示した由來、原因は、何であらうかと云ふことを一考するのは、此
の際、順序として、必要である。其の由來は、傳統的に進んで來た江戸時代の文學を繼承すると共に、其の長所を吸
收したことにある。近松、西鶴、馬琴、京傳、一九、三馬、種彦、春水、芭蕉、蕪村、眞淵、景樹らの文學は、明治
文學に相應の影響を及ぼした。殊に芭蕉と西鶴とは、日本の現代文學に著大な深い影響を與へた。例せば、幸田露伴、

樋口一葉らは、簡潔な西鶴の文章に傾倒したことがあつた。尾崎紅葉は、常に西鶴の文致に共鳴したのみならず、其
の好色本から來た感化をも明かに受けた。ひとり以上の三人ばかりでなく、自然主義の主唱者田山花袋の如きも、西
鶴を研究して、得るところが、極めて多かつたことを『西鶴小論』のうちに述べて居る。勿論、花袋は、好色本より
寧ろ他の作品に共鳴したので、それについての感想を記して「西鶴物と言へば、人はすぐ好色物を聯想する。好色物
も即ちかれの藝術のすべてだとさへ思はれてゐる。しかし私はさうは思はない。私は好色物以外に、かれの眞面目な、
本當な、人に知れない理解を發見して、いつも驚愕の眼を睜つた」と云つて居る。花袋が共鳴したのは『胸算用』や
『永代藏』などで、それは、大阪町人の金銭生活を描いたものである。

花袋は、西鶴の『胸算用』について「あの中にはどんなに深いかれの悲痛がかくされてあるか。智慧あり且つ聰明
なる大阪人の苦痛がかくされてあるか。かれはその中に『金』を取扱つた。むづかしい『金』の悲劇を取扱つた。私
達作者の願ひとしては、『女』と『金』とを十分に理解したい。『金』を唯物質と思つてゐるやうな心の簡単な境から離
れて、金即心、金即女といふ境、更に進んで、物質即ち心と言つたやうな境、さういふ境に入つて行きたい。かう思
つてゐても中々其處には行けない。『女』はまア書けても『金』は容易に描けない。何故なら『女』には『詩』がある
が『金』には『詩』がないからである。『詩』のない『金』を描いて、それが『眞』に達するといふことは容易なこと
ではない。それを西鶴は『胸算用』『永代藏』でモウバツサンや、チエホフが書いたもの以上に本當の『金』を書いた。
近松の藝術には、『金』はあつても、要するに芝居で見る『金』だ。梅川忠兵衛の『金』などは、決して心に喰ひ入つ
た『金』ではない。女即金と言つた『金』ではない。それから比べると『永代藏』にある『拾つた金』の悲劇などは
深く心理に觸れて行つてゐた。私の考では、日本の文壇で、『金』を本當に取扱つた作者は、かれを除いては他にない。

『胸算用』のうちにある大晦日の苦痛、あれは今でも我々の心に響いて来る。我々の生活を動かして来る。あらゆる善きもの、美しきもの、あらゆる思想、あらゆる理想、それが到る處で幻滅してゐる」と云つて居る。これで見ると、花袋は、紅葉、露伴などは、別の意義で西鶴に傾倒して居ることが知れる。

鳥村抱月も亦西鶴に共鳴して居た。勿論、彼れの小説は、近松の戯曲から深い影響を受けたことを示して居るけれども、自然主義運動に参加した頃から、西鶴の藝術に對して、深く共鳴した。『五人女に見えたる思想』のうちで西鶴の人生は個人性、快楽性、感情性の一團の向上より生ずる寂寞不満の感を見せたものではないか。此の意味よりいふときは、西鶴の思想は多くの點に於いて、却つて近代の歐洲文藝に見えたる思想と接近する」と云つた。

西鶴の作品は、今日、研究しても、いろ／＼の事を考へさせる。それだけに深い永遠性をもつて居る。だから、今日の作家にも、勿論、新しい印銘と感化とを與へるであらうけれども、在來の作家では、紅葉、露伴、一葉などが、西鶴から感化されたことを、其の作品の上に現はした。大正時代の文壇は兎も角、明治の文壇は、可なりに、傳統的に西鶴に負ふところが少くなかつたことを證明して居る。

(三) 明治文學に對する芭蕉・近松の影響

西鶴の次に明治文壇に深い影響を與へたのは芭蕉である。それに續いては、近松巢林子である。芭蕉は、蕪村と共に、正岡子規の心を深く動かして、明治の俳壇を革新させたばかりではなかつた。芭蕉の藝術は、北村透谷、鳥崎藤村らの如き『文學界』の一派をも深く動かした。透谷の哀世思想、藤村の放浪時代に於ける思想と表現とは、芭蕉から來た感化のあとが明かに印象せられてゐる。藤村の新體詩と小説とは、現代文壇を通じて、不變の生命力を有

して居る以上、芭蕉が、明治文學に與へた影響を見逃がすわけに行かないと同時に、今日の文學にも、隱然、新しい印銘を附與すべき可能性を有することを肯定して、差支へない。

近松巢林子も亦明治文壇に相當な感化を及ぼした時代があつた。坪内逍遙が先頭に起つて、明治二十三年『日本評論』に『評釋天の網島』を發表して、新しい解剖を試みて以來其の聲みに倣ふものが出た。高山樗牛は明治二十八年『近松巢林子』巢林子の女性、『近松巢林子の人生觀』などを『太陽』帝國文學』などに發表した。續いて、二十九年には『早稲田文學』に於ける『近松研究』が連載されて、一般に相當な影響を與へた。抱月は巢林子の作品に就て『近松の藝術及人生』近松と東西心中劇の比較』などの論文を書いた。のみならず、彼れの小説、しるあらし『玉かづら』『めをと波』などは、近松の構圖に學ぶところがあつた。花袋は『明治小説内容發達史』のうちで「抱月の作は、布置の整然たるを以て特色とされ、一般に近松の感化を受けたものと認められた」と云つて居る。明治文壇が、近松の戯曲から相當の感化を受け入れたことは、以上の敘述によつても明白である。思ふに、大正の文壇も、幾分か近松の影響を受けるかも知れないけれども、それは、西鶴や、芭蕉に比較すると、遙かに浅いものにちがひない。

要するに、明治文學の發達は、其の由來の上に於て、江戸時代文學の巨人であるところの芭蕉、西鶴、巢林子に負ふところが、少くなかつたことは、以上の通りであるが、其の他馬琴、京傳、三馬、一九、眞淵、景樹らの影響を幾分づゝ受け入れたことも見逃がすわけに行かない。高山樗牛は『明治の小説』のうちに於て「明治十年前の小説は徳川時代の殘肴冷杯を嘗啜して僅に其餘脈を繋ぎたるの有様なりき。……其文體より見れば、馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を嘗むるのみ」と云つて居るが、それは、正確な事實であつた。また明治初期の文壇に於けるユウモリストとして知られて居た齋庭簗村の如きは、其碩、三馬、一九の影響を最も多く受けた。さうした色合は、明治二十五年

頃までは、仄かに一部の作家の上に残つて居たのである。それ等は、西鶴、近松、芭蕉のやうに、明治文壇に宜い意味の影響を與へたことが、極めて少かつた。

(四) 文藝的進歩の五原因と歐米文化

更らに、明治の文學が發達した原因について考へると、凡そそれを五つに分けることが出来る。第一は時勢の變革、第二は歐米文化の流入、第三は民衆生活の進歩、第四は日清戦争、日露戦争の勝利、第五は人材の輩出などである。在來以來明治文學史には明治文學發達の原因を究明して、いろいろの原因を數へてゐる。殊に歐米文化の流入といふ事に力點を附せられてゐるが、何と云つても、それに對して、わが國民衆の自覺、努力が伴はなければならぬ。生

の發展、飛躍がなければならぬ。日本の富強を増進せしめ國民の意氣を昂揚させたところの戦争と勝利とがなければならぬ。さうした環境、雰囲気のうちにあつて、それに適應して胸を伸ばすところの詩人、文士がなければならぬ。即ち私が數へあげた五種の原因が、彼是相俟ち、相依つて、綜合され、融化されたところに、明治文學が發達したのである。

元來、明治文學は、維新革命が產出したものである。江戸末期の廢類文學は、既に行き着くべきところまで、行きつくしてしまつたのであるから、どうしても、新生面を開拓せねばならぬ必然的な勢になつて居た。そこへ勃發したのが、明治維新の革命であつた。勿論、それは、十九世紀初頭に於けるフランス革命のやうな烈しい性質のものではなかつたけれども、日本史上に於ては、空前のものであつた。此の革命によつて、封建制度は全く顛覆して、在來の文化は、半ば以上、破壊されて了つた。そして舊文化に代るべき新文化の建造に着手する時代に入つた。それで、舊

文化の俤は、尙ほ社會の一部に残存しては居たけれども、大抵のものは、新しい地盤の上に築かれることとなつた。政治も、經濟も、教育も、學術もすべて新しい色彩を帯びて現はれて來た。此の際、ひとり文學のみ新しくならぬわけはなかつた。明治文學の萌芽は、維新革命が齎した新文化の一部であつた。

明治維新の日本が、新文化を作り出すに當つて、唯一の目標としたのは、歐米文化であつた。歐洲の文化は、既に戰國時代から、徐ろに日本に流れ入つて居たが、それは、素より微々たるものであつた。幕末頃に一部の知識階級がオランダ語を透ぼして、歐洲文化に接觸して居たが、これとて、素より云ふに足らなかつた。眞に歐米文化が、急激のやうな勢を以て、日本に流入し始めたのは、明治維新の始めからで、其の後も、引續いて、流入して居ることは云ふ迄もない。明治文學の進歩を促すべき絶大な勢力となつたのは、實に歐米文化である。

最初は、主として、英米文化が、わが國に流入したが、其の後、フランス、ドイツの文化も亦流入して、歐米各國の文學や、思潮がわが文壇の人々に強い感銘を與へた。明治文學の黎明は、イギリス文學に親んだ坪内逍遙によつて促進されたのみならず、ドイツ文學の造詣が深かつた森鷗外によつて、一層、向上の機縁を作り出された。フランス思潮に共鳴した中江兆民、ロシア文學に傾倒した長谷川二葉亭、内田魯庵らによつて、わが文學思想は、比較的早く進んだ。それ等は、主として、明治文學の黎明前後の現象であるが、其の後、ゾラに私淑した小杉天外、永井荷風の寫實主義、歐洲大陸文學に親んだ田山花袋、島崎藤村らの自然主義を始め、昭和の今日に至る迄の文壇の新運動は大抵、歐洲文學から得た新しい印銘が原動力となつて起つて居る。ひとり、それは、小説の上のみ限定されて居る現象ではない。戯曲も、長詩——會て新體詩と稱した——も、すべて歐洲文學の影響と刺戟とによつて、發達したのである。今後の日本文學は、或は半ば以上、独自の發達を續けてゆくかも知れないけれども、これ迄の文學は、大體

歐米文學の影響の下に進んで来たのである。

(五) 日本國民の文化的飛躍

だが、それに就て考へねばならぬのは、日本國民の生活が、時代に適應して、漸次に向上したことである。其の文化的能力に於ても、政治、商業、軍事の上に於ても、世界の新風潮に遅れまいとして努力した。これが、何よりも重要な一契點である。たとひ、維新の革命が勃發しても、歐米文化が急潮のやうに流入して來ても、日本國民の文化的能力が、それに適應してゆくことが出来なければ、一切駄目である。ところが、日本國民は、江戸三百年間の平和によつて、日本特有の文化を完成し得たのみならず、外から來る文化的刺戟を巧みに受け入れて、それを十分、咀嚼し、融化してゆく力を持つて居た。それで、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツなどの新文化が一時に流れ入つても、別段、狼狽しなかつた。快活に敏捷にそれを受け入れた。而も其の取捨や、選擇についても、大體の方針を誤らず歐米の物質文明の長所を一切、採り入れて、日本を富強にすることに力めた。それと共に、歐米の精神文明をも吸収して、學術、教育等の刷新を行つた。かうして明治文壇の黎明が始めて見えるまで、日本國民のすべては、日本の新文化を築きあげることには忙はしかつた。かうした空氣の中から、坪内逍遙の『書生氣質』や、長谷川二葉亭の『浮雲』などが出たのである。

文學は、貧弱な國には、決して勃興しない。何となれば、文學の發達を助長すべき機縁に乏しいからである。日本は、既に上下を擧げて、富強に力めた上、日清戰爭に勝ち、日露戰爭に勝つて、更に其の富強の度を加へた。昔にそればかりではなかつた。國民的自負心をも亦増進させた。この事が、文學の進歩の上にどの位有力な影響を與へたか

と云ふことは、日清戰爭、日露戰爭の文學が自ら證明して居るところである。

戰勝が、必然的に文學の進歩を促すかどうかは、一概に斷定し得ないところであるけれども、古來、戰勝後、文學が旺盛となつた國が可なりに多い。ドイツが、七年戰爭の勝利後、レツシング、クロプストツクなどの文豪を出したことや、フランスが、ルイ十四世の時代に全歐に覇たるべき武威を示した際、ラシニス、モリエール、コルネエユなどの偉大な文人を出したことなどを考へると、戰勝は概して文學の進歩を促す原動力となるやうに思はれる。それは、確かに國民的自負心を喚起させるからだと云ふばかりではなく、戰勝から來る經濟上の巨利が、國民の富を増進せしめ、生活を向上させて、社會の好景氣を煽り立てるからである。即ち生活上の進歩と餘裕、精神上の飛躍と自覺とが、相依り、相俟つて、文學上に於ける目ざましい進歩を實現すべき雰圍氣を作り出すために、戰勝後の文學が非常に振ふのである。明治の文學が、著しく進歩したのは、日清戰爭と日露戰爭後の勝利の榮光に輝いた時代であつたことを思ふと、戰勝と文學との關係が、一層、明白に解かれるのである。

(六) 類出せる文壇の人材

かうして、明治の文學は、種々の機縁が錯綜して、進歩したのであるが、それについて、進歩の中心となるべき人物がまた空前に輩出したことを見逃してはならぬ。小説に於ても、長詩に於ても短歌、俳句に於ても、將た戯曲や評論に於ても、いろ／＼の有力な人材が一時に輩出した。評論文の如きは、明治に入つて、始めて進歩したのであつた。それは福澤諭吉によつて始められて、其の後、多くの文人によつて、大成されたのである。單に文藝評論の如き範圍に限定して考へて見ても逍遙、鷗外、忍月、透谷、樗牛、綠雨、嶺雲、梁川、筑水、桂月、操山、抱月と云つたやう

な人々によつて、略ぼ大成されたのである。科學的批評を試みた文藝評論家が出たのは、明治文壇の一特色で、道遙、鷗外の二人は、文藝評論の最初の模型を示した人であつた。そして其の後に續いて、大小の文藝評論家が出たのである。

明治文壇に於て、小説家として輝いた人々は、可なりに多かつた。紅葉、露伴、一葉、風葉、鏡花、柳浪、天外、眉山、春葉、宙外、水陸、蓮花、美妙、獨歩、藤村、白鳥、泡鳴、鷗外、荷風、漱石、虛子、秋聲、花袋らを始め、他にも相應な作家が居た。長詩では、藤村、晚翠、泣菫、有明、白秋、露風らが居た。短歌に於ては、直文、信綱、晶子、寛、薫園、牧水、柴舟、空穂、啄木、善磨、左千夫らが居た。俳句に於ては、子規、鳴雪、虛子、碧梧桐、井泉水などが居た。戯曲に於ては、道遙、櫻痴、默阿彌などを初め、吉藏、雨雀、破笠、綺堂らが居た。評論家方面では、長江、仲、御風、臨川、玉堂なども居た。

以上は、明治時代の人々で、其のうちには、大正時代にかけて活動して居る人々も少くない。だが、大正時代に入ると、作家としての中心人物は、新人によつて、占められるやうになり、評論も、戯曲も、新人の色彩が濃厚になつて居る。谷崎潤一郎、上野小剣の如きは、大正時代に入つて、寧ろ特色を發揮した。だが、それは暫く置いて、明治文壇に輩出した人材が如何に多かつたかと云ふことは、以上、列挙した人名によつて見るも明かである。

要するに、右に挙げた五種の原因と江戸文學の傳統的影響との下に、明治文學の著大な發達を促かして、其餘波が、更に現代文學の發展を促がしたのである。其の作用、關係は、極めて複雑で尙ほ他に小さいいろいろの原因があるにちがひないけれども、大體、以上の通りである。若し小原因の一二を附加するならば、普通教育、中等教育の進歩と普及から來た讀書力の増進や、自然主義勃興前後から、新人が文壇に出る機會と道とが自ら開かれて、政治界、

實業界のやうに老人が跋扈しない事なども數へて差支へないであらう。此の點に於て、文壇は比較的自由的、清新的空氣が、絶えず流動して居るので、これも、文學的進歩を促がす上に相當の効果があつたにちがひないのである。

(七) 文藝的進歩の四期

明治時代に於ける文學の進歩は、前後連続して、有機的關係を保つて居るが、其の進歩の徑路を明かにするには、勢ひ或る區劃を假定せねばならぬ。それで、私は明治初年からその末年に至る迄の文學進歩を四期に分つて説明しようと思ふ。其の第一期は、明治初年から十八九年迄である。第二期は、十八、九年から日清戦争前後迄である。第三期は、日清戦争前後から日露戦争前後迄である。第四期は、日露戦争前後から明治末年頃迄である。此の區劃が當を得て居るかどうか、勿論、見る人によつて、多少の相違がないとは云へないけれども小説、評論を中心として、文壇に於ける主潮の變化に力點を附するとすると、此の區劃が、比較的に妥當を得て居るやうに思はれる。

それで、右のうち、第一期は舊套墨守時代である。第二期は新文學發生の時代である。第三期は寫實主義的過渡時代若くはロマンチズムの時代である。第四は自然主義の時代である。此の區劃は、文學のすべてに亘つて、當てはめ得ないかも知れないけれども、大體、評論でも、小説でも、戯曲でも、長詩、短歌、俳句でも、略ぼ文學界の思潮と相觸れる關係から脱出しなない以上は、大抵、當てはまらう。私は、評論と小説とに重きを置いて、右のやうな區劃を立てたのであるから、時には、俳句、短歌などの方に、當てはまらないこともあるだらう。が、それは、複雑な現代文學の進歩的徑路を明かにする上から、自然、止むを得ないのである。

第一期の前半は、明治文學の暗黒時代、後半は、準備時代とも云ふべき有様にあつた。前半は、明治初年から十年

頃迄である。後半は十一年から十八年頃迄である。前半の時代は、大改革、大動搖の最中で、思想、生活の兩方面で激しい變化と動搖とを續起したから、文學、美術などは、全然、顧みられなかつた。社會では舊分子と新分子、保守派と進歩派との烈しい争ひから、神風連の亂、萩の亂、佐賀の亂などを始め、征韓論を起點として爆發した西南戰爭などがあつて、こつた返した。それと同時に新政府の要路に起つた人々は、政治、財政、司法、軍事、教育、産業等の上に大改革を加へて、有名な廢藩置縣をも斷行した。かうした有様だから、誰も彼れも騷亂と改革とに忙殺されて有爲の人材は皆其の當面の必要な仕事に奔走し、熱中した。それで、文學方面に居たものは舊套を襲ふに過ぎない保守的な人々に過ぎなかつた。其の小説も一九、三馬、春水、馬琴の作風を模倣したもので、何等の新意を認めることが出来なかつた。其の中で、稍目に附いたのは、假名垣魯文位のものであつた。脚本の方では、僅かに河竹默阿彌が居た。彼れは江戸演劇の最後の殿將として、最も光りを放つた。魯文の代表作は『西洋道中膝栗毛』で、一九の「膝栗毛」を模倣したのである。默阿彌の代表作は『三人吉三』『村井長庵』などで所謂白浪物の長所を巧みに發揮したものであつた。

更に廣義に於ける文學の埒内にあつては、成島柳北の『花月新誌』や、福澤諭吉の『世界國畫』及び『學問の勸め』や、中村正直の『西國立志篇』などが出た。また明治五、六年頃に續生した新聞雜誌が通俗的な文學趣味を普及したことも注目し得た現象の一つであつた。要するに、第一期の前半に於ける文學的進歩は、殆ど云ふに足りなかつた。

(八) 第一期の後半に於ける文學

後半に入ると、西南戰爭によつて、多くの不平士族を除き去つて、平民階級の勢力が増したのみならず、一先づ騷

亂を打切つてしまつて、平和な時代に入り始めたところから、文學方面の仕事も幾分か新しい光りの下に蘇生の色を帯び始めて來た。此の時代には、自由民權の思想が中江兆民、板垣退助らによつて輸入されて、それが天下を風靡した。而して新たに政治運動によつて、自己の地歩を占めようとした士族、地主などが蹶起して、到るところに烈しい政治熱を起させた。政治の改革！それが時代の中心興味であつた。此の時勢の傾向に應じて、當時の文壇に流行したのは、勿論政治小説であつた。それに雁行したのは、科學小説であつた。科學小説は、當時、何事にも『文明開化』と云つた人々に對して、歐米の科學思想を傳へようとする一種の啓蒙的意義から相當に流行した。

政治小説には、翻譯と創作とがあつたが、最初、其の先驅となつたのは、明治十二年に出た織田純一郎の『花柳春話』で、それはリットンの作物を譯したものであつた。嚴にいふと、これは政治小説ではなく、才子佳人を中心としたロマンスだが、その中に政黨政治の事などが少しく書いてある所から、政治小説と目されたのである。當時、最も目新しかつた此の種の小説も、畢竟、歐洲文學の刺戟から出たのであつて、藤田鳴鶴の名で出した尾崎庸夫（朝比奈知泉）の『繫思談』も亦リットンの小説『Kenelm Chillingly: his adventures and opinions』を譯したのであつた。此の流行の潮に乗つて、藤田鳴鶴は『文明東漸史』を出し、矢野龍溪は『經國美談』を出し、始めて日本に於ける政治小説の序幕を開いた。明治文學の開山である坪内逍遙も、此の時代にシエクスピアの『シイザア』を譯し、後には流行の潮に乗つて『外務大臣』『内地雜居未來之夢』『京わらんべ』などの政治小説を書いた。

科學小説では、井上勉が譯した『月世界旅行』『海底旅行』と云つたやうなものが出た。其の他山、山、井上巽軒らの『新體詩抄』が明治十五年に出たのは、後の新體詩を興起させる種を蒔いたのであつた。それ等の現象を前半の時代に比較すると、大分、文學界が生氣附いて來たことを示して居た。

○(九) 第二期に於ける文藝

第二期(十八年前後から日清戦争前後迄)に入ると、明治文學は、始めて其の出発點を見出し得た時代となるのである。それは、坪内逍遙が、明治十八年四月に『小説神髓』を出して、馬琴以來行はれて來た勸懲主義を小説界から一掃して、寫實主義を唱へたのに始まるのである。當時歐化思想が日本の上下を風靡して、何事も舶來を尊重した時勢であつたところから、文學も亦歐化的風潮の中に捲き込まれ始めた。そして何等か新しい文學を要求しつゝあつた世間、何等か新工夫を出さうとしつゝあつた若い文學志望者の群は『小説神髓』を讀んで、始めて小説の原理、意義及び創作の方針を知つた。それに續いて逍遙が『書生氣質』を出して、新しい小説の模型を示したので、若き人々は、始めて文學上の自覺を喚び醒まされた。爾來、小説作家は何れも『小説神髓』と『書生氣質』の影響の下に、乃至は歐化的風尚の下に創作することになつた。其の第一に出たのは、長谷川二葉亭の『浮雲』であつた。この『浮雲』こそ、逍遙の小説に對する理論を略ぼ具體化した傑作であつた。それに續いて文學雜誌『我樂多文庫』や、文學雜誌『以良都女』などが出た。『我樂多文庫』は、硯友社同人の機關で、『以良都女』は山田美妙が主宰して居たのであつた。此の期に入つて、小説界の新興氣運に乗り出したのは、硯友社の人々で、それに對したのは、早稻田派(文學界一派)、民友社の人々らであつた。個人としては幸田露伴、内田不知庵、齋藤綠雨、長谷川二葉亭、森鷗外、森田思軒、山田美妙らが一方に雄視して居た。だが、小説界の一半は、殆ど硯友社同人の手に歸した觀があつた。硯友社の首領は、尾崎紅葉で、彼れは、最初、山田美妙と提携したのだが、中途で手を分つて、ひとり、同人中の牛耳を執つた。其の同人には、川上眉山、廣津柳浪、巖谷小波、江見水蔭、石橋思案らが居た。

紅葉は、最初、山田美妙と對立し、後、幸田露伴と對立して、小説界の覇を争つた。紅葉の出世作は『新著百種』に出した『色懺悔』であつた。美妙は、紅葉に先立つて短篇集『夏木立』を出し、續いて『國民之友』に『胡蝶』を出した。露伴は、紅葉と前後して『都の花』に『露團々』を出した。此の三人が文壇の新人として、新しい小説界の曉鐘に促がされて現はれたのは、當時の鉅觀だつた。紅葉は、艶麗な著想と文致とを以て、美妙は斬新な結構と文體とを以て、露伴は高邁な思想と熱氣ある文章とを以て、相對峙した。

ところが、美妙は、途中、落伍してしまつた。結局、紅葉對露伴の時代が來た。二人は、自然、競争の形となつたが、彼我共に西鶴の文致に共鳴して、新しい雅俗折衷の文體を始めたのは同じだつたが、思想、傾向は、全くちがつて居た。紅葉は其の小主觀から出た色慾の世界、戀愛の世界を描くに力めたが、露伴は佛教思想から流れ出た意志の世界、狂熱の世界を描くに力めた。紅葉が『伽羅枕』、『二人女房』などを出すと、露伴は『五重塔』、『流佛』などを出して、一歩も譲らなかつた。

紅葉、露伴以外に於ては、鷗外の『舞姫』、逍遙の『細君』、柳浪の『殘菊』、眉山の『墨染櫻』、箕村の『むら竹』、綠雨の『かくれんぼ』、浪六の『三月月』、樗牛の『瀧口入道』などが、有力な小説として知られた。翻譯では内田不知庵(後の魯庵)の『罪と罰』、『二葉亭の』、『あひゞき』、『めぐりあひ』、鷗外の『埋木』、『悪因縁』、『地震』、思軒の『探偵ユーベル』などが宜かつた。殊に『あひゞき』は、ツルゲエネフの『獵人日記』の一節を巧みに譯したものである。『埋木』は、オシツブ・シュビンの作を親切に譯したものであるとして、當時文壇の若い、目ざめた人々に深甚な印象と感化とを與へたのであつた。他に遊柿園の歴史小説、涙香の探偵小説などが、一般的な讀物として、認められたが、文學的價値は少かつた。

文藝批評が旺んになり始めたのは、此の時代であつた。「早稲田文學」「國民之友」「橘草紙」「文學界」などが、前後して出て、何れも文學評論を掲げた。創作と評論とは相俟ち、相依つて、文壇の進歩を實現すべき二個の支柱である。大正、昭和に入つてから、評論が不振で、權威のないものになつて了つて居るけれども、當時は、寧ろ評論が旺んだつた。それは、一流の大家逍遙と鷗外の如き人が、評論壇に陣を張つた爲めでもあつた。此の二家が、沒理想論について、互ひに論戰を始めて、其の學殖、見識を示したことは、當時の鉅觀であつた。逍遙はあく迄も、イギリス風で科學的批評を尊び、鷗外はあく迄も、ドイツ風で哲學的批評を好み、其の對照に深い興味を惹いた。その他、透谷、不知庵、忍月、綠雨などの人々も評論壇に新しい活氣を加へた。それから傍系としての現象には、史傳が二十七八年頃に流行した事や、歐化思想極盛に對する反動の現はれとしての國漢文の新研究、東洋哲學の推究及び美學に關する新説の發表と云つたやうなことも行はれた。

かうして居るうちに、日清戰爭となつた。それは、當時にあつては、空前な大きな出來事で、國家の運命を賭するに云々上は人心が緊張した。而して國家思想が、それと共に濃度を加へて來た。愈々日本が見事に支那に勝つと、國民的自尊心が頭を擡げて、世界に於ける日本の地位、東亞に於ける日本の使命と云つたやうなことが考へられて來た。また財界は好況を示して、人氣が引き立つた。其の影響は、自然、文學の上にも及んで、こゝに一轉機を劃すべき時が來た。第二期の文學的進歩は、大要、かうした具合であつた。」

○(一〇) 第三期に於ける文藝

第三期(日清戰爭前後から日露戰爭前後迄)に入ると、文壇の面目は、半ば以上一新されて、若い人々が、續々

出て來た。蓋し前期の文壇に行はれた小説を一貫して居た寫實主義は、皮相な狭小なもので、其の題材も人生と淺交渉なものが多かつた。大抵、作家の小主觀や、嗜好を土臺として作りあげられた内容を持つたのが多かつた。かうして、殆ど千篇一律に流れつゝあつたところから、評論家のうちには、それを非難する聲が高くなつて來た。勿論、撥鬚小説の名を得た浪六物や、歴史物を中心とした傳奇や探偵小説などは、左様した缺陷を埋めるために出たのだが、純正な意味に於ける藝術的色彩に缺けて居たので、物足りなかつた。そして文藝評論家は當時、思想界に起りつゝあつた日本主義の運動、世界主義の提唱と云つたやうな實際的な思想問題を考慮のうちに入れると共に、當時の作家に向つて、より深刻な小説、哲學的背景を有する深味ある小説乃至國民的小説と言つたやうな物を要求して止まなかつた。かうした要求に應じて、先づ現はれたのが、觀念小説や、深刻小説であつた。

觀念小説、深刻小説の先驅者は、廣津柳浪、泉鏡花、川上眉山などであつた。柳浪は明治二十八年に出世作『黒蜥蜴』を出して以來、流行兒の一人となつて『河内屋』『今戸心中』『畜生腹』『青大將』などを出して、殆ど紅葉を壓倒しようとする勢を示した。

泉鏡花は、紅葉の門人で、硯友社に於ける第二期の出身であるが、其の奇才は、早くも顯脱して、二十八年に『外科室』『夜行巡査』の二篇を出して、觀念小説の模型を示した。彼れは、これに依つて、文壇に認められたので、愈々力を其の方に傾倒して『化銀杏』『海城發電』などを出したが、三十年に公にした『照葉狂言』、三十一年に書いた『辰巳巷談』などに至つて、其の長所を遺憾なく發揮して、流行兒の一人に數へられて來た。

川上眉山は、二十八年に『うらおもて』を出して、觀念小説中の優秀作と認められた。彼れは、それに次いで『賤橋』や『白藤』や『暗潮』などを書いた。かうして、柳浪、鏡花、眉山の三人は、觀念小説の先驅たる觀があつた。

ところが、同じ硯友社同人でも、江見水蔭は、また別な軌道を歩いて居た。彼れは『炭焼の烟』や『女房殺し』などを書いて、いくらか清新な空想的な作品を見せた。だが、すべてに互つて好奇心を動かし易かつた彼れは、既に此の頃から、邪徑に陥らうとする傾向がほの見えて居た。

以上の諸家の他に文壇に出て、新人として活動したのは、樋口一葉、小栗風葉、小杉天外、後藤宙外、島村抱月、田山花袋などであつた。樋口一葉の作風は、極めて眞面目な態度の下に、人生を觀照して書いたところがあつた。在來の硯友社派らしいところもなければ、觀念派らしいところもなかつた。其の代表作『たけくらべ』『十三夜』などは人生の不如意な一面が、さながらに出て居た。小栗風葉の作風は、紅葉に似たところがあつて、一體に濃艶で、才氣が溢れて居た。其の出世作は、三十一年に出た『戀慕流し』で、其の作を通じて流れて居るロマンチックな情熱は、當時の若い人々を動かしした。『十七八』『鬘下地』なども、濃艶を極めて居た。小杉天外は、ゾラに私淑して三十三年に出世作『初姿』を出した。そして彼れが主唱したゾライズムは、一時、文壇を動かしした。後藤宙外は、心理描寫を以て優れて居ると見られた。『思ひさめ』『ありのすさび』『闇のうつつ』などは、彼れの特徴を示したもので、何れも、二十八、九年頃に出た。島村抱月は『めをと浪』『墨繪草紙』などを出して作家としても、確かな手腕を有することを認められた。田山花袋は當時、文壇の一隅に介在して、戀愛小説に於て一特長を有した作家として稍認められたに過ぎなかつた。

觀念小説が行詰ると、時代精神論や、社會小説、家庭小説の呼び聲が起つた。それは當時の社會に於ける強い現實的傾向と一脈相通じたものであつた。新進作家の群は此の呼び聲に應じて廣い意味での社會小説に筆を染めた。風葉の『政鷲』、宙外の『腐肉團』などが、それだつた。また文壇の先輩だつた内田不知庵も、魯庵と號を改めて『片鴉』

『霜くづれ』『暮の二十八日』などを公にした。次ぎに家庭小説は、今日の通俗小説と同じ味の物で、藝術味の乏しいものであつたけれども、一時、流行を來たしたところから、徳富蘆花の『不如歸』、菊池幽芳の『己が罪』、中村春雨(吉藏)の『無花果』などが出た。それ等は、畢竟、時代の現實的傾向が求むるところに應じて出たのであるが、概して皮相に流れて、生きた人生に觸れたところが見出されなかつた。時代は、もつと深く、鋭く現實の人生に觸れたものを要求して止まなかつた。けれども作家のうちに、それに適應し得るものは、一人も居なかつた。

以上のやうな形勢であつたから在來の有力な作家は、何れも行詰つた形で煩悶しつゝあつた。紅葉は、頻りに批評家から嘲罵されたのを憤つて、二十九年に『多情多恨』を公にした。其の文體、内容も、彼れの在來のものに比較して、遙かに優れて居た。平淡で周匝な文致、平凡な些末事にひとしい事件と云つたやうなところが、殆ど作爲のあとを除くようにして老巧に書かれてあつた。彼れは更に三十年に入つて『金色夜叉』の長篇に筆を著けたが、これは、當時の批評家の要求や、社會の傾向や、時代精神などを一つに融化させようとして失敗した作だつた。けれども彼れが努力は、慥かに尊重された。露伴は、紅葉よりも一層行詰つた形で『新浦島』や『二日物語』を書いたが、時代思潮と觸れないやうなものだつた。最後に『天うつ浪』で復活しようとしたが、未完の儘、筆を捨てた。かうした間にあつて長谷川二葉亭は、ツルゲエネフの傑作『浮草』を出して、悔り難い、獨自的な翻譯の筆を見せた。坪内逍遙は劇文學の方面に向つて、『桐一葉』『牧の方』『春手鳥孤城落月』などの新史劇を發表して、脚本革新の先聲を爲した。鷗外は『即興詩人』の翻譯乃至『玉手匣兩浦島』の劇作などに於て、彼れの存在を明かにしたのである。

かうして、當時の文壇は、第二期に比較すると、餘程、進歩して、色彩が多様になつて來て居た。勃興の氣勢にあるものは、ひとり小説ばかりではなかつた。劇界に於ける新運動は、既に二十八年頃から、有力な芽を吹きかけて居

た。俳句革新、長詩革新、短歌革新の新運動も亦強い氣勢を示して來た。文藝批評も抱月、樗牛、嶺雲、桂月、及び『文庫』の江東(千葉龜雄)、『新聲』の梅溪(高須)らによつて勃興した。思想界に於ては、日本主義や、世界主義の新提唱を聞くと共に、一面、現実的で、一面、ロマンチックな傾向が鮮かに流れて居たことも認めねばならなかつた。それ等の現象を分析し、統合することは、極めてむづかしい。

だが、強ひて系統的に一つに纏めて見ると、社會に於ける強い現實的傾向に根ざした倫理研究、道德研究が行詰つて、懷疑的な風潮が旺になると、個人主義、天才主義を背景としてロマンチズムの潮流が、時人の不満と苦悶とを除かうとして、第三期の後半即ち明治三十三年頃から横流し始めて日露戦争前まで続いた。在來の劃一的教育の下に行はれた凡才主義、國家主義の名の下に抑へ附けられた個性、それ等の弊害を一掃し去るために、天才主義、個人主義が力説された。其の主唱者は、高山樗牛で、彼れの言説を有効に裏づけるべく、ニイチエ思想を鼓吹した。美的生活、本能満足説なども、樗牛が真先に唱へたのであつた。

此のロマンチズムの時代は、やがて詩歌の時代であつた。短歌革新運動が先づ鐵幹、晶子、薰園、柴舟、信綱らによつて行はれた。長詩の革新運動は、藤村、晩翠、泣菫、有明、羽衣らによつて行はれた。俳句革新運動は子規、鳴雪、虚子、碧梧桐らによつて行はれた。劇界革新運動の烽火は、逍遙、鷗外、月郊、春曙らによつてあげられ初めた。

ところが、樗牛の死と共に、それに代つて一時網島榮川の『見神の實驗』などに於ける詩的宗教思想が勢力を得たが、間もなく、日露戦争が起つて、今までロマンチックな、美しい空想を喜んだのを一掃し、自然科学の精神によつて、直ぐに現實の中に入つて、生の眞を掴み來らうとする自然主義運動が漸く行はれ初めようとしつゝあつた。

かうした有様が、第三期に於ける文學的進歩の行程であつた。

(一) 第四期の時代に於ける文藝

第四期(日露戦争前後から大正末年迄)は、明治文學史に於ても、最も重要視すべき文學革新の時代である。即ち自然主義の文學が、在來の文學に取つて代つた時代である。高山樗牛の言説其の他によつてロマンチズムの時代、スツルム・ウント・ドラングの時代が現出した後に自然主義が起つた行程は、歐洲に於ても、フランスの文學が、ユウゴオのロマンチズムから、進んで、ゴンクウル兄弟、フロオベルらの自然主義に赴いたのと同じ趣が見える。

日露戦争は、一面、國民の自尊心を高調したけれども、他面、悲痛な現實の姿をまさしく國民の前にさらけ出した。徳富蘆花が唱説した『勝利の悲哀』と云ふことが、内面的な考へを或る一部の知識階級の人々に起させた。さうした眼で、此の現實を凝視すると、いろ／＼の不满や、不平が湧いてくる。其の不满不平を取り除いて、充實した新しい生活に入るには、在來行はれて居た虚偽の道德、形式に囚はれた舊習を一掃して、赤裸々な眞實に直面するの必要が起つてくる。これは、ひとり、當時の社會や、生活や、思想の上に感ぜられたばかりでなく、文學上に於ても、亦同様に感ぜられた。そこに自然主義が勃興すべき可能性乃至必然性があつた。

だが、他にも、自然主義が發生せねばならぬところのいろ／＼の原因があつた。それは拙著『明治大正五十二年史論』のうちに於て説述した通り、思想的方面では(一)科學尊重の精神が擴充された爲め(二)プラグマチズムや、ヒュウマニズムの影響を受けた爲め(三)在來、行はれた詩的宗教思想や、唯心的哲學や、形式道德に満足しないで直ぐに個人的自覺の徹底境に入つて、人生の眞を把握せんがためであつた。更に文學的方面では(一)歐洲大陸文學

の影響を受けた爲め(二)在來の遊戯的、空想的の弊に囚はれたり、小主觀に偏したり、作爲のあとが著しかつたりした文學を破却して、眞面目に赤裸々の人生と現實とを虚飾なく表現しようとした爲めであつた。

以上のことについて註脚を加ふれば、思想的方面では、十九世紀から二十世紀にかけて、科學が最も尊重された結果、精密な窮理的方法から出發した機械的、唯物的な人生觀が強い勢力を持つて來た。それで人生現象を研究するにも一定の方式を以て、科學的に見ようとする風が旺んになつて、善よりも、美よりも、第一に眞を把握せねばならぬと云ふ歸結に到達した。自然主義の根柢は主としてこゝにあつた。それに一派の生氣を加へたのは、イギリス、アメリカなどで起つたヒュウマニズム、プラグマチズムであつた。此の學派は、實際生活や、現實生活を何よりも尊重せねばならぬことを力説して、根本から、現實生活に突き入らねばならぬ精神を高調したのである。

文學的方面について云へば、明治の文壇はいつも、歐洲文學の輸入によつて、新しい刺戟を得て居たのであるが、日露戦争前後の時代に、フランスのゾラ、バルザック、フロオベル、モオパッサン、ゴンクウル兄弟を始め、ドイツのズウデルマン、ハウプトマンなどの作品が、旺んに紹介されたことが、日本の少壯な文學者の一部を刺戟して、自然主義思潮に感染させたのである。明治文壇に於ける自然主義の主唱者とも云ふべき田山花袋は、夙に歐洲文學を熱讀して、新しい文學的風潮に接觸して居たところから、明治三十五年頃『アカツキ叢書』へ『重右衛門の最後』を書く前に文學雜誌『新聲』誌上で、歐洲に於ける自然主義の文學を紹介すると共に、露骨な描寫の必要を説いたのであつた。

けれども當時は、未だ花袋の説に耳を假さうとしなかつた。自然主義が眞に勢力を得るやうになつたのは、日露戦後のことで、三十九年頃だつた。最初は、單に文學上に於ける新運動に過ぎなかつたけれども、其の舊套打破、個性

發揮の精神は、思想界、教育界などにも、大きい波動を及ぼした。窮屈な範疇に嵌つた教育や、超越的に窮屈になつた哲學や、舊生命の殘骸に過ぎない宗教などを破却して、もつと、新時代に適應した自由な、自然な生氣あるものしようとした。それは、自然主義の長所であつたが、一面に於て、其の無理想、無解決を標榜した機械的の人生觀が、自棄的、虚無的な思想を後に至つて誘致したのは、一つの弊害であつた。

自然主義を基調とした文學が文壇を占領し始めたのは、明治三十九年頃から四十年にかけてであつた。三十八年には、先づ自然主義の先聲を爲した國木田獨歩の『獨歩集』が出た。其の翌年には、藤村の『破戒』が出た。續いて、花袋の『蒲團』、白鳥の『紅塵』、青果の『青果集』などが出た。次いで四十年には、文壇の一大廻轉が行はれた。自然主義是非の論が、到所に起つた。島村抱月、長谷川天溪、岩野泡鳴などは、自然主義に味方した。後藤宙外らは、非自然主義を主張して、自然主義の上に烈しい論難を加へた。けれども時代精神の歸嚮するところは、自然主義の勝利に歸して、二十年來、文壇を固持して居た硯友社派は、大抵文壇の外廓へ押し出されて、新しい作家が、續々、頭角を擡げ出して來たのである。

此の文壇の廻轉期に於て、最も目ざましく働いた人々には、藤村、花袋、白鳥、青果を始め、風葉、秋聲などが居た。風葉は『青春』『戀ざめ』に於て、秋聲は『出産』などに於て、自然主義運動に力を添へた。次ぎに評論に於ては抱月の『囚はれたる文藝』、天溪の『幻滅時代の藝術』、泡鳴の『神祕的半獸主義』などが、自然主義を高調した。殊に抱月は、其の後も、續々、此の方面に於ける有力な論文を發表して、自然主義確立のために健闘した。かうして、自然主義は、文壇を風靡して、一期を劃するに至つた。

長詩(新體詩)の如きも、矢張、自然主義の影響の下に起つた。相馬御風、三木露風らは、現實に即した詩を作つ

た。口語詩の提唱なども、矢張、自然主義運動と、一脈相通じた點があつた。北原白秋らが、都會情調を歌ふやうになつたのも、上田敏が民論詩のことを唱へ出したのも、矢張、歸するところは、自然主義的風潮に共鳴した爲めだつた。短歌、俳句なども、勿論、長詩と同じやうな影響を蒙らざるを得なかつた。

かうして、自然主義の勢は、愈々旺んになつて、第四期の後半期には、藤村の『春』と『家』、花袋の『田舎教師』や『生』、『妻』、『縁』などの三部作、獨歩の『濤聲』、『第二獨歩集』、秋聲の『微』、『足痕』、泡鳴の『耽溺』、虚子の『俳諧師』、『二葉亭の』、『平凡』などが出た。それと同時に、自然主義の脈を繼承した新しい作家が續々出て、文壇は、潑刺たる生氣に満たされたのである。

當時、自然主義運動と全く離れて、別な道を歩いて居た人々に夏目漱石、森鷗外、高濱虚子、永井荷風などが居た。漱石は『吾輩は猫である』の一作によつて、大名を文壇に馳せて以來、『虞美人草』、『三四郎』、『門』などを出して、低徊派の首領となつた。虚子は『俳諧師』を書いて、作家としての力量の優れたことを示し、鷗外は『ギク』、『セクスアリス』、『あそび』、『青年』などで、其の老練な技巧を見せた。荷風は都會人の、享樂的傾向を示した作『あめりか物語』、『歡樂』、『冷笑』などを出し、荷風については谷崎潤一郎などが擡頭しはじめた。かうして自然主義を中心とした文壇も漸く行詰りを打破すべく、おのづから分裂しようとするに至つた。

評論では、此の後半期に相馬御風、片上伸などが、抱月の麾下にあつて健闘した。生田長江も亦氣の利いた批評を書き、阿部次郎、田中王堂なども新生命を論壇に注入した。が、抱月が此の時代に於ける覇者であり、リイダアであつた。詩歌の方面は、一體に稍沈靜して、蒲原有明、三木露風、北原白秋、石川啄木、吉井勇、前田夕暮、若山牧水、金子薫園、土岐哀果などが、最も活動して、詩壇を賑はした。

(二二) 劇界の新運動

小説界に於ける自然主義運動の花々しかつたに對して、少しも譲るところがなかつたのは、此の期に於ける劇界革新運動であつた。其の先驅となつたのは、坪内逍遙が實際上の指導者をした文藝協會であつた。當時、逍遙は、三十七年に『新樂劇論』や『新曲浦島』を發表して、劇壇の注目を惹いたが、更に三十七年は『新曲赫哉姫』を出し、續いて、三十九年に文藝協會の發會式を舉行した。其の主なる演技は雅劇『妹背山』、史劇『孤城落月』などであつた。同じ年の十一月には、歌舞伎座で、第一回公演を催はして『桐一葉』や『ゼニス商人』などを上演した。此の風潮に刺戟されて『東京毎日』の文士劇が第一回公演を開いた。

それ等と併行して、新しい脚本も續々出て來た。中村吉藏の『牧師の家』、佐野天聲の『意志』、『大農』、山崎紫紅の『七つ桔梗』、青果の『第一人者』などが其の主要なものであつた。それらの人々に續いて、新しい劇作家の群も、頭角を擡げ出した。秋田雨雀、長田秀雄、木下杢太郎、楠山正雄、吉井勇などは、何れも清新な内容と技巧を示した。

それと前後して、文藝協會の新運動は、著々成功して、イブセンの『人形の家』や、ズウデルマンの『故郷』などを上演すると共に、東儀鐵笛、松井須磨子、土肥春曙などの新しい優人を育てあげた。文藝協會に對して稍別な方向を執つて、演劇革新を企てたのは、市川左團次、小山内薫の自由劇場であつた。其の第一回公演には、イブセンの『ボルクマン』を演じ、第二回には、エデキングの『出發前半時間』、鷗外の『生田川』、チエホフの『犬』などを演じて、若い人々に強い共鳴を起させた。その他、新時代劇協會、新社會劇團、土曜劇場、東京俳優學校の試演などが、新劇發達に身方して、相當の効果を收めた。さうした新運動に刺戟された尾上菊五郎、中村吉右衛門らは、近松劇の

新演出などを試み、川上貞奴や、帝國劇場の當事者などは、女優の養成に力を入れて來た。

以上は、第四期に於ける文學的進歩の概要である。小説も、長詩も、脚本も、劇壇も、評論壇も、多事を極めて、其の現象が極めて複雑である。明治文學史上に於て、これほど緊張した時代は前後にないと言つて宜い程だ。すべてが眞剣になり、眞面目になり、内部生命の充實を尊重して來たことが、際立つて見えて來たのである。

以上の如く、明治文學の全貌は四期に分たれるが、大體に於いて、この四十五年間を通じて、歐化的傾向が著しい。勿論、歐化といふことが、ある場合には、必然的であらねばならなかつたが、少しく、それに囚はれ過ぎた氣味がある。けれどもこの進歩の一半は歐化を一主因としたにちがひなかつた。この意味からすれば、大正・昭和の時代は兎も角、明治時代において、文學の歐化は、ある程度迄、容認しなければなるまい。

第一期 舊套墨守時代

第一章 英米功利思想の流入と啓蒙運動

(一) 大變革の時代

明治維新の夜は略ぼ明けはなれて、日の出前が近附いたが、文學の日の出前は未だ來ないと云ふのが、第一期に於ける前半（明治元年から十年迄）の光景であつた。維新革命によつて、舊制度、舊文物の大半が破壊されて、新文物、新制度を打建てなければならぬ時代には、先づ政治、經濟其の他、實生活に必要な新知識の需要が切に感ぜられる。一口に云へば、日本を富強ならしむるため、文明開化の新時代を造る必要に迫られた。

明治の新政府は、今まで行惱んで居た對外關係を解決して、全然開港主義を執ると共に、有名な五箇條の詔勅を奉戴して、政治的、法制的、物質的大改革を始めた。勿論廢藩置縣が斷行される迄は、新政府も安心して、新しい仕事が出来なかつたが、それが斷行された後は、どし／＼改革の歩を進めた。その勢は、實に急激なものだつた。

新政府の要路に起つた人々は、先づ政府を維持してゆく基礎とも云ふべき財政上の紊亂を整理して、大きい改革を加へた。次に軍事上の革新を企てた。徴兵制度を確立すると共に、海軍條例を制定した。教育上に於ては、小學校の創設や、義務教育の方針を定めた。法制上に於ては、改定律令を公布して、新しい民法、刑法、商法などを作つた。改革と創設とは、尙ほ續々出て來た。新政府は、在來の階級制度を打破つて、四民平等を宣すると共に、穢多非人の稱號を撤廢して、普通の平民に伍せしめた。また平民と華族及び士民と外人との結婚を許可した、百姓町人にも、苗字を呼ぶことを許した、人民の土地賣買を許して、其の所有權を認めた。斷髮令と前後して、士族の脱刀隨意を布

告した。

更に物質文化を象徴した電信の基礎が確立した。京濱間に鐵道を布設して、汽車が其の間を走り始めた。比較的精密で便利な太陽曆が採用された。新聞雑誌が次第に發行される、留學生が歐米へ出かける、元老院や大審院が設けられると云つた風で、改革と創設とが、どの方面にも併行して續いた。

以上の改革、創設は、大抵、歐米文化のうちに、其の範を求めたのであつた。陸軍は、フランス式で、海軍は、イギリス式であつたやうに、教育は最初、アメリカ式を學んだ。文藝が歐米の感化を絶えず受けたやうに、政治、經濟、教育、學術も、矢張、歐米の感化を受けざるを得なかつた。そして、その改革のうちで、特に重要視せねばならなかつたのは、四民平等を布告した事と徴兵制度を確立した事であつた。士族の特權は、それがために大半を失つて、平民階級の權利が、一層、伸張されるやうになつた。軍隊が士族のみによつて組織された時代は、これと共に過去の夢となり始めた。百姓でも、町人でも軍隊の一員として、護國の任務に當るべき新しい時代が來た。

此の新しい時代に適應してゆくために、どの人々も忙はしかつた。文明開化と富國強兵と云ふことの前には、誰も彼れも夢中だつた。さうした中に、士族階級の大半が、改革の氣勢に反抗しようとする景色を示して、新舊思想の衝突が、到るところに行はれて居た。が、保守主義による舊勢力は、時代の潮に逆行するものであるから、彼等の大半は西南戦争と前後して亡びてしまふか、屏息してしまつた。進歩主義による新勢力は、急潮のやうな勢で、全國に漲つた。文明開化の聲は、到るところに響き渡つた。富國強兵の叫びは、到るところに聞えた。

かうした多忙な變革時代に當つて、文藝が閑却されたのは、止むを得ないことであつた。實利思想の前には、文學も、美術も、何等の價値を認められなかつた。政府は、新道徳や、新倫理や、新藝術を得るよりは、主として、實利

を眼目とする學問を要求した。物質上に於ける文明の利器をのみ要求した。一般の民衆も亦それに共鳴して、電信や、汽車や、汽船や、石版刷の洋畫や、ブリキ製、ガラス製の日用品を嘆稱すると云つた風だつた。洋服と帽子と牛肉とは、當時の新人が、最も誇りとしたものであつた。今日から考へると、不可解のやうであるけれども、新しい文化を象徴したいろ／＼の器具や、服装が、好奇と珍重との念を以て、歡迎されたのは進歩的な異國情調を愛して來た日本國民としては、當然のことであつた。彼等は、争うて、外來の新刺戟に適應したのみならず、それをわが物として、消化しようと思つたのだ。

(二) 英米功利思想の流入

當時、性急に文明開化を實現しようとするところの時代精神の要求に應じて、澎湃とした大波のやうに入り來つたのは、實利を主眼としたイギリス思想、アメリカ思想である。蓋し江戸幕府時代に於ける歐洲文化は、主としてオランダ人の手によつて、日本に傳へられたけれども、幕末時代に入つて、アメリカの水師提督ペリイが、日本へ來てから、アメリカの文化が、自然、わが國に流入した。それと共に、東西兩洋を通じて、一番廣大な版圖を擁して、世界第一の海上王と稱せられて居たイギリスの國語が、最も廣く用ゐられて居た關係からと、伊藤、井上らの維新元勳の人々が、イギリスへ早く留學した關係からとによつて、イギリスの文化が、アメリカ文化と前後して、わが國に流入した。そしてオランダの勢力は、全く一掃されてしまつて、アメリカとイギリスとが、文化的に日本に深く影響すると云つたやうな有様になつて來た。

それに明治初期の日本が、眞先に求めて居たのは、實利的文化で、アメリカ、イギリスから流入したのも亦それに

適應するところの實利思想、實利的文化であつたところから、双方、びたりと一致した趣があつたのだ。かうした時代の潮勢に乗つて、アメリカ文化、イギリス文化を鼓吹したのは、慶應義塾の創設者である福澤諭吉及び同人社を立てた中村敬宇の二人である。

福澤諭吉は、天保五年十二月十二日、豊前中津奥平藩に生れた。彼の父百助は士族中の下級に居たが、人物、學問は、相當に優れて居た。「福澤自傳」のうちに「其書讀したものを見れば、眞實正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で誠意誠心、屋漏に愧ぢすといふこと許り心掛たものと思はれるから、其遺風は自から私の家には存して居なければならぬ」とあるのを見ても、略ぼ其の人物がわかる。福澤は、安政元年二月、二十一歳の時に、オランダの書物を讀まなければ、西洋の文物が一向わからぬと痛感して、大阪に出て、緒方洪庵の塾に入つて、オランダ語を學習した。其の後、安政五年、二十五歳の時、江戸へ出て、苦心して、イギリス語を學んだ。かうした素養を積んで、翌年、幕府の使節に隨つて、アメリカに行き、後、歐洲を巡遊して歸朝、慶應三年、またアメリカへ赴いて、歸つてから、慶應義塾を立てた。明治三十四年卒去。

福澤諭吉は、明治時代に於ける豫言者であり、改革者であり、平民的學者であり、平民的文人であり、また獨立自尊の精神を體現した大平民であつた。彼れは、新しい日本が、どう云ふ方針を執つて進むべきかを豫言すると共に、どう改革すべきかを教へた。それがために、彼れは等身の著述を世に出した。彼れは慶應義塾に於ける多くの學徒を育てあげた。教育と著書との二面を通じて、彼れは、イギリス、アメリカの新文明を鼓吹した。また峻烈な言語、文章を以て、舊道徳、舊風俗、舊習慣を破壊するに力めた。

(三) 福澤諭吉の文明觀

福澤の目的、主眼は、日本が、歐米と同じ水平線に起つを得べき文化を具へさせようとする上にあつた。即ち彼れ

が、其の著書のうちに於て、屢々、繰返したところの『文明』の根基を日本に植へつけようとすることを第一の任務だと感じた。其の『文明』は、當時の政府が、考へて居たやうな武力的乃至物質的のものばかりではなかつた。その上へ更に『文明』そのものを生み出す根源であるところの精神文化を加へたものを意味して居た。彼れは、有形の文明を愛しないではなかつたが、より多く無形の文明を愛した、物質文明よりも、精神文化を重く見た。

福澤を解しないものは、彼れは唯物的人物だと遠斷して、只管物質文明を高調したやうに思ふけれども、彼れの本心は、主として精神文化を高調しようとする上にあつた。彼れは『文明論之概略』中に於て「近來我國に行はるゝ西洋流の衣食住を以て、文明の徴候と爲す可きや、斷髮の男子に逢て、これを文明の人と云ふ可きや。肉を喰ふ者を見て之を開化の人と稱す可きや。決して然る可らず。或は日本の都府にて、石室鐵橋を模製し、或は支那人が俄に兵制を改革せんとして、西洋の風に倣ひ、巨艦を造り、大砲を買ひ、國內の始末を顧みずして、漫に財用を費すが如きは、余輩の常に悦ばざる所なり。是等の事物は、人力を以て作る可し、錢を投じて買ふべし。有形中の最も著しきものに、易中の最も易きものなれば、之を取るの際に當ては、固より前後緩急の思慮なくして可ならんや。必ず自國の強弱貧富に問はざる可らず。即ち或人所云の人心風俗を察するとは、此事なる可し。この一段に就ては、余輩固より異論なしと雖ども、或人は唯文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨て、問はざるものゝ如し。蓋し精神とは何ぞや、人民の氣風即是なり」と云つて、先づ精神文化に力點を附すべき旨を主張して居る。而して更に一步を進めて「此氣風は賣る可き物に非ず、買ふ可き物に非ず。又人力を以て、遽に作る可きものに非ず。洽ねく一國人民の間に浸潤して、廣く全國の事跡に顯はるゝと雖も、目以て其形を見る可きものに非ざれば、其存する所を知ること甚だ難し(中略)文明の精神とは、或はこれを一國の人心風俗と云ふも可なり。これに由て考ふれば、或人の説に西洋の文明

を取らんとするも、先づ自國の人心風俗を察せざる可らずと云ひしは、其字句足らずして、文明ならざるに似たれども、よく其意味を碎いてこれを解く時は、即ち文明の外形のみを取る可らず。必ず先づ文明の精神を備へて、其外形に適す可きものなる可らずとの意見を述べたるものなり。今余輩が歐羅巴の文明を目的とするに云ふも、此文明の精神を備へんがために、これを彼に求めるの趣意なれば、正しく其意見に符合するなり。唯或人は文明を求めるに當て、其形を先にし、忽ち妨礙に逢て、其妨礙を遁るゝの路を知らず、余輩は、其精神を先にして、豫め妨礙を除き、外形の文明をして入るに易からしめんとするの相違あるのみ」と云つて居るのを見ても、福澤の意あるところがわかる。此の精神文化と云ふことは、彼れが『學問のすゝめ』に於ても亦力説した點であつた。

彼れが、尊重したところの精神文化は、智徳そのものであつた。勿論、其の唱説して居る智徳は在來のやうなものではなくて、そこにイギリス流の新解釋が施されてあつた。彼れは、それに就て『文明論之概略』に於て「徳とは、徳義と云ふことにて、西洋の語にて「モラル」と云ふ。「モラル」とは心の行憲と云ふことなり。一人の心の内に慊くして、屋漏に愧ざるものなり。智とは智慧と云ふことにて、西洋の語にて「インテレクト」と云ふ、事物の考へ、事物を解し、事物を合點する働なり。又此徳義にも、智慧にも、各二様の別ありて、第一貞實、潔白、謙遜、律義等の如き一心の内に屬するを私徳と云ひ、第二廉恥、公平、正中、勇強等の如き外物に接して、人間の交際上に現はるゝ所の働を、公德と名く。又第三に物の理を究めて、之に應ずるの働を私智と名け、第四に人事の輕重大小を分別し、輕小を後にして、重大を先にし、其時節と場所とを察するの働を公智と云ふ」と説いて居る。福澤が道徳を公德と私徳、公智と私智とを區別したのは、當時に於て、新しい、進んだ考へだつた。而して彼れは、近代主義の傾向を追うて、特に公智を第一に尊重した。知識的と云ふことは近代主義の一大要素である。

それで、彼れは、公智を尊重する理由に就て「徳義は一人の行ひにて、其の功能及ぶ所は、先づ一家内に在り（中略）智慧は則ち然らず。一度び物理を發明して、これを人に告ぐれば、忽ち一國の人心を動かし、或は其發明の大なるに至ては、一人の力よく全世界の面を一變することあり。「ゼームス・ワット」蒸汽機關を工夫して、世界中の工業これがために其趣を一變し、「アダム・スミス」經濟の定則を發明して、世界中の商賣これがために面目を改めり。其これを人に傳るや、或は言を以てし、或は書を以てす可し。一度び其言を聞き、其書を見て、之を實に施す人あれば其人は正しく「ワット」「スミス」を生ず可し。其傳習の速にして、其行はるゝ所の領分の廣きは、彼の一人の徳義を以て、家族、朋友に忠告するの類に非ず」と云つて居る。勿論、彼れは「私徳は地金の如く、聰明の智慧は細工の如し」と云つて居る通り、徳義を輕視したのではなくて、日本の文明を速進する必要上から、一層、智慧を重んじたのである。そこに知識本位の近代主義者としての彼れの面目が出て居た。が、彼れの求めたところの智慧は、實用的な智慧であつて、哲學的な智慧ではなかつた。應用的な科學であつて、超應用的な科學ではなかつた。約言すれば、何處迄も、功利的色彩を帯びて叡智を求める迄に至らない。思ふに主として、イギリス思想、アメリカ思想の感化を受けた彼れが、こゝに赴いたのは、當然の歸結であつた。

(四) 福澤の啓蒙的・改造的運動

福澤が抱いて居た文明思想の大要は、以上の通りであるが、それを實現するには、第一に實學を尊重して、國家に獨立の氣象があり、人民にも獨立の精神がなければならぬとした。それで、彼れは『學問のすゝめ』に於て「一科一學も、實事を押へ、其事に就き、其物に従ひ、近く物事の道理を求めて、今日の用に達すべきなり。右は人間普通の

實學にて、人たる者は、貴賤上下の區別なく、皆悉くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に、士農工商其分を盡し、銘々の家業を營み、身も獨立し、天下國家も獨立すべきなり」と説いた。更らにそれを強調し、擴充して「道國の威光を落さざるところ、一國の自由獨立と申すべきなり」と云つた。かうした自由獨立の思想は、アメリカに於て、福澤が深い感銘を受けた點から胚胎して居た。彼れの獨立自尊主義とても、畢竟は、アメリカやイギリスの紳士生活から、體得したものであつた。

福澤は、其の文明思想を基調として出發した實學の普及と獨立自由の精神を土臺とした國家、人民の品性向上を促がすために、いろ／＼の著述を刊行した。其の態度は、啓蒙的、破壞的、改造的、懷疑的であつた。彼れは舊文化、舊制度、舊風習に對しては、何處迄も破壞的で、懷疑的であつた。彼れは、新文化、新制度、新風習を作るためには、飽迄改造的啓蒙的であつた。此の態度は、彼れの著述全般の上に能く現はれて居た。

彼れの舊文化、舊精神に對する懷疑的、破壞的態度は、夙に彼れが、武士生活をして居た頃に現はれて居た。彼れは、封建制度に纏ひ附いて居るところの格式、制度の窮屈なことを詛つた。彼れは、また舊習に囚はれて居た迷信や不合理な信仰を排した。而して自己の個性を抑へ附けないで、獨立的な態度を以て、其の出身した藩に對し、世間に對した。それであるから、彼れが、英米文化の洗禮を受けて、日本の舊文化、舊制度を破壊するに當つては、少しも容赦しなかつた。例せば楠公の忠死を横兵衛が無意義に首を縊つたと同様であると云ひ、忠臣が二君に仕へ、寡婦が二度目の夫に嫁するのは當然だと主張した。時には、逆説的に「私の利害む可きの説」などを唱へて「私慾の深遠にして、一國の事實に顯はれたる成跡を見れば、暗に公共報國の旨に適するのみ。是即ち余が敢て人に勸るに、公平無

慾を以てせずして、私慾の甚しきを祈る由縁なり」と叫んだこともあつた。

彼れの新文明を建設するために執つた啓蒙的、改造的の著書は、主として、新知識を普及する上に努力された。彼れは明治二年『世界國盡』、『西洋事情』を出し、五年には『學問のすゝめ』を出し、六年には『文學の教へ』を出すと云ふ風に各種の著書を出した。『福澤全集』が、原本五十部、百五冊に達して居るのを見ても、どんなに彼れが著述に全力を傾倒したかが思はれる。『學問のすゝめ』は七十萬冊、『西洋事情』は二十五萬冊を賣つたと傳へられるから、どんなに彼れの著書が博く行はれたかを知ることが出来る。彼れは、それ等の書に於て、西洋の地理や、歴史や、倫理や、風俗や、算數など、あらゆる百科全書的新知識を最も大衆的に、わかりよく述べた。

(五) 福澤の文學方面に於ける功績

彼れの業績が、文學方面に關係して居る點は、其の内容よりも、寧ろ文章の上にあつた。彼れの思想は、全然、文學に寄與しなかつたとは云ひ切れないけれども、大體に於て、縁の薄いものであつた。ところが、其の文章は大衆的で、福澤流の一體を開いたのみならず、明治時代に於ける最初の Criticism 若くは Essay を創造したものと云へる。

福澤が評論を書く迄、嚴密な意義に於ける評論若くは、批評と云ふものが、我國になかつた。勿論、少數の政治經濟論、史論、文章論と云つたやうなものがないではなかつたけれども、多くは、固定した概念に囚はれたり、善惡の標準によつて、是非を判断したりして、殆ど見るに足るべきものが乏しかつた。ところが、福澤は始めて新しい文明思想を基調とした近代的意義に於ける評論を書いて、正しい理論の筋道を、成るべく究明することに力めた。近代生活を開明してゆくべき評論乃至批評は、彼れの手によつて、始めて創始された。この一事を以てしても、彼れが文學

上に於ける形式についての貢獻を無視することが出来ない。

のみならず、彼れは、其の思想を普及するために、彼れ独自の平民的な新しい文章を書き始めた。當時、評論を書くものは、大抵、佞屈な漢字を多く使用して、殆ど漢文直譯體の文章で押通して居た。またそれを以て、大に誇るべきことのやうに思惟して居た。ところが、彼れは、かうした因はれから脱出して、俗語や、平易な漢字を驅使して、極めて巧妙に其の思想を表現しようとした。彼れは、此の點から、漢字の数を制限すべきことを夙に主張した。彼れが『文字の教へ』に於て、述べたところによると、漢字の数は、二千か三千で、十分、事足るのだ。それで彼れは「此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らざれども、一通りの用便に差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとさまで學者の骨折に非ず」と斷言した。

かうした流儀から出立して、俗語と漢字とを混融的に用ひて、福澤流の文章を創造すると共に、文體の改造を計つた。彼れの文章は、彼れの談話その儘のやうなところがあつて、少しも虚飾がない。譬句や、譬喩や、波瀾曲折はあつても、それが、極めて適切で、自然である。平明に暢達に其の表現しようとするところが、すら／＼と云ひ盡されてある。思ふに、彼れは、親鸞上人の文章などを見て、多少、啓發するところがあつて、かうした文體を創始したものであらう。だが、畢竟人は人である。彼れのやうな人格があつて、始めて彼れのやうな文體が生み出されるのである。今、左に其の一節を引用して見よう。

學問とは、廣き言葉にて、無形の學問もあり、有形の學問もあり。心學、神學、理學等は形なき學問なり。天文、地理、窮理、化學等は形ある學問なり。何れにても、皆知識見聞の領分を廣くして、物事の道理を辨へ、人たる者の職分を知ることなり。知識見聞を開くためには、或は人の言を聞き、或は自から工夫を運らし、或は書物をも讀ざる可らず。故に學問には文字を知る

こと必要なれども、古來世の人の思ふ如く、唯文字を讀むのみを以て學問とするは、大なる心得違なり。文字は學問をするための道具にて、譬へば家を建るに槌鋸の入用なるが如し。槌鋸は普請に缺く可らざる道具なれども、其道具の名を知るのみにて、家を建ることを知らざる者は、これを大工と云ふ可らず。正しく此の譯にて、文字を讀むことのみを知て、物事の道理を辨へざるものは、これを學者と云ふ可らず。所謂論語讀みの論語知らずとは即是なり。我邦の古事記は誦誦すれども、今日の米の相場を知らざる者は、これを世帯の學問に暗き男と云ふ可し。經書史類の奧義には達したれども、商賣の法を心得て、正しく取引を爲すこと能はざる者は、これを帳合の學問に拙なき人と云ふ可し。數年の辛苦を嘗め、數百の修行金を費して、洋學は成業したれども、尙ほ一個獨立の活計を爲し得ざる者は、時勢の學問に疎き人なり。是等の人物は、唯これを文字の問屋と云ふべきのみ。其功能は飯を喰ふ字引に異ならず。國のためには、無用の長物、經濟を妨る食客と云うて可なり。故に世帯も學問なり、帳合も學問なり、時勢を察するも亦學問なり。何ぞ必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問と云ふの理あらんや。

其の言説は、概ね功利的で淺近なものであるけれども、文章は、達意的で、今日、讀んでも、現代の口語文、言文一致體などと餘り縁遠くない程度の親みを感じる。此の點に於て、彼れの文章は、確かに文學上に貢獻したところが少くないのである。彼れが平明な文字のうちに、卑近で而も適切な譬喩、新しい譬句を用ひたのは、讀者を引き付ける最上の秘訣で、右に引用した文中にも「文字は學問をするための道具にて、譬へば、家を建るに槌鋸の入用なるが如し」と云ふやうな譬喩を用ひて、讀者にわかり易いやうに力めて居る。そして途中、退屈を感じさせないために「文字の問屋」とか「飯を喰ふ字引」とか「經濟を妨る食客」とか云ふやうな譬句を巧みに用ひて居る。福澤流の文體は概して、かう云ふ風であつた。

第二に彼れは、近代文學の一要素であるところの告白文學に先鞭を附けた人であつた。彼れの『福翁自傳』は、一

種のヒュウマン・ドキュメントである。此の種の物として、最も偉大なのは、ルソオの『懺悔録』で、古今を通じて、最も優れた懺悔文學、自己告白文學である。そこには、全體を通じて、ルソオイズムが鮮かに流れて居る。福澤の自傳は、素より『懺悔録』などのやうに、藝術的價值には乏しいけれども、此の種の形式を以て、其の半生を懺悔し、告白したのは、興味ある現象である。

第三は彼れは『世界國盡』において後に興起した新體詩の先鞭を附けたのみならず、寓意小説『かたわ娘』を書いて、新味ある書き方を示し、英文和譯の模範を『童蒙教草』に於て示した。『童蒙教草』は、イギリスに行はれて居た通俗的な『モーラル・クラス・ブック』を譯したもので、少年にわかるやうに書いたものであつた。文學的に幼稚な明治初年の時代にあつては、彼れが爲した此の種の試みも、多少、文學的に貢獻したであらうと思はれる。

要するに、彼れが、明治初期の文學に寄與した點は、主として、評論の形式を創始して、大衆的な遠意の文章を創成したところにある。新しい時代に於ける新しい思想を表現するもの、ために、新しい批評をするもの、ために、彼れは、其の指導者として起つたのである。そこに、彼れの一特色があつた。

(六) 中村敬宇の『西國立志編』

中村敬宇は、福澤諭吉に比較すると、遙かに輪廓が小さくて、其の感化力も廣くはなかつた。けれども彼れは思想上、福澤よりも深味を有して、ある一部に強い印銘を與へるべき力を持つて居た。そして彼れは、福澤のやうに、百科全書的知識を持たぬ上に、評論の形式を創造すると云つたやうなところもなかつた。が、哲學者風の頭を備へた。彼れの目的は主として、イギリイ風の自助自立の品性ある清い紳士を養成しようとする上にあつた。

中村敬宇は、名を正直と云つた。天保三年五月、東京に生れて、其の青年時代には、昌平黌に入つて、漢學を修めた。彼れの長所は、主として、儒者たる點にあつた。其の後、慶應二年、イギリスに留學して、約一年半、滞在して、其の文化を親しく研究した。イギリス思想の感化を受けたのは、それがためだつた。明治二十四年卒去。

敬宇の著書として、世に普及したのは『西國立志編』である。これは、スマイルスの『自助論』を譯したもので、力めて、原文の一字一句をも、損しないで、嚴正に和譯しようとしたところが見えて居る。文體は、福澤の大衆的なのに對して、寧ろ貴族的で、漢文直譯風のあとが残つて居た。その代りに、典雅莊重と云つたやうな趣は、福澤になくて、敬宇の文章にあつた。

天は自ら助くるものを助くと云へる諺は、確然經驗したる格言なり、僅に一句の中に、歴々人事成敗の實驗を包蔵せり、自ら助くと云ふことは、能く自主自立して、他人の力に倚らざることなり、自ら助くるの精神は、凡そ人たるもの、才智の由て生ずるところの根原なり、推してこれを言へば、自ら助くる人民多ければ、その邦國必ず元氣充實し、精神強盛なることなり。他人より助けを受けて成就せるものは、その後、必ず衰ふることあり、然るに内自ら助けて爲すところの事は、必ず生長して禦ぐべからざるの勢あり、蓋し我もし他人の爲に助けを多く爲さんには、必ずその人をして自ら勵み勉むるの心を減せしむることなり。是故に師傳の過嚴なるものは、その子弟の自立の志を妨ぐることにして、政法の群下を壓抑するものは、人民をして扶助を失ひ、勢力に乏しからしむることなり。

翻譯としては、忠實ではあるが、どうしても、堅苦しいところがある。だが、翻譯文としての一體を創始したもので、時人は、喜んで『西國立志編』を一讀して、其の自助的精神を振起した。其の賣高は、福澤の『西洋事情』に譲らなかつた。思ふに、後の翻譯文は福澤と中村とに教へられたところが多いやうである。漢文體の翻譯をした森田思軒の如きは、敬宇の翻譯振を見て、自然、一體を發明したとは云へない迄も、敬宇の脈を追うたものと見られよう。

(七) 當時の教育と新學術

當時、福澤と中村の啓蒙運動と呼應して、文化開發に資したのは、民間の私塾や、文部當局の教育施設や、新聞雜誌などであつた。私塾として、最大なのは、福澤の慶應義塾であつた。明治四年の調査によると、三百二十三人の塾生が居た。その他福地源一郎の塾には七十八人、箕作秋坪の塾には百六人、尺振八の塾には百十一人、鳴門義民の塾には百四十一人居た。

慶應義塾が創立されたのは、安政五年であつた。最初は、オランダ語を教へて居たが、後には英語を教へることになつた。福澤の功利的文明思想は、こゝで宣傳された。彼れが、慶應四年、幕軍と官軍とが上野で砲火を交へて、市民が狼狽しつゝある間に、悠然と砲火を窓外に望みながら、ウエランドの經濟書を講じたこととは、當時の有名な逸話であつた。學者としての自分を自覺した彼れの門から、多くの秀才を出したのは、當然である。

尺振八の共立學舎は、正則英語を主として教へたが、こゝからは、田口卯吉、島田三郎、小池靖一らの人材が出た。中江篤介の佛學塾、江原素六の集成社、中村敬宇の同人社なども有爲な若い人たちを出した。當時の私塾は、大抵、英語またはフランス語を教へて、新知識を有する新人を養成するのを目的とした。其の新興の勢は官學を凌駕する有様だつた。

以上述べた私塾のほかには近藤眞琴の攻玉舎(文久三年創立)、福田理軒の順天求合社(天保五年大阪に創立、明治四年東京に移る)、村上彦俊の達理堂(明治元年創立)などがあつた。攻玉舎は海軍士官養成を目的として英語、數學、航海學などを教へた。順天求合社は數理を教へ、達理堂はフランス語を授けた。

官學の方面を見ると、高等教育を授ける機關として、大學南校と大學東校とがあつた。大學南校は、以前、開成所と稱せられたのであるが、慶應三年、學制を改めてから、オランダ語よりも、英語、フランス語、ドイツ語の教授を主眼とするやうになつて、外國教師を招聘して、親しく教鞭を執らせた。明治四年には、其の規模が擴大されて、雇外人教師は英人五名、アメリカ人四名、フランス人三名、ドイツ人三名を數へるやうになつた。生徒も千百九十五名に上つた。また各藩の貢進生と稱する秀才を集めて、其のうちの最優者をイギリス、フランスに留學させた。大學東校は昌平費を改稱して、醫學を専修するところで、専門教育の先驅だつた。畢竟、明治十年に出來た東京帝國大學は以上を基礎として生れたのである。

文部省は、かうして、高等教育の端緒を開くと共に、一方では、明治二年に府縣に小學校を設け、三年には大、中、小學校規則を定め、五年には、小學教則及び中學教則略を發布した。そしてすべての教育を通じて、實用知識を教授することを主眼とした。それは、福澤が率先して唱へた功利主義的な思想が、一般を動かしたからでもあつた。

かうした風潮の下にあつた人々は、渴するやうに新知識を要求した。それに應じて出た通俗的な學術書は相當に多かつた。明治初年から、西南戦争前後の時代までに出たのを挙げると、文部省が出版したチャンバアの『百科全書』を始め、福澤、中村の著述を中心若くは先縦として、理學、修身倫理、歴史、地理に關するものが二十數種出た。其のうちで、一番、流行したのは、理學に關するものであつた。川本幸民の『氣海觀瀾廣義』、福澤諭吉の『窮理圖解』、吉田賢輔の『物理訓蒙』、後藤達三の『窮理問答』、石黒忠恵の『化學訓蒙』、小幡篤次郎の『天變地異』、加藤宗甫の『化學入門』などは、其の主要なものだつた。それ等の書を通して、新知識が民衆の間に流布された。

(八) 新聞雑誌の啓蒙的勢力

新聞雑誌の發行は、文化開發に資すると同時に、一面、文學的にも、多少貢獻するところがあつた。新聞紙の嚆矢は、文久年間に出た『バタビヤ新聞』、『中外新報』などであるが、毎月數回、定期に發行するやうになつたのは、元治元年、イギリス人ウエラランドが岸田吟香を主筆として出した『新聞紙』であつた。其の編輯助手には、本間清藏、ジョン彦造の二人が居た。『新聞紙』は、單に世上の出來事を簡單に報道するだけで、時事を論評しなかつた。それに續いて外人宣教師ベリーの『萬國新聞』、柳川春三の『中外新聞』などが横濱に發行された。その他『江城日誌』、『遠近新聞』、『新聞事略』などが出たが、何れも月刊または週刊で、編輯法も幼稚であり、印刷も木版に依つたから、不鮮明を極めて居た。現在發行されて居る日刊新聞のやうなものは一つもなかつた。

其の後、稍新聞紙らしいものが出たのは、明治元年、政府が、其の施政方針を知らせるために發行した『太政官日誌』の生誕後からであつた。それは、今日の官報の初めで、新聞熱を起させる上に幾分の力があつた。それに對して福地源一郎(櫻痴)が、條野傳平(採菊)と提携して『江湖新聞』を發行し、岸田吟香が、横濱で『藻鹽草』を出した。

福地源一郎は、長崎の儒者福地菊庵の子で、天保十二年三月、郷里で生れた。最初、オランダ語を少年時代に學んだが、後江戸へ出て研究を續けた。萬延元年、外國人支配役となつたのが、彼れの後來、立身すべき端緒となつて、前後二回、歐米を巡遊して、新智識を修得した。歸朝後、彼れは、幕吏をやめて、私塾を開いて、生徒を教へ、次いで『江湖新聞』を出した。其の後、彼れは再度、アメリカへ行き、また官吏となり、新聞社長となり、東京府會議長となり、後一轉して、劇作者小説家

となつて、其の晩年を終へた。明治三十五年卒去。

福地が『新聞紙實歷』に於て、告白して居るやうに、慶應二年、幕府の使者に隨行して、イギリス、フランスに十ヶ月ばかり、滞在して居る間に、諸名士を歴訪して、新聞紙の性質及び勢力を知つたので、それに刺戟されて『江湖新聞』を出したのである。此の新聞は、木版刷で、毎號半紙二切を十枚乃至二十枚綴つた冊子風のもので、今日の雑誌の體裁に酷似して居た。内容は、雜報、寄書、時評などを收めたが、大抵、福地一人の筆になつたものどつた。彼れは、其の上、版下まで書いて、熱心に薩長政府攻撃の鋒先をゆるめなかつた爲め、政府の忌諱に觸れて、發行を停止された。

だが『江湖新聞』の活動は、漸く時人の注意を惹いて、新聞紙の讀者も、少しづつ、増加したので其の潮勢に乗つて『横濱毎日新聞』(今の『東京毎日』)、『江湖新聞』の後身であるところの『東京日々新聞』、木戸孝允の保護を受けて居た『新聞雑誌』などが出た。續いて、明治六年には『郵便報知』(今の『報知新聞』)、七年には『朝野』、『讀賣』、八年には『曙新聞』、『東京繪入新聞』などが出た。此のうち『曙新聞』は『新聞雑誌』の改題したものであつた。その他、大阪、大和、京都、山梨、茨城などにも、地方新聞が出るやうになつた。

當時、福地は、少壯氣鋭の時代で、無冠王の意氣を以て、明治六年、官吏を罷めて『東京日々』に入つて、其の婉曲流麗な筆を揮つて、社説の原型を示すに及んで、彼れの聲みに倣うて、記者生活に入る名士が、續々現はれた。それで『朝野』には成島柳北、『日々』には末松青萍、岸田吟香、『曙』には末廣鐵腸、岡本武雄、『報知』には藤田鳴鶴、矢野龍溪、栗本鋤雲、『横濱毎日』には沼間守一などが居て、旺んに雄を争うた。けれども最初、卓越して居たのは、福地櫻痴と成島柳北との二人であつた。櫻痴は其の社説に於て當時の青年を動かし、柳北は、輕妙な記叙の筆で、讀

者を喜ばせた。

彼等は、概して、當時に於ける新人で、進歩主義者で、歐米文化を多少、理解したものばかりであつた。勿論、例外もないとは云へないが、大體、時代の先覺者として、歐米の新文化を鼓吹し、普及しようと力めた。従つて、其の思想も粗雑だが、比較的新しく、文章も潑刺たる生氣があつた。が、福澤流のやうな大衆的な文體は、未だそれ hands を付けるものが少くて、概ね堅苦しい文章、殊に漢文風の文章が多かつた。

（九）新文化開拓に貢献した『明六雜誌』

雜誌は、明治七年に出た『明六雜誌』が注目すべき最初のものであつた。それは月二回の發行だが、體裁は餘り整つてゐなかつた。けれども其の同人には、其の前年、明六社を組織した有力な學者、文士が多いので、新文化開拓に資した點が少くない。其の人々には、森有禮、福澤諭吉、津田真道、西周、中村敬宇、加藤弘之、箕作麟祥、同秋坪、杉享二、津田仙、大槻文彦、九鬼隆一、辻新次、西村茂樹などが居た。而して其の主腦は、福澤、森の二人であつた。森は、十九歳でイギリスに留學して、三年の研學を積んで歸朝した新人物で、其の思想は大體、福澤と一致して居た。そして福澤よりも、急進的な、直截なところがあつた。また清教徒的なキリスト教信者の風があつた。それで彼れは『廢刀論』や『男女同權論』、『禁蓄妾論』などを『明六雜誌』に掲げて、論壇に一波瀾を捲起したことがある。其の他、西周の『羅馬字論』、神田孝平の『演劇改良論』、坂谷素の『萬國共通語の必要』の如き有益な論文が出たことがあつた。

思ふに、『明六雜誌』は、文學上に直接、影響するところは、少かつたが、社會思想の上には、相當、貢献した點が

多く、新思潮の源泉たる觀があつた。津田真道の『死刑論』、『廢娼論』、西村茂樹の『自由交易論』その他、一般に時代に先驅して、思想の進歩開發に努めた。その書き方は、餘りに隨筆的で、堂々の論歩を示さなかつたけれども、明治初期の思想界は、これによつて少からぬ新刺激を受けたのである。

『明六雜誌』のほかに『近時評論』、『同人社文學雜誌』、『草莽雜誌』、『評論新聞』、『柳橋新誌』、『東京新誌』、『花月新誌』、『團々珍聞』、『顯才新誌』などが、前後して、明治十年までに出た。其のうち、文學趣味を有して青年に最も喜ばれたのは、柳北の『花月新誌』及び『團々珍聞』などであつた。それに就て、島村抱月は當時を回想して、かう云つて居る。

一方には『慘風悲雨世路日記』といふやうな小説や、人から貰つた成島柳北の『花月新誌』の合本やが、種々の意味で、當時の田舎青年の夢をそよる。『花月新誌』の小西湖佳話に、
 盃觸盃洗了東有響。酒到看排。頃刻一妓上來。徐開隔障。跪拜一拜道。今夕各位萬福。銀燭光下照映觀來妙齡可三七八。
 晩後更衣。極是淡裝。藍緞圍條縹紗衣。襦袢余踵。鮎簪黑八絲帶。纏余下垂二尺。透明玳瑁。淺紅珊瑚。縹影銀光與銀燭相
 映燦煥。
 など、ある所は、天下の妙文として讀誦したものである。

今日の青年が見たら、支那の文章と思ふやうなスタイルで、藝妓のことなどを書いたのが、當時の青年の眼に何等奇異に感じられないで、甘美な菓子のやうに喜んで讀まれたのである。それから考へても、漢文風の文章が、明治十年頃までは、殊に勢力があつたことを推測し得るのである。

第二章 舊套を離れざる文學

(一) 假名垣魯文の戯作と新聞小説

明治初年から西南戦争前後の頃に至るまでの文學は、創作方面の收穫上、見るべきものが乏しかった。當時の小説は概して、前代に於ける一九、三馬、春水、馬琴らの餘唾を嘗めて居るに過ぎなかつた。脚本も、江戸演劇の諸要素を取り入れて、それを補綴したものが多かつた。蓋し江戸末期の頹廢時代には、脚本も、淨瑠璃も、俳句も、短歌も全くデカダン風のものになつてしまつて、頗る生氣を失つたところへ、維新大改革から、西南戦争前後の大混亂のために、純文學方面には、人材が集らなかつたのである。また新しい芽を吹き出すだけの機運も、熟しなかつたのである。當時の小説のうちで、稍見るに足るべきものは、假名垣魯文の『假名讀八犬傳』『西洋道中膝栗毛』『胡瓜扱』『安愚樂鍋』を始めとして、二代目春水の『時代加賀藩』、萬亭應賀の『釋迦八相倭文庫』、三世種彦の『白縫物語』、松村春輔の『復古夢物語』、近世櫻田奇聞などがあつた。其の他同時の作者には、鶴亭秀賀、山々亭有人(條野探菊)、柳水亭種清、笠亭仙果、梅亭金鷲などが居た。其の小説の大半は、勸善懲惡主義の思想と讀本、草双紙、人情本、滑稽本などの結構を模した筋合のものばかりだつた。若し強ひて、其の優秀なものを擧ぐるならば、僅かに魯文の『膝栗毛』や『胡瓜扱』を推するよりほかはない。

魯文は、貧しい肴屋の家に生れて、小僧生活を送るうちに、手當り次第に小説、雜書の類を讀んで、小説家となつたやうな人物で、勿論、何等の見識も、學殖もなかつた。けれども彼れの感受性は、比較的敏活で、新しい時勢に對

して皮相的にでも、適應してゆけるだけの才能を持つて居たところから、福澤の『西洋事情』などを手にして、臆ろ氣乍ら、近代文明に就ての概念を得たのである。彼れが『膝栗毛』十一篇の序で「方今文明開化一時に進み、余輩儂倅に學ばざる、子曰の迂遠を去り、經驗究理の洋風に傾き、市街の兒童等に至る迄、芥子坊主の支那頭を殘穢の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書をベケにして英字、佛の歐文エビシ、四百余州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代は新玉の春を待ちたる心地になん。而して廢藩置縣の公達子も無僕獨歩に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法開業、父母在せども遠く遊び、鯉砲一發三千里、且に道を聽くとも、夕に死するを可なりとせず。牛を食し、ビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以つて、今日の報恩とす」と云つて居るのは極めて皮相的ではあるが、當時の戯作者として寧ろ時代の傾向に對して敏活だと云はねばならぬ。

魯文の『膝栗毛』は、畢竟、皮相文明の概念を滑稽本風の作品に表現したものである。大體は『西洋事情』に依り當時、パリイ博覽會を見て歸つた富田砂燕の説などを取り入れて、魯文一流の空想を混入させたもので、文明開化でなければ、夜も日もあけない時代の人心に投合しようとしたのである。

『膝栗毛』は神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、横濱の豪商大腹屋に伴はれて、イギリスのロンドンに遊ぶ道中記で、勿論、一九の『膝栗毛』を模倣したところが多い。けれども、魯文が、皮相ながらも、明治初期に於ける時代の風俗、嗜好、傾向、生活などを描寫して、其の矛盾と不調和とを示したところは、他の作家に比較して確かに一步を抜いて居た。高山樗牛は『明治の小説』に於て「明治四五年の交、魯文の滑稽物が當時の小説壇に獨歩したりし事實は、當代の粗笨な人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪へざりしか、又維新前後の創痕につかれたる國民が如何

に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其の西洋膝栗毛、胡瓜圖解等は、西洋文明に眩倒せる當代人心を倒照するの鏡として見ることを得べし」と批評して居る。

畢竟、魯文が時勢粧に託した低級な諧謔や滑稽は、文藝鑑賞の上に於て、尙ほ極めて幼稚だつた當時の人心にびたりと一致して、無條件に歓迎されたのである。彼れは『膝栗毛』の成功したのを見て、更に『胡瓜扱』を書いたが、それは、福澤の『窮理圖解』から思ひ付いたものである。彼れは、其の事について、「普通を假用し、實學有益の確論を無用の戯編に翻案せる」と告白して居る。それで福澤が、風の事を説明して「空氣日に照らさるれば熱して昇り、冷氣これに交代して風のもととなる」と云つたのを模して「吹けよ川風揚れよ簾れ、中の歌妓の能さ、三弦の絲の柳橋、四時の盛りも取り別て、夏來にけらし白妙の、肌をすきの衣手に、嬋娟とすました左棲、箱屋が供に立姿」と洒落のめして居る。要するに、低級な模擬文學の範疇に囚はれた産物である。

魯文以外の作家は、新聞に據つて、其の存在を續けて居た。當時、俗に續き物と云つた極甘い小説は、彼等の手によつて作られた。それは新聞が俗衆を引き付けようとした政策と作家が生活の資を新聞に依つて得ようとした希望とが合して、さうした作品を掲げたのである。

先づ流行兒の魯文が、明治六年『横濱毎日』に於て滑稽物の筆を執ると、八年には三世種彦と稱した高島藍泉が『平假名繪入』に入り、續いて、二世春水と稱して染崎延房も亦同じ新聞に入つた。十年には、梅亭金鷲が『圓々』に入つた。その他、新聞小説を書いた人々には、古川魁齋、渡邊義方、伊東專藏、須藤南翠らがあつて、草双紙合巻物に代つて、當時の人氣を惹いた。其のうちで、魯文と略ぼ同様の歓迎を受けたのは、二世春水であつた。勿論、何れも舊套を脱しなかつたけれども、今日の新聞小説の芽は、こゝから吹き出したものとも見られる。

(二) 劇壇に於ける河竹默阿彌

小説界に比較すると、脚本方面は江戸演劇の集大成者と云はれた河竹默阿彌が居て、一大星座のやうに輝いて居た。彼れは、江戸末期から、明治の劇壇にかけて活躍した作者で、其の作品、三百餘篇の多數に上つて居る。そして彼れの傑作は、昭和時代の今日も尙ほ東京大阪其の他の劇場に上演されて、看客を魅して居るのを見ると、其の劇的生命の長いことを思はせられる。

默阿彌は、江戸日本橋通の質屋吉村勘兵衛の長子で、文化十三年二月三日に生れた。彼れは、幼少の時から芝居好きで、史、院本の類を耽讀したが、また十四五歳の頃から茶屋酒の味を知つた早熟的な點があつた。一時、非常に放蕩に身をやつして、父から勘當されたこともあつた。天保四年、彼れが十七歳の時、京橋尾張町の好文堂といふ貸本屋の若い衆になつて、放蕩生活から稍遠のいて居るうちに、脚本や、雜書などを讀んで不規則ながら、劇的知識を養つた。さうしたことが動機となつて、知人の紹介で、脚本作者五世鶴屋南北の弟子となつた。それは、彼れが十九歳の時で、市村座の狂言作者見習のうちに加はつて、勝蔵と名乗つたのが作者生活の始めだつた。爾來、努力の效が見えて、天保十四年十一月、二世河竹新七の名を襲ぎ、弘化二年には河原崎座の立作者となり、市川小團次に其の作劇上の手腕を認められて互ひに提携するやうになつてから、愈々其の特色を發揮して「白浪作者」の名を得たのである。彼れが世を去つたのは、明治二十六年だつた。

默阿彌の脚本は、時代、世話何れに於ても、相當に優れたものがあるけれども、其の長所は、一般の世評のやうに矢張、世話物の上にあつた。それは、彼れ自身も、明白に意識して居たやうである。其の時代物は、能く纏つて居ると云ふだけで、彼れ独自の面目が出て居ないが、世話物は、彼れでなければ、書けない旨味が十分に現はれて居る。勿論、それは、櫻田治助、四世鶴屋南北らの長所を學ぶと共に、それを轉合し、融化したものにはちがひないけれど

も、さうした江戸演劇の美を一つに集大成した丈でも、黙阿彌の特色は十分にある。殊に彼れは、其の上に彼れ自身が實地に觀察した江戸末期の社會相及び人物を寫し出して、それへ彼れの純化と美化とを加へたのだから、唯江戸演劇の集大成たるに留まらないで、それに新しい生命と新しい色彩とを加へたものと云つて宜い。永井荷風は、黙阿彌の世話物を嘆美して、「自分は、常に黙阿彌翁を以て、佛蘭西劇壇の Eugene Scribe または去年死んだ Victorian Sardow 以上の大劇作家と信ずるものである。翁は我が現代に多く見られる青年作家の如く學問や小理窟から、乃ち偏狹淺薄なる理想から藝術に這入つた人ではない。藝術に對する狂愛の情から直ちに其れに身を投じて、不知不識の間に藝術の何たるかを悟つた人である」と云つて居る。

(三) 惡の詩人としての黙阿彌

黙阿彌の世話物にも、長所短所はあつた。其の短所は勸善懲惡主義に囚はれ、善玉惡玉の傀儡を驅使する弊に囚はれて居たこと及び俳優の柄に嵌めて書くために、無理なところや、單調に流れる傾きのあることだつた。其の長所は内容がロマンチックであると同時に描寫の上では寫實的で組織美、音楽美、色彩美に富んで居て、江戸末期から明治初年へかけての世相を巧みに表現すると同時に、すべての惡を美化する上にあつた。

彼れの世話物を讀むと、惡の詩人であることを思はせる。蓋し頽廢期の江戸の空氣や、情調は、新しい刺戟から、更に一層、刺戟を追うて止まないと云つたやうな靡爛した官能を何人も持つて居たので、世話物の世界も、刺戟の弱い、平凡なものよりは、刺戟の強い、非凡なものを求めてやまなかつた。その要求に當てはまる世界は、惡の世界、色慾の世界、情死の世界、幻怪の世界であつた。黙阿彌は、さうした世界から、人物や、事件を選んだ。

黙阿彌が、特に惡の世界に人物を選んだことは、彼れが白浪作者と云はれ、其の世話物を白浪物と云はれたのである。伊原青々園の『近世日本演劇史』によると、黙阿彌は自分で「三人吉三は、最も心を盡した作で、中にも、我が村井長庵は、終生の世話物中第一の出來だと思ふ」と云つたさうであるが、此の二篇は、何れも、盜賊を主人公としたものである。ひとり、右の二篇ばかりではない、彼れの傑作と云はれて居る『鼠小僧』『白浪五人男』『鑄掛松』『十六夜清心』『髮結新三』なども、皆惡人を中心人物とした作品である。彼れは、かうして、惡の世界に於ける人々を描くことを長所として居た。

それは、彼れが、惡の詩人であるところの傾向、本質を有して居た爲めにちがひないが、一つは當時の廢頽的空氣に感化され、一つは白浪物を演出する上に特技を持つて居た市川小團次に當てはめるためでもあつたのだ。蓋し彼れは惡を惡として見なかつた。惡のうちに美があり、善があることを洞察するだけの藝術的な官能と深い同情とを持つて居た。彼れの解釋によると、惡の美化、惡の詩化を實現するところに眞の詩人の本質があるのだ。人は、惡を恐れ、惡を誣ふけれども、其の皮相を排して、核心に徹するならば、必然的に、そこに美なり、善なりを見出し得るであらうと云ふのが黙阿彌の自信であつた。彼れは、かうした解釋と自信と詩人的氣稟とを以て、惡の世界に於ける人物を美化し、詩化した。

『白浪五人男』は、何れも、恐しい賊である。けれども濱松屋の場に於ける辨天小僧は、惡でなく美の象徴である。『三人吉三』も亦大膽不敵の曲者であるけれども、お嬢吉三が創造した惡の華は、美そのものである。『十六夜清心』は、毒婦と惡漢との結合であるけれども、彼等の動作、風采は、美そのものを現はして居る。

以上は、惡の美化の一例であるが、更に惡の善化は『鼠小僧』『鑄掛松』などの上に現はれて居る。鼠小僧は、盜賊

ではあるが、一面任侠な肌合を持つて居て、人に恵む善心の閃きを示して居る。鑄掛松も亦それと同様の傾向を持つて居る。彼等は、勿論、悪の世界のどん底に沈んで居る人物だが、左様した暗黒のうちにあつても、一片の人情味を忘れないで、表面、善を装うて居る奸人よりも、遙かに人情的に善な一面を有して居ると云ふことが、黙阿彌によつて、明かにされて居る。それ等は悪の純化である。

黙阿彌は、盗賊と共に、好んで毒婦を描いて居るが、それ等の女も亦美しい寶玉のやうな魅力を持つて居る。山猫のおきつや、まむしのお市、娼妃お百などは、黙阿彌式の毒婦を代表したものであるが、其の悪は、彼の女らが有する美によつて、淨化された趣がある。悪を悪として憎み得ない美がある。

以上のやうな意味に於て、黙阿彌は悪の詩人である。悪の世界から美と善とを見出すと共に、また美と善とを創造する。そこに、彼れの独自の世界があつた。即ち彼れは、デカダンス藝術の粹を示した詩人である。そして彼れが悪を中心として空想するところのロマンチックな世界は殺人、脅喝、姦淫、情死、幻怪と云つたやうな場面である。

(四) 黙阿彌の劇的技巧と其の強味

黙阿彌は、悪の世界を描く上に於ては、何處までも寫實的であつた。彼れが意識して、精細に觀察した江戸末期及び明治初期の世相を取り入れて如實に描いた。そこが、彼れの第一の強味であつた。伊原青々園も、その點について「先輩の治助、南北よりも一層寫實を尙び、其の詩材を自己の目撃し、若くは感想せる實際より採りたりき」と云つて居る。彼れが時人を動かしたのも、かうして堅實な寫實主義の上に起つて居た爲めだつた。時人は、そこに生きた世相の縮圖を見ることが出来て、それに共鳴したのだ。

それで、彼れの作品は、一面に於て、江戸末期若くは明治初期の時代風俗史と云つたやうな特色があつた。永井荷風は、その點を嘆賞して「其の寫實的半面は、狂言の本筋に關係のない仕出しの臺詞や、其の折々の流行の洒落、又は狂言全體の時代と類型的人物の境遇等に於て親ひ知られるのである。維新後零落した旗本の家庭、親の爲めに身を賣る娘、新しい法律を楯にして悪事を働く代言人、暴悪な高利貸、傲慢な官吏、淫鄙な權妻、狡猾な髮結等いづれも生々とした新しい興味を以て寫し出されてある」と云つて居る。

次に黙阿彌の第二の強味は、其の材料を取捨按配して、巧みに結構、筋立てをすることの老巧な點にある。それは、彼れの世話物ばかりでなく、時代物にも共通の長所である。殊に世話物の代表作の一つである、『三人吉三』の如きは、結構の妙、配合の美を極めて居る。

彼れが『三人吉三』のうちに於て、和尙吉三、御坊吉三、お嬢吉三の三人を先づ對照させたのが、宜い思ひ付きである。江戸式の墮落坊主、放埒な武家悪、娘姿の若衆が、兄弟の誼を結んで、悪事を働く上に、庚申丸の短刀と百兩の金とが附いてまはつて、それが悪因悪果を生じてゆく筋道を可なりに自然に、そして複雑に開展して居るところは恐らく、黙阿彌自身も得意とした點であらう。場面の變化と云ふ上に於ても、淋しい場面の次ぎには陽氣な場面、陰惨な場面の次ぎには、花やかな、目さめるやうな場面を配合して、それに江戸末期の社會的色彩や、情趣をからませて居るところも宜い。人物も、過去の罪業をしみじみ懺悔して居ながら、いざとなると、昔の兇暴な意氣を示す土左衛門傳吉のやうな特異の老人を挿んであつて、淋しい、やる瀬ない人生の一角を髣髴させて居るのが宜い。要するに『三人吉三』は、其の結構、配合の上に最善をつくした傑作である。

黙阿彌の結構、筋立ての妙は『鑄掛松』を見ても『縮屋新助』を見ても『鼠小僧』を見ても『御所の五郎藏』を見て

も、すべてに共通して居て、此の點では、現代の新しい作家も企及し難いやうに思はれる。「鑄掛松」の序幕に於ける兩國橋下の遊山船の場に於て、陽氣な絃歌の聲に聞き惚れた鑄掛屋松五郎が浮世の榮華を羨んで心機一轉して、盜賊となる利那の氣持を見せたところなども奇抜だ。「御所の五郎藏」なども、獨創的ではないが、在來の江戸演劇に用ゐられた結構美を輾合してあつて、讀んだ丈でも、場面の面白味を十分に想像させる力を持つて居る。默阿彌物が長く飽かれないのは、半ば此の點から來て居るやうに思はれる。

默阿彌の第三の強味は、臺詞の巧妙な點にある。そこには、彼れの独自の技巧が、十分に現はれて居る。其の代表的作品にある臺詞には、常套的であつたり、間伸びして居る點が殆どなくて、藝術味が豊かに流れて居る。「三人吉三」のうちで、大川端庚申堂の場で、美しいお嬢吉三が、夜鷹のおとせが持つて居た百兩を奪ひ取つて、どんと、おとせを川の中へ蹴込み乍ら、春の空を見上げて「月も朧に白魚の鱗も霞む春の空、つめたい風もほろ酔に心持能く浮か浮かど、浮かれ鳥の只一羽墜へ歸る川端で、棹の竿か濡手で泡、思ひがけなく手に入る百兩。ほんに今夜は節分か、西の海より川の中落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から延喜がいゝわえ」と云ふ臺詞は、色彩的、音樂的の味が深い。其のお嬢吉三の惡事を駕の中からそつと見て居たお坊吉三が、ぬつと現はれて、お嬢吉三の立ち去らうとするのを呼び留めて「駕にゆられてとろ／＼と一ぱい機嫌の初夢に、金と聞いては見遁せねえ心は同じ盜賊根生、去年の暮から間が悪く五十と纏る仕事もなく、遊びの金に困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入りの振袖で人柄作りのお嬢さんが追落しとは氣が附ねえ、是から見ると己な五分月代に著流しで小長い刀の落し差し、一寸見るから往來の人も用心する打扮、金にならねえも尤もだ」と云ふ臺詞も、緊張して居て、弛緩したところがない。

「三人吉三」にあるやうな巧妙な臺詞は、彼れの作品の隨所に往々、ダイヤモンドのやうに輝いて居る。「髮結新三」の深川閻魔堂橋の場で、彌太五郎源七が、新三に復讐するところの臺詞も、きびきびした味があつて凄い色合を帯びて居る。新三が源七に向つて「丁度所も寺町に娑婆と冥途の別れ道、其の身の罪も深川に橋の名さへも閻魔堂、鬼といはれた源七が爰で命を捨てるのも、餓鬼より弱い生業の地獄のかすり取つた報ひか、手前もおれも遊人、一ツ釜といひながら、黒闇地獄のくらやみでも亡者の中の二番役、業の秤にかけたらば貫目の違ふ入墨新三、こんな出合もその内であつて、つきりあらうが淨玻璃の、鏡にかけて懐に隠しておいた此の匕首、双物があれば鬼に鐵棒、どれ血塗れ仕事にかゝらうか」と悪口を吐くと、源七も屹となつて「如何に所が寺町とて、まだ新盆の來ねえのに、聞き度くもねえ地獄の言立て、無常を告ぐる八幡の死出の山鐘三途の川端、あたりに見る目嗅ぐ鼻の人の來ぬ間にもちつとも早く、冥土の魁さしてやらう」と罵り返す臺詞にも、技巧の冴えがある。

默阿彌が第四の強味は、音樂美を以て、劇中の情味を助けたところにある。彼れの世話物には所謂心中や殺し場が多い。其の殘忍な殺人を音樂の力で、美化し、緩和することについて、彼れは、細かい注意を拂つた。また心中の場に於ても音樂美を以て、其の情趣を助けた「十六夜清心」の心中場では「梅柳中宵月」と云ふ淨瑠璃を用ゐて、美しい若僧と艶な遊女との心中を美化した。「雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて見かはす月の顔と顔」の文句が歌はれると、舞臺の上に月が出て「十六夜か」清心さまか」と相擁する男女の情味は見物に詩的快感を與へるやうに出來て居る。「鑄掛松」でも、兩國橋船遊びの場に絃歌の聲を聞かせ、中程にある妾宅の場にも、合方の端唄を活用したのみならず、大詰に松五郎が自害する場に淨瑠璃「新版歌祭文」野崎の出と爰据の一段を用ゐて、松五郎とお咲とが此の世の別れに臨んでの哀愁を野崎村の連彈にからませて詩的情趣を添へて居る、それから彼れの作中に於ける悽慘

な殺しの場には、度々伴奏音楽として獨吟が用ゐられてあるのも詩化の一手段として、強い効果を示してゐる。

(五) 黙阿彌の短所

かうして、彼れの強味のみを挙げると、彼れの作は完全で、缺陷がないやうであるけれども、必ずしも、左様ではない。人物の性格を現はす上に於ては、善玉悪玉主義に囚はれて居て、少しも生きたところがないやうなものもある。『村井長庵』は、彼れの自慢の作であるが、其のうちに出てくる手代の久八は、絶對的に完全な佛のやうな善人として表現されて居る。強慾な主人、放埒な若旦那に對して、何處までも忠義を盡して、無實の罪をも背負ふところは黙阿彌の善玉の觀念の具體化で、少しも生きたところがない。長庵の性格は、また悪玉の觀念の具體化で、人間味に缺けて居て餘りに冷たく、機械化され、人形化されてある。かうした人物の微妙な暗い心理なるものが、少しも現はれて居ない。畢竟、黙阿彌は、久八によつて善玉の權化を代表させ、長庵によつて悪玉の權化を代表させて、其のコンツラストの上に妙を見せようとしたのであらうけれども、それは常套的な手段で、人間味が閑却されて居る。

彼れは、また場面や、筋を撥ぶ上の都合から、人物の性格を無視したり、虚構的、作爲的な人物を作つたりして、毫も顧みないと云つたやうなところがある。従つて、彼れが描く人物の中には、輕々しく人を信じたり、疑つたりして、無反省的に悲劇の種を作るものが多い。少し理智の眼を開けて見ると、直ぐに作者の魂膽がわかるやうな點が多い。『笠森おせん』の中に出るおきつと云ふ妾が、下僕市助の浅い虚言を信じて、主人今村丹三郎を疑つて自殺するのは、餘りに没反省的な女である。『鼠小僧』のうちに出る後家お高なども、自分の家とは關係のない少年の盗みを辯護するために強ひて、自分が懸想したので、忍び入つたのであると云つて、全然、自己の面目を破つてしまつて、平氣

で居るのは、没常識である。かうした善人は、幕末時代にあつたらうか。如何に呑氣な昔の女でも、これほど没常識な女はあるまい。畢竟、黙阿彌が、芝居をするための道具に用ゐられたに過ぎないのである。以上のやうな缺點は、黙阿彌の作を通じて、往々、見受けるところである。

伊原青々園は、黙阿彌の作中に以前あつた脚本を改作増補したのが少くないことを憐れないとして居るが、それは當時の脚本作者の一般的な常習であつたらうから、深く咎むるに足りない。其の脚色化の巧妙さへあれば、それで宜いと思はれる。以上のやうに、黙阿彌にも舊劇通有の缺點はあるけれども、寧ろ其の長所美所の方が遙かに多いのでそれ等の缺點は、彼れの價値に左程、影響しないのである。

(六) 黙阿彌の代表的作品

坪内逍遙は、彼れを嘆賞して「黙阿彌は、其前に往ける及び其左右に歩めるものあらゆる長所を拮據して、悉くこれをおのが藥籠中のものとなして、自在に配劑するの巧みなるは、沙翁近松の上に出でたり、前人の意匠脚色にして或は其骨を換へられ、或はその胎を奪はれて、彼れが作中に現はれ居らざるものは殆ど稀なりといはんも、甚しき謬言にはあらじ」と云つた。即ち彼れを以て「江戸演劇の最後の集大成者」とした。私はそれと共に、彼れが、江戸演劇に新しい生命と新しい色彩を附加して、そこに彼れの獨創的な技巧を示した老練な藝術家であると云ふことを云ひ添へたい。彼れは、長い間の修養と經驗によつて、其の藝術的傾向を完成した優れた劇詩人であつた。

彼れの作品は、寧ろ明治以前に作られたものに優秀なものが多し。殊に小團次と提携して居た時代に傑作を出して居る。『鼠小僧』は安政四年一月、彼れが四十二歳の時の作で、當時、百餘日打續けて大當りを取つた出世作であつた。

其の後『十六夜清心』(安政六年)を出し、『三人吉三』縮屋新助(萬延元年)を出し、『白浪五人男』村井長庵(文久二年)を出して、彼れの特色は、略ぼ遺憾なく發揮された。明治に入つてからも、彼れは六年に『髮結新三』、十四年に『島衛月白浪』と云つたやうな傑作を出して居る。『霜夜鐘十字辻占』(十三年)、『水天宮利生深川』(十八年)なども度々上演された佳作である。『髮結新三』は江戸情調が鮮かに出て居る素直な作で、それを彼れが五十八歳の時に書いたことを思ふと、彼れの若々しい、水々した新鮮な心が、いつ迄も、失はれなかつたことを示して居る。

以上、擧げた『鼠小僧』、『十六夜清心』、『三人吉三』、『白浪五人男』、『村井長庵』、『縮屋新助』、『髮結新三』などを讀めば、略ぼ彼れの作風と長所とを窺ひ知られよう。要するに、黙阿彌は、江戸末期から明治初年にかけて、劇壇に輝いて居た優れた作家で、江戸演劇の最後の一大殿將である。

(七) 『東京繁昌記』其他

小説、脚本のほかに、當時行はれて居た短歌、俳句、漢詩、漢文の類があつたけれども、それ等は、時代と多く交渉なものであつた。さうした方面の作家には、相當知名の人々があつたけれども、彼等は、時代の潮勢を遙かに離れて見て居るに過ぎなかつた。唯成島柳北と脈を同うして居た服部誠一の『東京繁昌記』は、稍時代に接觸した傾向を持つて居た。『東京繁昌記』の漢文は、日本化した變體のもので、「牛肉の人に於けるは開化の藥舖にして而して文明の良劑也」と云つたやうな調子であつた。『妾宅』と題した文章の始めに「方今女學の行はるゝや専ら女子の道を明かにし、稍男女同權の説あり。然り而して別品の流行未だ曾て今日より盛んなる者あらざる也。妻に正權あり、妾に内外あり。一男にして能く一婦を守る者甚だ鮮し」と記述してあるのも、眞面目なうちに滑稽味を帯びて居る。一種の

東京印象記として、當時の風習、傾向の一面が、略ぼわかるるところに『東京繁昌記』の價值がある。要するに、明治初年から十年迄の文學は、僅かに黙阿彌と魯文とによつて、面目を維持した丈で他は云ふに足りなかつた。時代の動搖、實利思想の跋扈に加へて、讀者の鑑賞眼の幼稚、作家に凡庸の徒が多かつたことなどが錯綜した結果である。美術、演劇なども、矢張、文學同様に振はなかつたのも當然である。

演劇は、不振ではあつたが、俳優には、坂東彦三郎、中村芝翫、尾上菊五郎(何れも五代目)、河原崎權之助(九代目團十郎)、澤村訥升(二代目)、岩井半四郎(八代目)などが居て、實力の上では、決して前代に劣らなかつた。美術は不振のうちに、一脈の新生氣が、かすかにほの見えぬではなかつた。それは、明治七年から九年へかけて、フランス人アベルグレイを初め、イタリイ人キヨソネ、フォンタネヂエ、カルベルチエ、ラグウザらが、わが政府の招聘に應じて日本へ來て、明治に於ける洋畫界の先覺者川上冬崖や、國澤新九郎らの努力に呼應して、西洋畫の趣味を注入する先驅となつたことであつた。國澤は、二年間、イギリスに留學して、洋畫を研究した新人で、明治七年歸朝すると、彰技堂と云ふ畫塾を開いたり、銀座に家を借りて、小さな洋畫展覽會を開いたりした。國澤と共に洋畫教授に熱心だつたのは、フォンタネヂエで、裸體の活人モデルを用ゐて、寫生すると云ふ具合で、その門下から小山正太郎、淺井忠などが出た。

別に在來の舊生命を維持した有力な畫家には、歴史畫の菊池容齋、江戸氣分を代表した河鍋曉齋、柴田是眞らが居た。他に文人畫家として、中西耕石、村田香谷、田能村直入、谷口靄山、安田老山、奥原晴湖などが居た。また華山椿山の系統を繼承した瀧和亭、野口幽谷らが居た。而して文人畫の流行は、明治十六年の頃まで續いたのであるが、美術上から見て、時代の進運と何等關係した點がなかつた。要するに、演劇も、美術も、文學とひとしく、舊套墨守

の時代だった。

さうした沈滞と萎靡の上に一道の靈活な火を點じたのは、西南戦争であつた。新人と舊人、保守と進歩、士族と平民との闘争が、西南戦争によつて、大きく破裂してからは、時代の動搖も、一寸靜まつて、新人の時代、大衆が伸びる時代、進歩主義の旺んな時代が來て、文學、美術、演劇の上に新しい光彩を發生すべき機縁を與へることになつた。

第三章 翻譯文學と政治小説の流行

○(一) 政治思想の勃興と英佛獨の思想

西南戦後、急に猛烈な勢で、勃興したのは、新しい政治思想である。其の勃興の遠因近因について言ふと、遠因は福澤の『西洋事情』などに刺戟された事、福地の『東京日々』に於ける社説などに啓發された事、一般的に歐米文化に心酔し初めた事などを數へることが出来るが、殊に板垣退助が明治七年一月、副島、後藤、江藤らと共に、政府に對して、民選議院設立の建白を提出し、翌八年二月、愛國社を組織したことが、餘程有力な遠因となつて居た。

板垣らの民選議院設立の趣旨のうちには「方今政權の歸する所を察するに、上帝室に非ず、下人民に非ず、而して獨有司に歸す。夫れ有司、上、帝室を尊ぶと云はざるに非ず。而して帝室漸く其尊榮を失ふ。下人民を保つと云はざるに非ず。而して政令百端、朝出暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ。言語壅蔽、困苦告ぐるなし」と記してある。また板垣らが組織した愛國社の『本誓』のうちに「我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做するより外なかるべし。而して吾黨の目的は、唯々斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ」と述べてある。畢竟、板垣らの思想は、ルソオの民約説を其のまゝ鵜呑みとしたものであることがわかる。今日から見ると、幼稚で粗笨であると云はねばならぬ。

けれども當時にあつては、新しい卓越した意見であるとされて居た。この事はやがてフランス思想が、イギリス、アメリカの思想と併立するやうになつたのを意味して居る。イギリス、アメリカの思想は、全然、功利的で、社會の

實利を計ることを主眼として、政治に關する問題については、比較的冷靜な方であつたが、フランス思想は、ルソオの自由平等説を中心として、社會の根本的改革を實現するには、先づ政體の變革を第一義とすることを提示して居るところから、社會の實利と云ふ方よりも、寧ろ政治運動の方面に熱中する傾向を招致した。

フランス思想に共鳴した學者、青年らは、板垣らの主張に賛成したが、ひとり、ドイツ思想に傾倒して居た加藤弘之らは、それに對して、議院尙早論を唱へた。即ちイギリス、アメリカ、フランスの思想に對して、更にドイツ思想が併立することになつたのである。加藤らは、近世ドイツの國家學者ビデルマン、スタインらの説に共鳴して、あく迄、君主の無上權を尊重して、萬民平等の權利を否定し去らうとした。フランス思想とは、丁度直反對で、彼れが進歩的、積極的であるとすれば、これは、保守的、消極的の傾向を持つて居た。ところで、一般社會は、ドイツ思想よりも、フランス思想を歓迎すると云ふ風があつた。ドイツ思想は、官僚中の有力者や、官學の徒のみが共鳴したに過ぎなかつたのである。

かうして、政治上の運動が、次第に目立つて來たところへ、西南戦争が爆發して、一時沈黙したが、戦争が鎮まると、自由民權説が急に非常の勢を以て、流行し初めた。それは、今まで腕力を以て、一氣に政府を倒さうとした士族が、却て政府のために抑へ付けられて、大抵没落してしまつたので、残存した士族の群は、腕力の無効を悟つて、平和手段を以て、政府に肉迫しようと考えた結果、政治上に於ける新運動の合言葉として、自由民權説を唱へ、高調し出したのである。而して其の唱首は、土佐の板垣退助だつた。

板垣の自由民權説に油を注いで、其の勢を強めたのは、新聞紙であつた。それは、福澤の國會開設論が、一週間はかり續けて『報知新聞』に載せられたことで、それに對して、諸方の新聞は、各自旺んに論議をしたのである。此の

氣勢に煽られて、新しい政治思想は、到所に勃興した。そして明治十三年の國會期成同盟となり、自由黨の結黨準備となり、其の盟約書中に(一)日本人民の自由を擴充し權利を伸す(二)國の進歩を圖り、人民の幸福を増益す(三)國民の同權(四)立憲政體の樹立を主張するに至つた。かうした氣運は、やがて熟して、明治十四年十月には、板垣を首領として自由黨が生れた。其の翌年には、イギリス風の政治思想を抱いて居た大隈重信を首領とした改進黨が生れた。以上は、政治思想の旺盛になつた近因と趨勢との大要である。

それ等の時代思想を背景として、文學、美術、演劇などの方面を見ると、矢張、相互に一脈の連絡を有することを見出すのである。此の書の主眼とするところの文學方面を見ると、強い歐化熱及び新政治熱の勃興に伴うて、翻譯文學、政治文學が、勃然として流行し始めて來た新趨勢を第一に擧げねばならぬ。

(二) 翻譯文學の種類及び文體

當時、流行した翻譯文學は(一)政治的(二)純文學的(三)科學的の三類に分つことが出来る。政治的なものは、中江兆民がルソオの民約論を譯した『民約譯解』を始め、宮崎夢柳、小室案外堂らの『夢戀々』『鬼歌々』『西洋血潮の荒波』『自由の凱歌』などがある。純文學的なものは、政治趣味乃至歴史趣味を加へたものと雜種との二種に分つことが出来る。前者は、リットン、スコット、ヂスレイリなどの小説を譯したもので、織田純一郎の『花柳春話』、關直彦の『春鶯囀』、渡邊治の『政界之情波』、牛山鶴堂の『梅鶯餘薫』、坪内逍遙の『慨世士傳』、藤田鳴鶴の『繫思談』、などを數へられよう。後者は兆民の『維氏美學』、外山、山、矢田部尙今、井上巽軒の集作『新體詩抄』、坪内逍遙の『該撤奇譚』、井上勤の『全世界一大奇書』、『狐の裁判』、片山平三郎の『鷲鷺道回鳥記』、末松青萍の『谷間の姫百合』

などを擧げることが出来る。その中、沙翁物が存外多く譯述せられてゐる。科學的なものには、フランスの科學小説家ジュウルベルヌの作品が多く譯出された。其の最初に出たのは、川島忠之助の『新説八十日間世界一周』で、それに續いて井上勤の『六萬英里海底旅行』、『亞弗利加内地三十五日間空中旅行』、『月世界旅行』、紅芍園主人の『鐵世界』、福田直彦の『萬里絶域北極旅行』などが出た。その他『學術妙用造物者驚愕試驗』なども出た。かうした翻譯が、二十年頃まで、續々出たのである。

以上に就て、細説すると、兆民の『民約譯解』(明治十五年)は、漢文體ではあるが、政治思想勃興の勢に乗じて、非常に歡迎された。板垣らによつて、漫然と鼓吹されたルソオの思想が、具體的に傳へられたのは、此の譯書のためであつた。宮崎夢柳の『自由の凱歌』は、デュマの作を譯したのであるが、『鬼歌々』その他のものと同様に、自由民權思想を寓したもので、其の舞臺を、フランス革命に取つたものであつた。高山樗牛は、これ等の翻譯を見て、「當時の政治界の暗澹たる風潮を窺ふことが出来る」と云つて居るが、要するに、文學鑑賞の眼を以て、見るべき程のものではない。『自由の凱歌』の文章は、大分舊式なもので、馬琴調を摸したやうに思はれる。

ダルバートと云へる街衢の中央より思ひも寄らず、忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一彪の軍馬、スワ敵の我れに先たち寄せ來りしこそ健氣なれ、花々しき手始めの戦ひなし、革命黨が手並の程を見せ呉れんと急に隊伍を立直し、今や遅しと控へし所ろ、是は全く敵にあらず、巴里の護衛兵の政府に負き、人民を援けん爲め、此邊まで來りしものなるにぞ、革命黨は愈々之れに勇氣を増し、ドット揚げたる鯨波の聲。

と云つたやうな調子である。ところが、其れはひとり『自由の凱歌』ばかりに留まらなかつた。純文學的な作品で政治趣味乃至歴史趣味を帯びたものを譯した物にも、矢張、馬琴調が附いて廻つて居た。でなければ、漢文調に囚はれ

たもので、明治二十一年、二葉亭四迷の『あひびき』が出るまでは、すべて舊套を脱しなかつた。

それは、政治小説ではなく、寧ろ純文學的な範疇にあつた織田純一郎の『花柳春話』(リットン)の如きも、明治十二年に出て、非常に歡迎され、其の序文のうちに、「舊文を一變して、苟も四十八字を讀み得るの徒は、之を讀むで解せざるの憾なからしめ、以て啓蒙英史の風俗圖に充んとす」と云つては居るが、矢張舊式に隨して居た。其の一節に「花は散り、霞がくれを行く雁の影に春暮て、かたみに残すものとは、青葉かくれに宿かりて、昨日を語ふ鶯兒の聲より外に跡もなし、然れども人情熱を去り、冷に歸するの理とて、春の後なる夏景色は亦一層の詠なり」とあるのを見て、舊文を一變すると云ふ譯者の意氣込を全く裏切つて居ることがわかる。

同じく、リットンの作を譯した藤田鳴鶴の『繁思談』は、實際、尾崎庸夫(朝比奈知泉)が譯述者であつた。これも「世の譯家、其構案のみを取りて、之を發表するの文辭に於て、總て心を用ゐる事なし……譯者竊に茲に慨するところあり、相謀つて、一種の譯文體を創意し、語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を存せん事を期し、これが爲めに瓊末に涉れる邦文の法度の如きは、寧ろ之を破るも、肯て顧みる所に非ず」と告白して居るが、譯文を見ると「ケネルムは、累代培養せし樹林の下蔭に傍ふて、我家へと返りたるが、其路は一面青草にて潺々たる溪流其側を通過し、今しも別れし吟客がたどり行ける塵埃滿眼の大路に比すれば、瀟洒清麗、同日の談に非ず」と云つたやうな生硬なもので、大分讀みづらく出來て居る。これは、當時の譯文に共通して居た弊害だつた。

蓋しそれ等の譯者は、主として政界の志士で、文學上の専門的な素養がないのみならず、譯文の上に微妙な味を出す文の卓越した手腕もなかつたのであるから、優れた譯文を生み出すことが出來なかつたのだ。彼等は、序文に於て大言壯語して、譯文の模範を示すやうな事を云つたけれどもそれは常套的な誇張した御座なりの言葉に過ぎなかつた。

而も専門家でなかつた彼等が、純文學的な作品を譯した動機は、何處にあつたかと云へば（一）彼等が歐米文化の一半を理解して居た眼には在來の小説が餘りに平凡無味に見えた爲め（二）政治趣味を鼓吹しようか、乃至は新しい文學趣味を普及させようかと云ふ目的を以て居た爲めであらうと思はれる。

それ等の翻譯小説が、讀者に歡迎されたのは、讀者のうちにも、歐化熱や、政治熱に感染したものが多くて、在來の舊小説よりも、新しい歐米の小説を見たいと云ふ烈しい欲望を有して居た爲めだつた。そして彼等の文學的鑑賞眼の程度は、依然、進歩して居なかつた爲めに、粗雑な、生硬な譯文さへも、清新な文字のやうに思つて、愛誦したのである。

以上のやうな趨勢の中で、稍例外とすべきは、坪内逍遙が譯したリットンの『慨世士傳』である、それは流石に後來、文壇第一流の地位を占めた人の手になつたものであるから、譯文はたとひ、馬琴調の色彩を帯びて居ても、流麗で、婉曲で、一異彩を放つて居た。

（三）翻譯文學の效果

雜種の方には、文學上から見て相當の價値があるものが比較的に多かつた。井上勲が譯した『全世界一大奇書』の原本は『アラビアンナイト』で、片山平三郎の『鸞環道回島記』は『ガリバース・ツラベル』を譯したのであつた。また『狐の裁判』は、ゲエテの作品を譯したものだつた。それ等のなかに、特に見るべきものは、坪内逍遙の『該撒奇譚』で、これは、シエクスピアの『シイザア』を譯したものだつた。

其の他、兆民の『維氏美學』は、鷗外の『審美綱領』の出る前に於ける唯一の美學書で、原著者は、ユウジエエ

ヌ・ペロンであつた。此の書は、外山、山等の『新體詩抄』と共に、後の新文學興隆の上に資したところが少くなかつた。

科學小説は、單に當時の讀者の好奇心を挑發し、満足させたに過ぎなかつたであらうけれども、一面、暗々のうちに科學思想を養成する機縁となつたにちがひない。それと同時にロマンチックな空想を湧起せしむる力もあつたやうに思はれる。

要するに、翻譯文學の流行は、西歐の新趣味、新知識を大衆の一部に與へて、新しい小説の興起を促すべき一原因となつた。かうした機縁に應じて起つたのは、末廣鐵腸、矢野龍溪、藤田鳴鶴、柴東海散史、須藤南翠などで、南翠一人を除くと、他は何れも評論家であつた。かうして逍遙、鷗外、紅葉、露伴、二葉亭などが出るまでに、素人の手によつて、文學上の過渡時代を作られたことは、興味ある現象だつた。

（四）政治小説の作者と技巧

當時の政治小説は、嚴密に文學上から見ると、政治小説とは云ひ難いものもあつた。少くとも、藝術的な政治小説に乏しかつた。單に著者の政治思想を小説の形式を假りて、露骨に發表したものが多かつた。畢竟、此の種の作家は在來の舊套に囚はれた小説の缺陷を補はうとする意志を臆氣ながらも、持つて居たのであらう。だが、それよりも尾崎行雄が云つたやうに「身を小説家に現して、錦心繡腸を鏡花水月の幻魂に發露し、以て大聲をして俗耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便なりとす」との方針で小説を政治上の方便に利用したのみならず、其の文學的な素養や、藝術的氣稟にも缺乏して居た爲めに、今日から見ると、幼稚なものとなつたのが少くない。

政治小説として、最も早く出たのは戸田欽堂の『情海波瀾』(明治十三年刊行)である。その後、百華園主人、宮崎夢柳、坂崎紫瀾、小室案外堂らが出たが、特に取り出で、云ふべきほどの作品がない。その最初に成功した作品は明治十六年に發表された矢野龍溪の『経國美談』であつた。十七年には、藤田鳴鶴の『文明東漸史』、十九年には、末廣鐵腸の『雪中梅』、二十年には南翠の『新装の佳人』、鐵腸の『花間鶯』、東海散士の『佳人の奇遇』などが出た。此のうちで『文明東漸史』だけは、一種の史論で、小説ではなかつた。高野長英、渡邊華山の生涯を描いたところが、幾分か小説らしいと云ふ丈のものであつた。

他の五篇は、先づ政治小説と云つて差支へはないが、其のうち『経國美談』と『佳人の奇遇』とは、史的ロマンスの風味が際立つて居た。『経國美談』は、ギリシヤの歴史を敷衍して、稗史的に作りあげたもので、『佳人の奇遇』は近代歐米に於ける史上の出来事を網羅して、亡國の志士に同情を寄せたものであつた。

『経國美談』が狙つたヤマは、新興の日本にふさはしいと思はれるところのギリシヤの齊武の名士エバミノンダスとペロピダスとが力を合せて、國威の隆祥を計つた勇しさにあつた。『佳人の奇遇』が狙つたヤマは、當時の自由獨立の思想に當てはまるべきアメリカの繁昌を叙して、時人の共鳴を得ようとしたところにあつた。『経國美談』は、事實そのものが、ロマンチックである。『佳人の奇遇』は著者の空想から、アイルランドの一人佳人幽蘭女史を點綴して、それに各亡國に於ける志士を配合して、ロマンチックな空氣を作り出して居た。

『経國美談』の文章は、流石に龍溪が苦心した丈あつて、片假名交りの穩雅なもので、今日、見ても、左程、讀みづらくはない。『佳人の奇遇』は、漢文直譯體で美辭佳句を無暗に排列した誇張的臭氣の多いもので、今日、見ると、隔世の感がある。この書は、表面、東海散士の手になつたとあるけれども、事實は、半ば以上高橋太華の筆になり、西

村天四が削正した部分があると傳へられて居る。

以上の二書は、其の頃の青年に心から歡迎されて、洛陽の紙價を高からしめたものである。政治熱が強くて、漢文脈の誇張した文章を愛する風があつた當時の青年が『佳人の奇遇』を見て、どんなに驚喜したかは、今日の青年には推測し得られないほどである。經國の志士を氣取つて居た當時の青年が、窃かにエバミノンダスや、ペロピダスに私淑して『経國美談』を始終、手から離さなかつた光景も、一寸、今から想像しかねるほどである。左に『佳人の奇遇』の一節を引用して見よう。

時に金鳥既に西岳に沈み新月樹にあり。夜道朦朧なり。少焉ありて、皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち、窓を開て曰く、光景畫くが如し、郎君幸臨す、欄外風清花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期すべからず。徒に相對泣する亦何の益かあらむや。氣を鼓し勇を奮ひ、歌舞吟咏自ら寛にすべしと。

當時は、かうした文章が「巧妙だ、爽快だ」と云つて、愛誦されたのである。それに比較すると『雪中梅』『花間鶯』『新装の佳人』などは、其の後に出了た硯友社一派の小説などに稍近い文章となつて居た氣味があつた。換言すれば、寫實的傾向が、少しばかり出て居た。どうかして、新しい文章を作らうとした心持が、仄かに浮かんで居た。

けれども今日から見ると、『雪中梅』『花間鶯』などは、矢張、漢文脈が餘りに勝ちすぎて居て、俗語との調和が、うまく行つて居なかつた。『雪中梅』の主人公國野基が大演説をやる有名な章の發端にある一節を見ると「鐵道馬車ゴウ」と輾り去つて、和合社の乗合馬車ガラ〜と馳せ来る、路狭く人多く往來雜沓す。忽ち見る横巷の入口に高く數帳の表榜を掲ぐ。曰はく〜來る二十八日不論晴雨書畫雅集、席上諸先生揮毫、會主蛭字園再拜。曰く〜今日二十日(日曜日)午後一時より井生村樓に於いて正義社政談演說會、出席辯士某某」とあるのを見ると、殊に漢語と俗語との不

調和が目立つやうである。が、左の一節などは、稍柔か味が加はつて居る。

少女は枕元にて悄然と物思はしげの顔付なるが色は白雪を欺き、鼻筋通り、眉秀で、眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり
 数日前に結びしと思はるゝ島田醬は少し亂れて黒髪面に垂れ、母の寝顔を窺ひて、ハラハラと涙を落し、手巾にて之を拭ふ有
 様は梨花一枝帯春雨の風情なり。姑くをつて老母は、コンコンと咳をして目を開き「オヤお春はまだ其處に居るか、ツイウ
 トウトと睡つた……」

だが、地の文と會話とが、まだ調和し得ないあとを歴然と示して居る。島村抱月が『雪中梅』の文章を評して「武
 骨漢がことさらに俗に碎けた事を言つたり、ことさらに細かい事に氣を付けたりするやうな所に、在來のいかめしい
 一遍の漢文から、一步新しい方へ脱出しやうとして居る所はあるが、それが十分に物になつて居ない」と云つたのは
 正當である。けれども鐵腸らを始め、當時の政治小説の作者は、其の不調和を意に介しないで、漢文直譯的な地の文
 から、平坦なやさしい會話に移つてゆく變化を一つの獨立的なやり方だとして居た。

『雪中梅』が『經國美談』などに次いで、相當な喝采を得たのは、主として、二十三年の國會開設と云ふ點にヤマを
 置いて居るからであつた。描寫が粗大であつても、事柄そのものが當時の人々を動かしたのだ。つまり、その實感に
 裏付けられたところが讀者を共鳴させた。それから南翠の『新粧之佳人』は、歐化熱の有様を描くと云ふ上にヤマを
 置いた爲め、これも相當に讀書界を風靡した。それには、當時最も目新しく時人の眼に映つた舞踏會や、若い政治家
 や、美しい令嬢などが描かれてあつて、一々、モデルさへあつたと傳へられたところから、誰も好奇的な心持で『新
 粧之佳人』を見たのであらう。

〇(五) 當時の青年と文學

① 田山花袋は、『東京の三十年』のうちで、其の時分の新知識ある青年が、どんな心持で、當時の文學に對して居たか
 を叙述して居る。其の青年と云ふのは、花袋の友人で政治家志望で、文學好きだつたと云ふから、一部の青年の心持
 を代表して居るやうに思はれる。

「僕も、もう少し文章が書けると、文學をやるんだがな、文學者、藝術家が何と言つても、一番すぐれた高尚な事業なんだか
 らな」何處からさういふ智識をかれは得たらうかと思はれるほど、文學者、小説家に就いての新しい知識を持つてゐた。或は
 かれも紅葉や思案や眉山が養はれたその同じ空氣の中に住んでゐたためであるかも知れなかつた。かれは紅葉が豫備門で三馬
 研究をやつてゐる批評などをした。「でもな、君、今の奴等のやうに、三馬なんか研究してゐちや駄目だよ。西洋にはいくらで
 もえらい文學者がゐる。すぐれた小説がある。これからの文學をやる奴は、何でも外國のものを讀まなければ駄目だ。」かう言
 つては、かれはデッケンス、サツカレエ、ユウゴオ、ヂュマ、ゲエテなどと言つて、昂然として、指を折つてその大文豪の名
 を擧げた。かれはまた政治と文學との一致に就いてはなやかな空想を抱いてゐた。かれはよくピーコンスフィールド侯(ヂスレ
 リー)の語を持ち出した。「議會に出で、は議長、内閣に入つては總理大臣、そしてあゝいふ、小説を書く、實に理想的だ」な
 どと言つた。ピーコンスフィールド侯の作もかれは澤山に持つてゐた。「Venetia」「Vivian Gray」などの語を私によくして吳
 れた。『佳人の奇遇』や『雪中梅』などといふ新刊書もかれは常に讀んだ。丁度須藤南翠が改進黨新聞にその『新粧之佳人』を
 連載してゐる頃で、その中には多少井上侯爵の舞踏熱の時分の空氣や人物が書いてあるので、かれは頗るそれを愛讀した。

今日から見て文學的價値の比較的乏しかつた政治小説が、殆ど政治熱、歐化熱そのものゝ爲めに廣く讀まれた具合
 が、花袋の筆によつて察することが出来る。

結局、いつも、才子佳人を主人公として、著者の政見を托した當時の政治小説は、單に其の時分の文壇に喝采され
 た丈で、一時的生命を有したに過ぎなかつたものが多い。大部分は、後の文學に對しては、殆ど交渉がないと云つて

も宜い位であつた。けれども相當聲價を得た作品には祖國愛の情熱が溢れてゐて一種の生氣が充實した。技に一つの長所がある。それに間接の影響がないでもなかつた。それは、翻譯文學と共に、舊文學の殘影を次第に驅逐し、葬り去つて、眞に文學的に價値ある新文學の興起すべき地ならしをやつたことであつた。畢竟、それ等は舊文學から新文學へ推し移つてゆく過渡期の産物だつた。が、今日、昭和維新に直面しつゝあるの時、新しく政治小説を見直すならば別に何らかの暗示を得られようと思ふ。

尙ほこゝに一言したいのは、當時の文壇が三田派によつて、一時、光彩を加へたことであつた。三田派の機關『時事新報』は、西南戦後に於ける新聞紙發展の機運に乗つて、明治十五年に創刊されて、福澤諭吉が、社説の筆を執ると共に、門下の人材を新聞界に入れた。藤田鳴鶴、矢野龍溪、末廣鐵腸、尾崎學堂らは、何れも、福澤の訓陶を受け、三田派の秀才で、政治家と新聞記者とを兼ねて居た。それ等の人たちが云ひ合はせたやうに、政治小説の方に手を付けて、一時、文壇を風靡したのであつた。當時未だ若かつた彼等は、恐らく、チスレリイのやうに、大きい政治家と文學者とを兼ねて、議會でならば議長、内閣へ入るならば總理大臣、そして傍ら、小説を書いて、才子佳人の喝采を得たいと夢想したのであらう。それを幾分か、後日に實現し得たのは、唯尾崎學堂一人であつた。

（六） 劇界革新の微光

序に述べたいのは、當時の演劇と美術とのことである。それ等も、矢張、文學と同様、歐化的風潮の外に起つことは出来なかつた。其の氣運を眞先に感知したのは、劇界の策士と云はれた守田勘彌（先代）であつた。彼れは、十一年六月に新しく出来上つた新富座に始めて瓦斯を點じたり、有力な高官を開場式に招待したりなどした。そして當時

の名士で觀劇眼の優れた人たちの意見を入れて、リットン原作を默阿彌が翻案したところの『人間萬事金世中』と云ふ新狂言を上演した。

『默阿彌脚本集』のうちには『金の世の中』について「一種の喜劇味を伴つて居る社會劇として見ても、默阿彌の作中別の味ひを持つてゐる特色あるものである」と云つて居る。此の作中には、魯文や、『東京繁昌記』の服部誠一のやうに、矢張、文明開化熱に浮かされて、夢中になつて居た當時の社會狀態を巧みに採り入れてある。序幕に小僧の野毛松が、番頭蒙八に「これ〱野毛松、ふさけるな、小僧のくせに利いた風に、茶など呑むには及ばむことだ」と叱ると、直ぐに反抗して「いや小僧だつて番頭だつて、開化の世界は同じ權だ、さう安くして貰ひますまい」と云ふところや、毛織の家に寄食して居る惠府林之助が「當時は開けて居る故、金さへあれば蒸汽にて早速行かれぬ事もないが蒸汽どころか電信を掛ける錢さへ自由にならぬ」と嘆息するあたりは、當時の見物に喜ばれたであらうと思はれる。此の狂言が上演されると、横濱在留のオランダ人三十餘名が、驚喜の眼を睜つて萌葱地テレンプの引幕を送つたりして、景氣を添へた。勘彌は、非常にそれを喜んで、鄭重に彼等を招待したと云ふやうな挿話さへあつた。

かうして、新富座は、眞先に時代の新氣運に乗じて、動いたので、ドイツの皇弟ハインリヒ親王や、アメリカの大統領グラントが來朝された時は、第一に觀覽に供すると云つた風で、續いて十二年九月には、英米の俳優ダギットソン、ウキルソン、マカラン、ハノゲマン、レオン及びフランスの音楽家マダム・ハリリマンらを加へて、團十郎一座と共に内外人合同劇を催はした。

けれども當時の觀衆は默阿彌が翻案した『金の世の中』に共鳴し得たであらうけれども、内外人合同劇に共鳴するほどの素養も、理解も持つて居なかつたので彼等の多くは、それを冷笑したり、譏つたりして、眞面目に外人の演技

を見ようとしなかつた。其の結果、勘彌の新しい企ても、非常な失敗に歸して、財政上に大きな打撃を受けた爲め、今まで執つて来た進歩主義に對して、懷疑的になつた。

爾來、勘彌は、保守主義に逆戻りして、劇界改革の意氣を頓に抑へてしまつたが、十三年一月に彼れの發意で、始めて新富座へ當時の新聞社の劇評擔當記者を招待して、今日のやうに、どの新聞も、劇評を載せるやうになつた例を開いた。

其の後、劇界革新のために設立されたのは明治十九年八月に發表された演劇改良會であつた。其の發起人のうちには、井上馨、森有禮、福地源一郎、外山正一、矢野文雄、依田百川、末松謙澄、澁澤榮一、藤田茂吉、和田垣謙三らが居た。賛成人のうちには、西園寺公望、田口卯吉、伊藤博文、大隈重信、陸奥宗光、大倉喜八郎、千葉勝五郎らが居た。かうして、當時の有力な名士を多數に網羅してあつたところから、一時は、社會の耳目を聳てさせる丈の力があつた。

それで、外山正一は『演劇改良私考』を出版して、新時代の演劇についての感想、要求を披瀝し、末松謙澄は、十九年十月、一つ橋の講堂で、劇界革新について演説を試みると云つたやうな風で、築地に於ける大椿樓の改良朗讀會には、伊藤博文も出て、依田學海、川尻寶峯合作の『吉野拾遺名歌聲』の朗讀に耳を傾けた。

當時の改良意見のうちには、女形を廢して女優を用ひ、花道や、廻り舞臺や、チヨボを全廢したいと云つたやうな歐化的な要求もあつた。だが、それは、未だ俳優そのものが、みな其處迄進んで居ない上に、劇場當事者も、左程、改良について熱心でなかつた爲め、いつの間にか、改良會も立消えとなつて了つた。

かうした新風潮のうちにあつた市川團十郎は、未だ其の活歴風の技藝を完成する迄には至らなかつた。其の應揚な

氣品ある藝風は、看客の一部から高尚ぶるとのみ誤解されて「活惚を踊れ」と云はれたことさへもあつた。菊五郎は先代の藝風を守つて、巧緻なところが鮮かに觀衆の眼に映つて居たので、一般の見物には、團十郎よりも、より多く喝采されると云つたやうな有様だつた。

(七) 美術界と歐化的風潮

美術方面を見ると、こゝにも、歐化的な色彩が相當に著しかつた。それは、二つの方向を執つて現はれた。其の一つは、洋畫の勃興運動、今一つは、米人フェノロサの提唱によつて、維新以來、全く閑却されて居た日本畫を復興させようとするに至つたことであつた。尙ほ他に浮世繪の復興もあつた。

純日本畫の復興は、極めて、重大な意義を以て居た。當時の顯官は、概して田舎武士の出身で、美術上の鑑識眼が殆どなかつた爲め、洋畫や、石版畫を新文化の象徴のやうに思つて、日本畫を輕視したので、古來有名な畫家の手になつた傑作さへも、顧みられないやうな有様になつた。而も時人は、概してそれに雷同して、少しも、日本畫本來の價値を自覺しなかつた。かうして、日本畫の命脈が殆ど稀薄になつた時、其の眞價を認めて、賞揚に力めたのは、米人フェノロサであつた。

日本畫の眞價を發見した人は、必ずしも、フェノロサのみではなかつた。フランスの文學者ゾラ、ゴントウル兄弟及びモネエ、デガア、ホキツスラア、マネエらの美術家も亦日本畫の讚美者で、ゴントウルには『歌麿傳』、『北齋傳』の著述がある。けれども、それ等の事は、遙かに後になつて知られた事實で、明治初期にあつては、先づフェノロサを以て、最初の日本畫の嘆美者としなければならぬ。

アアネスト・フエノロサは、北米ボストンの人で、明治十二年、日本に招聘されて、政治經濟の教授に當つた。彼れは、日本美術に對して、深い興味を抱いて、狩野永應について、鑑畫法を學んだ。その結果、日本畫が却て洋畫に優つて居ることを發見して、明治十四年、其の旨を世間に發表した。

フエノロサは時流に先立つて、再三、日本畫を賞揚して措かなかつたのみならず、自ら進んで、岡倉覺三、河瀬秀治らと共に、明治十八年、鑑畫會を組織して、時人が、日本畫に冷淡なのを警醒するに力めた。それと同時に、開成所教師であつたドイツ人ブグネルや、イタリー人キヨソネや、アメリカ人ビゲロウも、口を極めて日本美術の尊いとを力説した。

若しそれが、日本人のうちから出た叫びであつたならば、恐らく誰も耳を假さなかつたであらう。けれども歐化熱の烈しい時代に當つて、歐米人の云ふことは、何事も無條件で共鳴した傾向のある場合なので、智識階級のうちには、漸くこの點に反省して、靜かに日本畫のことを考へて、其の再興を計らうとする人たちが出て來た。明治十五年及び十七年に、政府が繪畫共進會を再度開いたのも、日本美術協會の前身である龍池會によつて、數度、觀古美術會を開いたのも、皆フエノロサ等の刺戟に基づいたのであつた。それが一步を進めて、日本美術協會の新古美術の展覽會を生むやうになり、更に、東京美術學校の設立が、明治二十年十月に勅令を以て、公布されるところまでいつたのである。

洋畫は、西南戰後、頓に勃興して、明治十一年には、淺井忠、小山正太郎らが、洋畫研究所十一會を神田に開いた。洋畫家のすべてが一致して、共同畫談會をも催はした。それ等の形勢は順潮に推し進んだのであるが、十四五年頃から、日本畫復興の氣勢が急に昂ると同時に、衰微の兆候を帯び始めた。明治十五年に開かれた政府主催の繪畫共進會

で、洋畫の出品を許さなかつたのは、そのためであつたと云はれる。

かうした不振状態を見て、洋畫家の一團は、發奮して、明治十六年、兩國井生村樓に集つて、振興の方策を議した。そして其の翌年には、淺井忠、小山正太郎らが、十一會を發展させて、頻りに頽勢を盛り返さうと力めたけれども、一向、手答へがなかつた。左様した不振は、日清戰爭前後まで續いた。

浮世繪は、一時、不振だつたが、此の期に入つて、世の中が、大分、落ち付いてくると同時に、其の需要を増して復興の時代に入つた。それに、一方には、新聞紙が發展し始めて、其の方にも浮世繪畫家の需要があつたので、新しい壇場を得た形となつた。

當時、浮世繪の大家として知られたのは、豊原國周、月岡芳年、小林清親、小林永濯、落合芳幾らであつた。國周は俳優の似顔繪に於て、芳年は、洋風を加味した人物畫殊に美人風俗畫に於て、清親は新しい滑稽畫に於て、永濯は小兒などを描くことに於て、芳幾は江戸狹斜の風俗を寫すことに於て、各自、傑出して居た。其の後繼者としては、富岡永洗、尾形月耕、武内桂舟、右田年英、水野年方らがあつた。

尙ほ日本畫壇に於ける此の期の大家として、フエノロサと共に、邦畫復興に盡した狩野芳崖、橋本雅邦の二人あることを忘れてはならぬ。彼等の事業は、第二期に入つてから、改めて記述する。

第二期 新文學發生時代

第一章 當時の思潮及び文學の概勢

(一) 歐米文學思潮と國粹的思潮

第二期に入つて、文學界は、始めて、正しい道を歩み始めた。其の現象を考察すると、第一に擧げなければならぬのは、坪内逍遙が『小説神髓』及び『當世書生氣質』を著して、明治に於ける新文學の黎明が近付いたのを知らせる曉鐘をつき鳴らしたことである。在來、江戸文學の餘睡を嘗めて居た文學界は、翻譯文學や、政治小説の刺戟によつて、昏睡のうちから、僅かに半眼を開きかけて居たのが『小説神髓』によつて、愈々兩眼を開いて、眠りから醒めたのである。それに續いて、長谷川二葉亭の處女作『浮雲』や、翻譯『あひゞき』が出るに及んで、黎明の光りが、鮮明になつて來たのである。

第二に擧げねばならぬのは、『小説神髓』の公刊と前後して、尾崎紅葉や、山田美妙、石橋思案らが硯友社を組織して、江戸文學の研究に熱中する傍ら、幾分か新しい英米の文學にも接觸して居たのが『小説神髓』や『當世書生氣質』などから強い刺戟を受けて、先づ美妙の主宰する女學雜誌『以良都女』の發刊となり、硯友社同人の機關雜誌『我樂多文庫』の創刊となつたことである。

かうして、一方に於て、小説界の黎明が來ると共に、一方に於て、評論界の黎明が近付いたことは、第三に擧げねばならぬ重要現象である。それは、徳富蘇峯が、九州熊本から『將來の日本』を携へて上京して、忽ち世間に歡迎せられ、續いて二十年二月『國民之友』を發刊し、『新日本の青年』と題する有名な論文を公にして、一躍、評論界に於

ける新しい重鎮となつたことであつた。蘇峯を中心として、民友社が組織されて、そこから徳富蘆花、竹越三又、山路愛山、國木田獨歩らを出した。

以上三つの重要現象のほかに、歐化主義の反動から、三宅雪嶺、志賀重昂らが、明治二十一年、政教社を組織して國粹主義を宣傳すべき機關雑誌『日本人』を創刊したことや、落合直文らが新しい國文、短歌を始めたことなども、注目に價した出来事であつた。

右に擧げた四つの現象に於ける思想的、社會的背景について、こゝに一瞥を與へると、思想的には歐米に於ける文學及びキリスト教思想が、大きい主潮となつて、小説界の革新と勃興とを促がしたことを見逃すことが出来ない。それに對峙したのは、江戸文學の餘脈及び儒教的、佛敎的な思潮であつた。歐米文學の一部は、玉石混淆ではあるが、既に第一期の後半に入つて、續々翻譯されたのみならず、英米文學に精通して、そこから深い印象と感銘とを得た坪内逍遙が、小説革新に志して『小説神髓』を書いたのであつた。蘇峯の『將來の日本』も亦英米文學及びキリスト教に傾倒して居た彼れの腦裡に醗酵した產物で、それによつて、評論界の革新を促がさうと企てたのである。小説も、評論も、かうして、英米文學の感化からして、革新を企てられたのだとすれば、それを以つて、大きい主潮の一つと見做して、差支へないわけである。

蘇峯によつて組織された民友社は、一體にキリスト敎的な傾向を持つて居たものが多かつた。蘇峯兄弟は勿論、獨歩や、湖處子を始め、社中には、さうした色合を帯びたものが相當に居た。そして宗教雑誌ではあるが、文學趣味を多分に有して居た『女學雜誌』(二十一年十月創刊)なども、キリスト教思想を旺んに鼓吹して、新しい文學の搖籃となつた。

かうして、歐米文學及びキリスト教思潮が文學界の新しい時代を色付ける主流となつて居た時、國粹主義の提唱によつて、新たに國文學や、漢文學の勢力が、幾分か復活した氣味合になつた。佛敎なども稍勢を得て來た。そして雑誌『日本人』のほかに神儒佛の思想を宣傳すべき『大道叢誌』、日本弘道會の機關『弘道會雜誌』、陸羯南の儒敎的思想と國家主義とを唱説する『日本新聞』などが出て、歐化主義、キリスト敎などに對抗した。勿論、其の勢力は、歐米文化思潮に及ばなかつたけれども、文學界の一部分に影響した。佛敎思想に根源を有して居た露伴が『風流佛』と共に、其の頭角を擡げたことや、紅葉と共に西鶴の文章に傾倒したことなどは、其の一例である。

〇(二) 當時の社會思潮と文化

更らに社會方面を見ると、歐米文化の勢力は、増加してゆく一方だつた。少くとも、二十三年、教育勅語が發布されるまでは、全盛を極めた。殊に其の最高頂に達したのは、明治十七年から二十年頃迄であつた。伊藤、井上らが、條約改正を早くするために、其の一方法として唱へ出した歐化政策によつて、鹿鳴館の夜會や、假裝舞踏會などが、旺んに催はされて、はては日本人種改良を名として、日本の家屋、飲食、衣服をも、歐化して了はうとすることを唱へるものが出た。かうして、歐化主義が極端まで推し進められると、愛國心を有する日本人の一部は、もう我慢し切れなくなつて、國粹主義を唱へ出したのである。

其の文學方面に於ける現象は、既に略述したが、政治方面に於ては、鳥尾小彌太の保守中正派、教育方面では、川合清丸の日本國教大道社、西村茂樹の弘道會などの活動を見るに至つた。それがため、歐化主義は、社會に於て、幾分の打撃を受けて其の勢は、少しづつ衰へて來た。拙著『明治大正五十二年史論』に於て、私は歐化主義と國粹主義

との戦ひについて、かう述べたことがある。今左に引用しよう。

當時の歐化的傾向に對して、最も有力に國粹保存主義を提唱したのは、三宅雪嶺を中心とする『日本人』と陸羯南を中心とする『日本新聞』の一派であつた。彼等は、盲目的歐化主義を排撃すると同時に、日本特有の傳統的長所と精華とを保持しなければならぬことを雄健な力ある文章を以て力説した。此の叫聲は歐化熱に對して起つた反動的潮流と合して、強く民心を動かし、一部の識者をも動かし得たのである。これと前後して、同じく國粹保存の運動に参加した人には西村茂樹、川合清丸、鳥尾小彌太、谷干城等があつた。西村は日本弘道會に據つて、日本固有の道徳を説いた。川合は、大道社に據つて、日本固有の宗教を高調した。谷は勝海舟、副島種臣等と時弊を痛論し、鳥居は『玉法論』を著して保守的政法論を鼓吹した。かうした思想界の動力は、やがて政治上にも、同一色彩を呈せしむべき潮流を導き出した。當時政府に壓迫されて居た自由黨類と改進黨の人々は、今迄嫉視し反目したことを忘れて、一致して政府攻撃を始め、歐化政策の缺點を非難し、條約改正に對する政府の軟弱な態度を罵り、言論、出版、結社の自由などを主張して、烈しく政府に挑戦した。

此の時、國家の危機を叫んで、大同團結を呼號したのは、政界の策士後藤象次郎であつた。彼れの大風呂敷は見事に多くの政客を魅して一時的成功を収めて、政府を脅かした。鳥尾小彌太の保守中正派も亦政府攻撃を續けたので、政府は大隈を引入れて、外相の椅子を與へ、後藤を誘惑して、遞相の地位に据ゑたけれども、民間黨は素より其の鋭鋒を柔げなかつた。而して其の鋒先は、最も鋭く、條約改正問題に對する反抗運動と共に、大隈外相の身邊に差向けられた。其の結果、福岡支洋社員來島恒喜が、大隈の車中に爆彈を投じた一個の悲壯劇となつて、一段落を告げたのである。何れにしても、歐化的大勢に對する反動は、保守的勢力の勃興となつて、政界も概して、保守主義者乃至國粹主義者の横行調歩するところとなつた。此の間に於て、特に記念すべきことは、黒田内閣の下に、憲法發布の大典が舉行されたことである。

政界に於ける國粹的、保守的大勢は、右に述べた通りであるが、此の現象は、教育、宗教、美術、文學の方面にも鮮明に示された。教育界に於ては、明治二十三年十月、教育勅語の漢譯を見たが、それに對して、教育家も學者も、宗教家も、我田引

水的な解釋を下して、少しも進歩的な解釋を下すものがなかつた。此の際、井上哲次郎は『宗教と教育について』と題して、キリスト教の趣旨は教育勅語の内容に背いて居ると斷言して、キリスト教徒と論戰を開いたが、之は國家主義と歐化主義との葛藤的反射であつた。

其の他國粹發揮の現象は、井上圓了の東洋哲學研究の開始、幸田露伴の小説に於ける佛教思想の發揮、文部當局者の國家的教育の實施と國漢文及び日本の徳育の奨励などに現はれ、美術界に於ける雑誌『國華』の發行、日本畫復興を主眼とした東京美術學校の設立、寶物取調局の設置、帝室技藝員の制定なども亦同じ潮流として見ることが出來た。

略ぼ以上の概論によつて、歐化主義と國粹主義とが、戦ひ合つた状態が、わかるであらうと思ふ。ところが、これに注意しなければならぬことは、當時の小説界では、矢張、歐化的風潮が、社會に於けるよりも、相當強いつつた同時に國粹主義の提唱によつても、中々衰へなかつたことである。田山花袋も其の點に言及して「歐化主義の反動として起つた政教社の國粹保存主義は、延いて落合直文等の國文學復興となつたが、文壇に對する感化影響は勿論民友社とは較べものにならない。その民友社の背後には、京都同志社のキリスト教思想なども大分働いてゐた」^七と居る。所詮、文藝の大勢は、社會的傾向と趣を異にして、歐米文學及びキリスト教思想が、比較的長く勢力を保持して居たと見ねばならぬ。

(三) 歐米文學とキリスト教思潮の勢力

文壇に於て、ひとり、歐化的傾向が、長く續いて、容易に衰退しなかつた理由の一つは、新しい生氣あり、内容ある文學の模型を歐米文學のうちに求むるよりほかに、行くべき道がなかつたからである。勿論、西鶴、近松、芭蕉を

始め京傳、三馬、一九なども、明治文壇の一部に影響したにはちがひないが、大體の本筋は、歐米文學のあとを辿らねばならなかつた。小説でも、評論でも、今迄、日本文壇になかつた新しい考へ方、新しい見方、新しい表現法が、歐米文學のうちにある以上、文壇の先覺者は、どうしても、其の方に共鳴して、そこからいろいろの暗示を得來ることにならざるを得なかつた。それで坪内逍遙、森鷗外、長谷川二葉亭、内田不知庵、森田思軒及び民友社の人々は、歐米文學の紹介に力めることを以つて、文學的進歩を計るべき第一の要件と信じたのである。

逍遙は、夙にシエクスピアの戯曲を翻譯したが、鷗外は、明治二十四年頃に、ドオデエ、ツルゲエネフ、トルストイ、ホフマン、レルモンソフ、シュピンの作物を翻譯した。二葉亭は、ツルゲエネフの『獵人日記』の一節を『あひゞき』と題して譯述した。思軒は、ユウゴオ、エツヂウオオ、ボオ、ホオソン、ジユウル・ベルヌ、ツエツケなどの作品を譯した。不知庵は、二十六年にドストエフスキイの『罪と罰』を譯した。それから、民友社が企てた『十二文豪』に於ける『マコオレエ』(竹越三又)、『トルストイ』(徳富蘆花)、『エマアソン』(北村透谷)、『ワアズワアス』(宮崎湖處子)なども出た。その他、黒岩涙香の譯したボベスコヤ、カボリウの探偵小説、博文館から發行した『世界文庫』なども、歐米文學の一半をわが文壇に傳へた。若い人々は、何れも、それに共鳴した。

それから、キリスト教思潮が、文壇の一部に強い感化を與へたわけは、當時の儒佛兩教が、其の傳道の上に於て、全く保守的で、情勢的で、新代の青年を動かすべき力が、極めて稀薄になつて居たにもよるが、今一つは、キリスト教の經典であるところの『聖書』が、新しい文學味、新しい詩的色彩を帯びて居て、青年の心眼にフレッシュな感じを與へたにもよるのであらうと思はれる。藤村の自傳小説『春』や『櫻の實の熟する時』を見ると、さうした心持が、能く出て居る。

(四) 新島襄のキリスト教宣傳

明治に於けるキリスト教思潮の宣傳者として、第一に記憶すべきは、京都に同志社を創立した新島襄である。彼れは、徳富蘇峯が嘆稱したやうに、一面、國民的自覺を有する下に、徳育の基本として、キリスト教を日本に弘布しようとした人物である。蘇峯は、彼れの人物について「彼は宗教の神聖なることを教へ、深く之を信仰せんことを諭したりと雖も、然も之が爲めに國家を忘れ國體の精華を傷くるが如き人物を養成せざらんことに努力せり。是を以て彼は宗教家としては、常に祈禱讚美を爲す宗教家たるのみならず、併せて上帝の眼中に於て、正義、人道とせらるる所を堅持する宗教家たらしめんと欲し、之を政治家としては、獨り精巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し、國を愛するの政治家たらしめんと欲し、之を文學者としては、獨り能文雄筆なる文學者たるに止まらず、併せて正義を愛し、眞理を敬する誠實眞摯なる文學者たらしめんと欲し、之を事業家としては、獨り經營勞作の事業家たるのみならず、併せて公共の福祉を増進する事業家たらしめんと欲し、之を人民としては、獨り其衣食住に汲々たるのみならず、併せて其思想、精神品行に於て、最も文明化せられたる高尚醇美の生活を得せしめんと欲したり」と云つたのは、穩健な見方である。

新島襄は、上州安中の藩士で、元治元年六月、二十一歳の時、國禁を破つて、アメリカに渡航し、約十年間、彼の地に留まつて居た。彼れはウイリヤムス大學、アムハルスト大學などで、神學を研究して、明治七年、日本へ歸り、京都に同志社を創立した。彼れの門から出た人材には、徳富蘇峯、浮田和民、海老名正、小崎弘道等がある。明治二十三年卒去。

新島が日本へ歸つた時分は、福澤、中村らが、英米の功利思想を鼓吹して、時人も亦それに共鳴して、内的教養を

閑却して居た。新島は、その點に對して、頗る慊らなかつたのである。其の缺點を補充して、正義を愛する人、眞理を敬する人を作るために、神の福音を宣傳しようとした。彼れが同志社を立てた目的は、そこにあつた。

彼れの高潔な人格と熱誠をこめた努力とは、彼れの事業を次第に擴張せしめた。彼れの感化を受けた人物は、彼れの主義、精神を尊重して、宗教界、教育界に活動した。それが動機となり、下地となつて、キリスト教が、日本に於て、旺んに傳へられるべき時代が來たのである。此の意味に於て、彼れは、明治時代に於けるキリスト教界の先覺者であつた。彼れが歸朝する以前に、クラアクやデエンスなどの人々が居て、キリスト教宣布の上に於て、相當の効果を殘したが、新島襄が出て、始めて、キリスト教的教育が、擴張され、廣布さるゝ芽を吹き出したのである。

彼れは、比較的短命で、明治二十三年、四十七歳で歿したけれども、彼れの感化は、長く後まで残つて居た。そして其の遺風を繼承した海老名、小崎、浮田、徳富らを始め、新渡戸稻造、内村鑑三、本多庸一、押川方義、井深梶之助、宮川經輝らが、キリスト教の宣傳や、キリスト主義の教育に力を入れたのみならず、新島の同志社が出來ると間もなく、それに刺戟されて、青山學院、明治學院、東北學院、關西學院、鎮西學院を始め、明治女學校、英和女學校などが、キリスト教の精神を基調とした教育を弘めた。それは、主として明治十二年頃から二十一、二年頃までに出來たのである。

それ等の影響は、やがて文學上にも波及して、其の反映の一つとして現はれた民友社は、即ちキリスト教的思想を背景とした文學的結社とも云ふべき風を帯びて居た。民友社一派よりも、大分遅れて現はれた『文學界』の一派のうちにも、キリスト教的思想を有したものがあつた。二十一年に出た『女學雜誌』は、殆どキリスト教の色彩を以て滿されて居た。かうした有様で、文學をやらうとする若い人々は、一度、キリスト教の門を潜つて、其の洗禮を受けた

と云つたやうなのが多くなつて來た。少くとも、日清戦争前後の時分までは、さうした風があつた。私は、以上の點から、キリスト教的思想が、文學の上に可なりに影響を與へたことを認めたい。第二期時代の文學を理解するには如上の社會的思想の傾向を背景として觀照しなければならぬのである。

第二章 新文學の黎明

(一) 坪内逍遙の『小説神髓』

坪内逍遙が『小説神髓』及び『當世書生氣質』を出したのは、明治十八年の春から初夏にかけてであつた。即ち四月に『小説神髓』を出すと直ぐ其の翌月、逍遙の持論、主張を裏書するために、新しい小説の模型として『書生氣質』を出したのである。

逍遙は明治十六年、東京大學文學部を卒業したのであるが、平生、好んで英米の小説や、脚本を見て、在來日本に行はれて居る小説と對照して、眞面目に考へた結果、そこに新しい世界を發見した。即ち勸懲主義、皮相的寫實の傾向を一掃して、外的よりも、内的に人情の機微、心理の活動を描寫するのが、小説の本務だと信じた。此の所信を披瀝したのが『小説神髓』である。

『小説神髓』は、畢竟「小説とは何ぞや」と云ふ問題に對する新解釋である。小説の意義、描寫の原理、方法を平明に教へた文學論である。其の内容は、二卷十章から成立つて、上卷には、小説の本質及び起源、變遷を述べ、小説の主要目的が人情の描寫にあつて、勸善懲惡にない旨を明示し、小説の種類及び効能を列擧してある。下卷には、先づ小説の方則を説いて、日本在來の小説を批判し、作家の規準とすべきところを教へて、文體、脚色、性格から描寫の事に及んで、親切を極めて居る。

當時、文學に志した人々は、逍遙の『小説神髓』を読んで、始めて小説の意義、目的の那邊にあるかを意識したこ

とと思はれる。勿論、多少、あるものは『小説神髓』に先立つて出た中江兆民の『維氏美學』や、外山、矢田部の『新體詩抄』や、菊池大麓の修辭學の譯書などで、幾分か體氣ながら、文學の定義乃至小説の概念を知得したのであらうけれども、それが具體的にも、理論的にも、明確になつて居なかつた。それを明確にすべき必要が迫つて居たところへ『小説神髓』が出來たのである。

『小説神髓』のうちに於ける主要點として、何人も能く引用するのは「小説の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此人情の奥を穿ち、心の内幕をば漏す所なく描き出して、周密精到なるを小説家の務とす。和漢に名ある稗官者流がひたすら脚色の骨髄に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとす。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強て人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其人物は、既に人間世界の者にはあらで、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりとも、之を小説と言ふべからず」と云ふ一節である。

逍遙は、以上の意を更に明かにするために勸懲主義の本元である所の馬琴の小説に言及して「彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の人士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり（中略）されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正人の情感をば作り設くる事をなさず、唯だ傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり」と斷定した。當時にあつては、卓見とすべき言であつた。

されば、田山花袋は『小説神髓』について、「寫實を教へ、心理描寫を説き、主觀を没したる客觀的態度を奨め、從來の小説の悉く邪道なることを道破した點は、たしかに逍遙の偉勳である」と賞讃した。高山樗牛も亦「逍遙一度出

で、其の小説神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論し寫實小説の嚆矢を開きてより一世靡然として之に赴き、小説文壇の旗幟爲めに一變せり。是れ素より時勢のおのづから然らしめし所なりと雖も、そもく又世を擧げて舊習の夢中に昏睡し、一人の能く舊園套を顛脱するもの無き時に當り、滔々たる時に逆ひて、一世の木鐸となりたるは、逍遙其の識見亦た非凡倫を絶えたるものあるに因らずむばあらず」と云ひ、『明治文學史』の著者（岩城準太郎）も「小説神髓は、晉に小説のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有数の著書なりき」と推讃した。

唯梶牛は、それと同時に『小説神髓』にも微瑕あるを述べて「其寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及びノベの並立を認めざる、心理的描寫を過重したる、又心理的描寫の通用せられ得べき小説の如何なる種類なるかを究めざる、理想小説の眞價を認むることを欲せざる、今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も、是れは舊來の小説に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ」と云つて居る。思ふに、逍遙も、それ等の點について、相當の見解を有したのであらうけれども、何よりも先づ大體の上から、革新的鐵槌を揮ふことの切要を痛感して、梶牛が擧げた點にまで、論及するに迫がなかつたのであらう。要するに『小説神髓』は、明治文學の新聲を眞先に齎らした曉鐘であつた。

(二) 新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義

逍遙は、晉に小説に對する新見を披瀝したに留まらないで、其の主張を具體化したところの處女作『當世書生氣質』を續いて發表した。當時の社會は、小説家を戯作者として輕侮して、新しい教育を受けた學士が、小説の筆を執るであらうとは夢にも思はなかつた。ところが、逍遙は、さうした社會的慣習を打破つて、自ら進んで小説家となつて、『書生氣質』を書いたと云ふことは、當時の社會にショックを與へたであらうと思はれる。今日の人々は、赤門を

出た文學士が、小説を書いても、珍しいとも、意外だとも、思はないけれども、明治十八九年頃は、文學士の肩書を有したこと其の事が既に大家であるやうに解されて居た時代であるから、さうした大家の地位にある新人が、小説に筆を染めたと云ふ新しい現象に先づ興味と好奇心とを挑發されたにちがいない。

殊に『書生氣質』は、當時にあつて、最も新しい書き方をしたものの一つで、たとひ、今日から見ても、多少、不滿なところがあるにせよ、フレツシユな感じを當時の讀者に與へた。蓋し書生と云ふことは、今日の新人を意味した言葉で、其の生活も亦舊來の生活とちがつたところがあつた事も亦當時の社會の注意を惹いたにちがひない。殊に學生らは、自分に親みある生活が描かれて居ると云ふことに對して、強く共鳴したであらうと思ふ。例せば、左の一節の如きは、當時の書生々活の一面が能く出て居る。

(續) そいつは我輩の願ふ所だ。親父の供給が絶えてからは我輩も實に窮したから何か金儲をしなくては、下宿の掃もできやしない。早速周旋してくれたまへ。それじやア今朝ツからやつて居るのは、即ち其「Trans'ation」(翻譯)か(山)さうよ、見たまへ難と如斯體裁さ(續)どれくと言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る(續)ヤア随分亂暴な翻譯だ。エトなんだ……是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ蓋シ遠隔ナルサキソノ時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ決シテ疑フ可キ事ハ非ラサルナリト餘輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ……ハ、ハ、イヤニ冗長な曲りくねつた變に讀悪い文章だ。羊の腸よろしくア如斯體裁をいふんだらう就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極るじやアないか。ナゼこんな文を延すんだらう反語ばかりいやに重なつて讀悪くツて。解りにくくツて是れじやア素人にやア解りやアしないぜ(山)ハ、ハ、ハ、ぶつかけかきだものを、文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかつたり、同じ事を繰返して居りやア、骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出来るだらう。何々せざればあるべからざるなりと賦、それ然り豈それ然らんやなりとやつて居ると、十行二百字は二十分位に一枚かけツち

まふ。是之を Economy of Labour 「ほねをりの儉約」といふ(譯)ヤレ／＼斯いふ翻譯者の手に成た。翻譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかさう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山) ヲット承知だ。それじやアベイジ、ト エンチー(二十葉)から、かうツト。ページ、サルチー(三十葉)まで、君にやろう汗手堂へ明後日ゆくからなるべくせいでして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから(下略)

かう云ふ風に書生々活を描寫した『當世書生氣質』は、十八年五月に第一巻を出して、翌年一月に完結した。全部十七巻で、春のやおぼろ戯著としてあつた。私は明治二十五年頃、田舎に居た時、縁日の夜店で、それを見たが、妙な名があるものだと思つた。けれども「春のやおぼろ」と云ふ優しい名が、未だ十四歳位の私の頭に何となく、なつかしい印象を與へたことを未だに忘れ得ない。

『書生氣質』の内容は、某英學塾に居る數名の書生の氣質を寫すことを主眼として、彼等が、各自境遇と運命との糸に操られて、いろ／＼に轉變し行く徑路を描くと同時に、彼等の有する新思想と在來、社會に行はれて來た舊思想との衝突を標示して、それを彩るに、守山父子の奇遇や、小町田榮爾と云ふ青年と田之次と云ふ藝妓とのロマンスを挿込んだものである。

逍遙が新しい描寫法によつて、其の表現しようとした人物、事件は、ある程度まで、浮び出て居る。其の序言にある意味のやうに、全篇の趣向は専ら傍觀の心得で寫眞を旨とし勸懲主義を排して、之を訓誨の料とすると之を獎誡の資とするとは、讀者の心に一任したと云ふ心持をも看取することが出来る。

が、此の書が出たとき、いろ／＼の批評があつたやうに、後の明治文學の評論を書いた人々のうちにも、亦是非の評がある。私は、此の書に對しては、歴史的に評價するのを至當とする。何となれば、逍遙は、未だ何人も、新しい小

説の模型を示さない時代に、先づ自ら率先して、模型を創造したところに人知れぬ苦心と努力とが伴つて居たからである。それに全部十七巻から成つて居て、約九ヶ月間逐次出したのであるから、讀者を次ぎから次ぎへ引付けてゆく呼吸、按配をも要したであらう。だから、逍遙も、幾分か妥協して、地の文に馬琴流の七五調などを用ひ、思ひ切つた新しい試みが出来なかつた點もあらう。さうした點を考へて、評價するのが正しいと考へる。

それで歴史的評價の上からすれば、在來の勸懲的、戲作的、皮相的、方便的の弊から離れて、會話の上に新味が加はり、人情の表裏、心理の働きなども、いくらか寫し出されて、教養ある人が讀むに適した眞面目な作品であると云はねばならぬ。高山樗牛が「明治小説の新紀元を開きたる過渡時代の産物として、重大なる歴史的意義を有す」と云つたのも、このためである。だが歴史的評價を離れて、嚴正に批判することになると勿論、多少の不滿があらう。それは、止むを得ないことで、田山花袋が「勸懲主義の戲作を排して立つた作でありながら、まだ其の根本から戲作の臭味を脱し切らないものであつた」と云つたのも、一應の道理はある。けれども、それを以てしても、『書生氣質』が齎した明治小説史上に於ける重大な歴史的意義は消滅しない。

(三) ロシヤ文學と「浮雲」を書いた二葉亭

逍遙が『小説神髓』と『書生氣質』によつて、文學上の新しいムウブメントを起したのに刺戟されて、處女作『浮雲』を書いて、略ぼ『小説神髓』の説いた目的を、さながらに實現したのは、長谷川二葉亭である。

二葉亭が、明治、大正文學史上に於ける地位は、可なりに重い。だが、懷疑家たる彼れは、どうも、眞剣になつて文學者として終始しようとはしなかつた。ひよつくり作物や、翻譯を出したかと思ふと、直ぐにいつとなく、賴晦し

て、もう大方、文壇を去つたらうと思ふ時分に又ひよつくり現はれて、何か書くと云つた風であつた。斷續的な働きをしながら、彼れの創作も、翻譯も、可なりに立派なものを残した。

二葉亭の生涯は『長谷川二葉亭』に詳しい。彼れの生涯については『予が半生の懺悔』を見ると、一番、早わかりがする。彼れは「私が文學が好きになつたかといふ問題だが、それにはロシア語を學んだいはれから話さねばならぬ。それはかうだ——何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『内外交際雜誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。従つて世間の輿論は沸騰すると云ふ時代があつた。すると、私がすつと小供の時分からもつてゐた思想の傾向——維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、即ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて其の結果、將來日本の深憂大患となるのはロシアに極つてゐる。こいつ今の間はどうか禦いで置かなきゃいかんわい——それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして、外國語學校の露語科に入學することとなつた」と先づロシア語學習の理由を述べ、次ぎに「で、文學物を見るやうになつたのは、語學校に入つて、右のやうな一種の帝國主義に浮かされて、語學を研究してゐる内に自らその必要が起つて來たので、といふのは、當時の語學校はロシアの中學校同様の課目で、物理、化學、數學などの普通學を露語で教へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の教授が露國の代表的作家の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはば、子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさゝれて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の齎した慷慨熱——この二つの傾向が、當初のうちにはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た」と

告白して居る。

彼れが志士の精神と熱情とを抱いて、文學に關係した徑路は、以上でわかるが、彼れは職業を文學に求めようとしなかつた。彼れが云つて居る通り、官報局の翻譯係、陸軍大學の語學教師、海軍省の編輯書記、外國語學校の露語教師などといふ順序で進んで、一時は警務學堂に居たこともあつた。大體、文學とは縁の遠い方ではなかつたけれども、彼れのやうな職業的行徑を辿つたものは、文壇に少い。それに物理學、心理學と云つたやうな學問を研究したなども一風變つて居た。晩年、『東朝』記者として、ロシアに赴いたのは、彼れが生來持つて居た二つの傾向——文學的、志士的と云つたやうなものが、併行的に現はれたのだと見て宜い。

(四) 『浮雲』を書くに於ける苦心

かうして毛色の變つて居た二葉亭が『浮雲』を出したのは、彼れの告白したやうに、生活費の一部を得たいからであつたが、然し彼れが藝術的に可なりに苦心したことは、左の一節を見ると明かである。

「浮雲」には、モデルがあつたかと云ふのか？—それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見付けてこいつは面白いといふやうなでは勿論ない。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くにはどういふ風の形を取つたらよからうか。といろ／＼工夫する場合に、誰か余所で會つた人とか、自分の豫て知つてゐる者とかの中で、稍々自分の有つてゐる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があつたものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。勿論その人の個性はあるが、それを捨てて了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。

即ち二葉亭は、寫實の意義を具體化するためにモデルについて、相當に苦心したのである。そして其の思想及び形式については、逍遙が主として、イギリス文學の影響を受けて、そこから學び得たところがあるに對して、二葉亭は、主としてロシア文學の影響を受けて、そこから暗示を得た。また逍遙が、文章上、馬琴、一九、三馬などの小説から稍影響を受けて居るやうに、二葉亭も、風來、三馬、全交、箕村あたりから、少し影響を受けた。だが、大體は、二葉亭が告白したやうに思想上では、ベエリンスキイの評論などを讀んで居たところから、日本文明の裏面を描き出さうと企てたと同時に、『浮雲』の中巻から以下の文章、形式、表現は、主としてドストエフスキイ、ガンチャロフなどの書き方を學んだのである。

二葉亭が、今一つ苦心したのは『浮雲』を言文一致で書くについて、どう云ふ言葉を用ふるか云ふ點であつた。當時は言文一致の創始時代であるから、勿論、彼れが参考とするやうなものはない。彼れは、其の點に於て、逍遙、蘇峯らの説を聞いては見たが、結局、彼れ自身、一家の見識を立て、「どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花が咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を強ひてこね合せやうとするのは無駄である」と決心して、成語、熟語などは、凡て取らないで、最初は、三馬の小説のうちにある深川言葉「べらぼうめ、南瓜畑に落つこつた風ちやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」と云つたやうな言葉を参考にして、幾分の便りとしたのである。この點は、二葉亭の卓見にちがひなかつた。かうして、いろ／＼の苦心を経て『浮雲』が生れたのである。

『浮雲』は最初、無名文士だつた二葉亭の名で出すことが出来ないもので、第一編は彼れが指導を受けた先輩逍遙の名を借りて出版した。第一編は、明治二十年六月に、第二編は、二十一年二月、第三編は二葉亭の名で二十二年秋『都

の花』に出た。此の傑作——逍遙の『小説神髓』を略ぼ具體化した作品は、花袋が云ふ通り「當時『浮雲』の精細な心理描寫に耳を聳てたのはほんの少數の有識者に止まつて、あの作はたゞ單に妙なもの、不思議なものとして世に迎へられ、決して當時の反響を呼起したものでない」のであつた。蓋しそれは『浮雲』の内容が、十五年ばかり餘計に進歩し過ぎて居た結果で、止むを得ない運命だつた。若し『浮雲』が當時の文壇に於て『書生氣質』のやうに歡迎されたとしたら、恐らく、二葉亭の生涯も、どうなつたかわからぬであらう。或は純然たる作家となる決心をしたかも知れない。

『浮雲』の内容は、静岡の方から東京へ出て、叔父の家に寄寓した某省の判任官である内海文三と叔父の娘お勢とを中心にして、それに叔父の妻お政や、内海の友人本田などを擲ませて、戀のロマンスや、新舊思想の衝突などを描いたもので、筋は極めて單純で、在來の小説とは、全くちがつて居た。が、二葉亭が覗つたところの日本文明の裏面を現はすことや、乃至人物の性情、心理を描寫する上に於て、見事に成功し、ある意味では、自然主義文學に先驅したのである。

○『浮雲』が出た時分の日本、殊に東京などでは、文明開化と云ふ言葉にかぶれて、其の皮相に溺れた若い男女が往々あつた。それに對して、一概に保守的な考へを以て臨む中老時代の男女も亦往々あつた。一は新時代を代表し、一は舊時代を代表するもので、それが纏れ合ふと、葛藤を惹き起した。二葉亭は、此の點を現はさうとして、お勢に新時代を代表させ、其の母のお政に舊時代を代表させて、家庭に於ける小さな衝突を見せた。そこに日本文明の裏面の縮圖と云つたやうなものがあつたのだ。

(五) 『浮雲』の新着想と新描寫

當時の作家は、二葉亭が覗つたやうなところには、勿論、眼を附けようとはしなかつた。畢竟、二葉亭が、かうした着眼點を得たのは、近代ロシア文壇に評論家として重きを爲したベエリンスキイの評論によつて、深く啓發せられたからであつた。そして其の着眼點が特異であつたのみならず、在來の筋の複雑、錯綜を尙んだのに對して筋の單純、人物の多數を出し入れしたに對して少數の人物、偶然や突發の出來事を構成したに對してあく迄自然に事を搬んだのは、ドストエフスキイや、ガンチャロフの作品から暗示を得た結果だつた。まだ自然主義文學の何であるかを知らないで、江戸文學の殘影を夢みつゝある當時の人々には、到底、夢想だもし得ない境地だつた。

既に彼れの行き方が、全然、在來とちがつて居た上に、其の性格と心理との表現の上に於ても、自然の描寫に於ても亦全然ちがつた手觸りを持つて居た。彼れは、『浮雲』の中心人物お勢の性格を描くことゝ内海文三の戀の心理を描くことの上には、全力を傾倒した。お勢の輕躁な、快活な文明かぶれのした性格は、徹底的に描かれて、些の缺陷もなかつた。お勢は、何かと云ふと、漢語や、英語を用ゐたがたり、眞理とか、男女交際とか云ふことを口にした。母の無教育で、保守的なことを輕蔑して、下等動物の名を與へて居たほどの生意氣な女學生風のところがあつた。それと同時に、文三の溫和な優柔な偏人らしい性格に共鳴するかと思へば、また文三の友人本田の輕佻な才子風に共鳴して、少しも、操守がなかつた。左様した點を、二葉亭が、はつきり描寫した。左の一節は、文三とお勢とが對話して居るところであるが、お勢の文明かぶれした輕躁なところが、能く出て居る。

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから、始終可笑しな事を言つちやアからかいますのサ、其れでもね、其たんびに私が

辱しめ／＼したら、あれで些とは恥ぢたと見えてね、此頃ちやア其様に言はなくなりましたよ。」

「へー、からかふ。どんな事を仰しやツて。」

「アノ——なんですツて、其様なに親しくする位なら、寧ろ貴君と……(すこしもぢもぢして言ひかねて)結婚して仕舞へッ
p……。」

ト聞くと等しく文三は、駭然としてお勢の顔を見守める。されど此方は平氣の體で、

「ですがネ、教育のない者はかりを責める譯にもゆきませんよね！、私の朋友なんぞは、教育の有ると言ふ程有りやしません
がね、それでもマア普通の教育は享けてゐるんですよ。それでゐて貴君、西洋主義の解るものは廿五人の内に僅四人しかない
の。その四人もネ、熟にゐるうちだけで、外へ出てからはね、口程にもなく、兩親に壓制せられて、みんなお嫁に往つたり、
お婿を取つたりして仕舞ひましたの。だから今まで此様な事を言つてるものは私ばかりだとおもふと、何だか心細くツて
／＼なりません。でしたがネ、此頃は貴君といふ親友が出來たから、アノ——大變氣丈夫になりましたワ。」

文三はチョイと一禮して、

「お世辭にも嬉しい。」

「アラお世辭ちやア有りませんよ、眞實ですよ。」

「眞實なら尙ほ嬉しいが、しかし私にやア貴女と親友の交際は到底出來ない。」

「ヲヤ何故ですエ、何故親友の交際が出來ませんエ。」

「何故といへば、私には貴嬢が解らず、また貴嬢には私が解らないから、どうも親友の交際は……。」

「さうですか、それでも私には貴君はよく解つてゐる積りですよ。貴君は學識が有つて、品行が方正で、親に孝行で……。」

「だから貴嬢には、私が解らないといふのです。貴嬢は私を、親に孝行だと仰しやるけれども、孝行ちやア有りません。私に
は……親より……大切な者がありません……。」

ト、吃りながら言つて、文三は差俯向いて仕舞ふ。お勢は不思議さうに文三の容子を眺めながら、
 「親より大切な者——親より……大切な……者。親より大切な者は、私にも有りますワ。」
 文三はうな垂れた顔を振揚げて、

「エ、貴嬢にも有りますと。」

「ハア、有りますワ。」

「誰……誰れが。」

「人ぢやアないの。アノ眞理」

「眞理。」

ト文三は懐然と胸震ひをして、唇を喰ひしめた儘、暫らく無言。

お勢を戀して居た文三は、母よりも、お勢を大切なもの、戀を大切なものと思つて居たに對してお勢は、未だ左程にも思はず、眞理が大切だと云つたので、文三は意外に感じたのである。文三のお勢に對する戀は、極めて眞實なものであつた。が、お勢は、少し曖昧で、輕はずみで、眞實味に乏しかつた。殊にお勢の母は、文三が判任官を勤めて幾分の貯蓄が出来て、静岡から母を迎へようとした時代は、お勢を文三の妻としようと思つたけれども、文三が課長の機嫌を損じて、免職されると、直ぐに文三を輕蔑して、却て文三の友人本田にお勢を嫁せしめようと思ふやうになつた。そしてあらゆる虐待を文三の上に加へる。お勢も亦文三に對して冷かになる。けれども文三は、お勢に執着してちつと隱忍した、其の間に於ける文三の優柔さと複雑した心理とを二葉亭が巧みに描いて居る。

あれほどまでに、お勢母子の者に辱められても、文三はまだ園田の家を去る氣になれない。但だ、そのかはり、火の消えたやうに、鎮まつて仕舞ひ、いとゞ無口が、一層口を開かなくなつて、呼んでも歩々數く返答をもしない。用事が無ければ、下

へも降りて來ず。只一間にのみ垂れ籠めてゐる。餘り靜かなので、つい居ることを忘れて、お鍋が洋燈の油を注がずに置いても、それを咄けて注がせるでもなく、油が無ければ無いで、眞摺な座敷に悄然として、始終何事かを考へてゐる。けれど、かう靜まつてゐるのは表相のみで、其胸奥の中へ立入つてみれば、實に一方ならぬ變動。恰も心が顛倒した如くに、昨日好いと思つた事も今日は悪く、今日悪いと思ふ事も、昨日は好いとのみ思つてゐた、情慾の曇が取れて、心の鏡が明かになり、睡入つてゐた智慧は、俄に眼を覺まして、決然として斷案を下し出す。眼に見えぬ處、幽妙の處で、文三は——全くとは云はず——稍生れ變つた。

眼を改めてみれば、今まで爲て來た事は、夢か將た現か……と怪しまれる。

と云つたやうな文三の心理、戀に亂れた心理、お勢を本田に奪はれさうなのを憂慮して、絶望的に傾かうとする心持、それ等が到るところに描かれてある。殊に左の一節は餘程、精緻に表現されて居る。

ふと又例の妄想が働きたして、無益な事を思はせられる。時としては妙な氣になつて、總て此頃の事は皆一時の戯れで、お勢は心から文三に背いたのではなくて、唯背いた風をして、文三を試みてゐるので、其證據には、今にお勢が上つて來て、例の華かな高笑で、今までの葛藤を笑ひ消して仕舞はう、と思はれる事が有る。が、固より永くは續かん、無慈悲な記憶が働き出して、此頃あくたれた時のお勢の顔を憶ひ出させ、瞬息の間に、其快い夢を破つて仕舞ふ。またかういふ事も有る。ふと氣が滲つて、今から零落してゐながら、其様な藥袋も無い事に拘つて、徒らに日を送るを、極めて愚のやうに思はれ、もうお勢の事を思ふまいと、少時思ひの道を絶つて、まじ／＼としてみるが、それではどうも、大切な用事を仕掛けて罷めたやうで、心が落居ず、狼狽へて、またお勢の事に立戻つて悶え苦しむ。人の心といふものは、同一の事を間斷なく思つてゐると、遂に考へ草臥れて、思辨力の弱るもので、文三もその通り、始終お勢の事を心配してゐるうちに、何時からともなく注意が散つて一事には集らぬやうになり、をり／＼互に何の關係をも持たぬ零々碎々の事を、取締もなく思ふことも有つた。曾て兩手を頭

に敷き、仰向けに臥しながら、天井を凝視して、初は例の如くお勢の事を彼此と思つてゐたが、その中にふと天井の木目が眼に入つて、突然妙な事を思つた。「かう見たところは、水の流れた痕のやうだな。」かう思ふと同時に、お勢の事は全く忘れて仕舞つた。そして尙ほ熟々とその木目を視入つて「心の取り方に依つては、高低が有るやうに見えるな。ふん、オプチカル、イリユウジョンか。」ふと文三等に物理を教へた、外國教師の立派な髯の生えた顔を憶ひ出すと、それと同時に、また、木目の事は忘れて仕舞つた。續いて眼前に、七八人の學生が現はれて來たと視れば、皆同學の生徒等で、或は鉛筆を耳に挿んでゐる者も有れば、或は書物を抱へてゐる者も有る。又は開いて視てゐる者も有る。能く視れば、どうか文三も其中に雜つてゐるやうに思はれる、今越歴の講義が終つて、試験に掛る所で、皆エレクトロカル、マシンの周邊に集つて、何事とも解らんが何か頼りに云ひ争ひながら騒いでゐる。かと思ふと、忽ちそのマシンの生徒も如く痕跡もなく消え失せて、ふとまた木目が目に入つた。「ふん、オプチカル、イリユウジョンか。」と云つて、何故ともなく驚愕した。イリウジョンと云へば、今まで讀んだ書物の中で、サリーの『イリユウジョン』ほど面白く思つたものは無い。二日一晩に讀切つて仕舞つたツケ、あれほどの頭には如何したらなれるだらう。餘程組織が緻密に運ひない……。」サリーの脳髓とお勢とは何の關係も無さうだが、此の時突然お勢のことが、噴水の迸る如くに、胸を突いて騰る。と文三は臆物にでも觸られたやうに、あつと叫びながら跳ね起きた。

かうして、二葉亭の心理描寫は、ロシヤの小説即ちドストエフスキあたりの佛を髣髴させて居た。が、當時、此の味を理解したのは、少數の讀者、殊に文學上に相當の識見あるものに限られて居た有様で、二葉亭の苦心も、遙かに後（自然主義時代）でなければ、一般に認識されなかつた。

(六) 『浮雲』の缺點と特長

『浮雲』は、以上のやうに成功した作品であるが、勿論、多少の缺陷は免れなかつた。その第五回にお勢母子の争ひ

を寫して「此を親子喧嘩と思ふと、女丈夫の本意に背く。どうして親子喧嘩……其様な不道德な者でない。是れは、これ等なくも、難有くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と、時代遅れの舊主義と、衝突する處。よくお眼を止めて御覽あれませう」と云つたのは、無用の説明で、此の種の語氣が、所々に散在して居た。時には、洒落味を帯びて、註釋なども挿入し地の文に「こも古めかしいところなどがあつたが、それ等は、當時の文學界では、止むを得ない缺點であつたらう。左様した點を除けば、今日、見ても、相當な藝術的作品として、推奨し得るのである。」

それに文體、形式の上から見ると、破天荒と云つて宜い。だつた。彼等は、言文一致で、地の文と會話とを繋ぐと共に、會話と地の文とは行を改めて書き、はつきり双方を區別させて、會話の頭に話す者の名を附けることを全廢した。また其の言文一致は、山田美妙らのよりも、遙かに自然で、すつと進んで居たところがあつた。言文一致の試験時代にあつて、山田美妙が、第一にそれを唱説したに對して、事實の上にその視つたところを體現したのは、二葉亭だつた。即ち逍遙が唱へた内容の革新、美妙が唱へた文章の革新、此の二つを『浮雲』の上に略ぼ具體化したのである。

第三章 德富蘇峯を中心とした民友社

(一) 『國民之友』の文學的勢力

『小説神髓』『書生氣質』『浮雲』によつて、小説界に黎明の色が動いたとするならば、民友社の創立によつて、評論界——一種の文明批評——の黎明が來たと云つて宜い。民友社の中心人物は、德富蘇峯である。蘇峯ほど早く文名を成したものは、誠に少かつた。蘇峯は、熊本出身で、郷里の英學校と同志社とに學んで、キリスト教の感化を受けると同時に、英文學、漢文學の素養を積んだ。彼れが『將來の日本』と題する一書を携へて、上京した時は、白面の一書生に過ぎなかつたのであるが、田口卯吉、島田三郎らに認められて、忽ち文名を馳せて、評論壇の將となつた。それは『將來の日本』に於ける彼れの新思想、新文體が、歐化的傾向に投合して、青年の間センセーションを捲起したからであつた。彼れの『將來の日本』は主として、スペンサーの進歩論に立脚して武權主義が平和主義へ、寡頭政治が大衆政治へ赴くべきことを豫想したもので、（當時の）當時の人々の共鳴を得たのである。

蘇峯は、此の機に乗じて、其の新銳の氣（當時の）と濺刺とした新精神とを以て、民友社を組織して、明治二十年二月『國民之友』第一號を發行した。嘗て、（當時の）當時の青年が、それに對して、どんなに強い感銘を得たかは、抱月、花袋らの回想を見れば、明かであらう。

其時分の青年の愛讀書が Marculay の『英國史』や『ピット傳』であつたのでも、その當時の状態を彷彿することが出来る。又一方政治法律に心をそそぐ青年の多かつたことも事實である。丁度この時分だ、德富蘇峯氏が『將來の日本』といふ本

を掲げて田舎から出て來て、あゝ國民の友生れたりと言つて、平民主義を提唱したのは……國民の友……あの女神のペンを持つて立つてゐる黃が、つた表紙、殊に忘れられないのは、その最初の春季附録に出た山田美妙齋の裸體の繪を口繪にした小説であつた。（花袋『東京の三十年』）

其の冒頭に『嗟呼國民の友生れたり、何が故に生れたるか、現今日本の時勢其の必要を感じればなり』と云ふ文句があつて、維新の大變革『其の運動は火の如く、花の如く、雷の如く、電の如く』といふ風に今日では何でもない句を列べられても、當時の我々は、恍惚として面ほてりを覺える程の、幼稚にして鋭敏な感納を得たものである。（抱月『新文章論』）

蓋し蘇峯の文章は、全然、歐文脈を中心として、漢文學から得た豊富な文字を巧みに驅使して、マコオレエ張りのところを持つて居たのであるが、かうした文體は、當時、未だ誰も試みなかつたのである。此の點が、既に獨創的であつた上に、平民階級が漸く擡頭した機運と一致して、多數民衆の幸福と進歩とを計るべき平民主義を高調したことが、また深く青年の心を動かした。即ち内容の上にも、形式の上にも、民友社風と云ふ一つの新しいスタイルを作つた。

嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる幽靜なる黄泉に於て安眠し、或は禁殿に於て顧問官となり、元老院に於て評議官となり、或は世襲の爵を給ひて貴族に列し、皆天恩の隆渥なるに浴し、優游殘年を樂み、以て安息することを得たり。然らば則ち改革彼れ自身も亦た安息することを得べき乎、曰はく否、改革よ、改革よ、汝は決して安息なることを得ざるなり。

かう云ふ風に書いた『國民の友』の文章は、忽ち流行し始めた。蘇峯の隨喜者は、到るところに出來た。而して其の第二の著書『新日本の青年』が、前後して出ると、誰も彼れも争うて真先にそれを讀んだ。

(一) 評論家としての先驅者櫻痴と兆民

蘇峯が、雜誌主筆として、立身したについては、文章上、マコオレエに私淑したことは、誰も知つて居るところであるが、別に福地櫻痴の論文に傾倒したことを知るものは少いのである。櫻痴は其の後半生を脚本作者として送つたが、前半生殊に明治初年から、十九年頃までは、政治家としての第一人者を以て目されて居た。彼れが「私は」と云ふべきを「吾曹は」と云つて「吾曹子」と稱された時代は、政治上、彼れの反對に起つて居たもの迄が、櫻痴の莊重な氣品の高い、情理共に盡した文章を愛讀した。蘇峯も亦其の一人であつたことは、『蘇峯文選』に於て、「眞に予を啓發し、予をして半夜屢々衾を蹴りて起たしめたるものは、福地櫻痴の主筆たる『東京日日』たりし也。予は當の新聞を耽讀したるのみならず、學校の科程を休みて、私かに自から京都書籍館に赴き、明治七、八年以降の『東京日日』を繰り返し、其の重なる社説中、最も予をして興味を感じしめたるものを謄寫したり」と告白したのを見てわかる。櫻痴の論文中、最も見るべきは『幕府衰亡論』であるが、これには、彼れの長所がよく出て居る。

徳川幕府が諸侯伯を制御せしは、一に幕府の武威に由れり。而して其武威は寛文延寶以來已に衰弱に赴きて復當初の實力あるに似ず、漸く元祿享保寛政の政を以て、時々是を更張して其外面を裝飾したるに過ぎざりしのみ。而して諸侯伯が之を窺知るも、尙幕府に抵抗する事を敢てせざりしものは、一は法令格式に牽制せられたると、一には各自の武威も亦幕府と同じき度を以て衰弱したるが故なりしのみ。然るに癸丑甲寅亞國使節の渡來以後は盛に武備を修め士氣を養ひたるに由り、諸強藩に幕府の上に出るの實力を著へたるが故に之に抵抗するの状況を喚起せるを更に怪しとするに足らざりしなり。況や夫れ開國の國論の如き、原案鎖國を唱へ初たるも幕府なり、開國を議し初めたるも幕府なり。其二者の衝突は幕府内に於て初め自らの

を起し、遂に鎖國説を以て開國説を天保年間に壓伏して、其國是の模範を天下に示したるに係らず、癸丑甲寅に至りて俄然自からは反對して開國の方向を執り、尙これを粉粧するに鎖國の假面を以てし開にして閉にあらず、鎖にして鎖に非ざるの迷路に彷彿したり。之を奈何ぞ人心の乖離なきを得んや。

櫻痴の論文は、今日見ても、相當の價値を有して居るやうに思はれる。殊に當時にあつては新聞社會を風靡して、蘇峯が現はれる前までは、青年間にも持て囃された。櫻痴が文章上、蘇峯に刺戟と暗示とを與へたことは少々でなかつたやうだ。

櫻痴と共に今一人、蘇峯が新しい文章を創始する迄に活躍して居たのは、『民約譯解』の筆者中江兆民である。彼れは、西園寺公望、松田正久、光妙寺三郎、酒井雄三郎らと共に、フランスの自由民權説をも高調した先驅者で、彼れが晩年『一年有半』を出す迄に世に公にした著書には『維氏美學』『三醉人經綸問答』『泰西理學小史』『理學鈞玄』『佛蘭西革命前二世紀事』などがあつた。

彼れは『自由新聞』『東雲新聞』『日刊政論』『立憲自由新聞』『民權新聞』などの主筆をした時代に其の雄勁な論文を書いた。彼れは、フランス語に堪能であると同時に、漢文學や、佛學にも通じて居たので、一字一句、引縮つて居て、而も時々、奇警な語が見出された。

民權是れ至理也、自由平等是れ大義也、此等理義に反する者は竟に之れが罰を受けざる能はず。百の帝國主義有りとも雖も、此の理義を滅却することは終に得可からず。帝王尊しと雖も、此の理義を敬重して茲に以て其尊を保ち得可し。此理や漢土に在ても孟阿柳宗元早く之を觀破せり、歐米の專有に非ざる也。

兆民の文章は、かうした風であつた。兆民のほかに『日本開化の性質』を書いた田口鼎軒がある。鼎軒も亦垢抜け

のした論文を書いた。要するに、明治の新しい評論文は、福澤によつて始められて櫻痴、兆民、鼎軒らを経て、蘇峯に及んだのである。そして其の歐化的色彩に於ては、蘇峯の新時代に入つて、最も顯著となつた。

民友社の蘇峯に對して、別に國粹的思想から出發した一團の政治文學的結社を組織したのは、三宅雪嶺、志賀矧川らの政教社であつた。雪嶺は蘇峯と對立した論評界の一勢力で其の雄健奇聲な文を以て『眞善美日本人』、『偽醜惡日本人』などを發表した。此の一派は、思想的に、稍強い影響を社會の一部に與へ、日清戦後に起つた日本主義に先驅したけれども、文學的には、唯國文學、漢文學、佛敎の復興に資したところがあつた丈だつた。そして哲人的風格ある雪嶺が、新聞雜誌の上に於て、其の光彩を放つたのは、それより少し後の事であつた。

(三) 當時續出した雜誌

民友社は、一時、キリスト敎思想を背景とした平民主義の思想を以て、多くの青年に強い影響を與へたばかりでなく、文學的にも、新人を社會に紹介したり、海外文學思潮の流入を計つたりして可なり有力な印象を文壇に刻み込んだ。

當時、蘇峯の下に集つた人々は、山路愛山、竹越三又、徳富蘆花、宮崎湖處子、塚越停春、人見一太郎、矢崎嵯峨の屋、角田浩々歌客、松原二十三階堂らで、國木田獨歩は、遙かに遅れて、二十七年頃に、『國民新聞』へ入社したのである。また民友社の客員には、森鷗外、山田美妙、二葉亭四迷、内田不知庵、森田思軒、依田學海、石橋忍月、中西梅花らの人々が居た。

それ等の學者、作家、詩人たちによつて『國民の友』の内容は、今日の『中央公論』、『改造』などのやうに、政治、

文學、宗教、社會の各方面に向つて、新しい評論を加へたのであるが、それと共に文學欄を設けたり、春夏二期に文學附録を添へたりしたので、文壇で名を爲さうとする人々の登龍門となつて居た。其の文學附録に出た作品には、明治初期の文壇を飾つたものが少くなかつた。鷗外の『舞姫』、逍遙の『細君』、露伴の『一口劍』、一葉の『わかれ道』、透谷の『宿魂鏡』、鏡花の『琵琶傳』を初め、文學的翻譯の試みだつた森田思軒の『探偵ユウベル』も、二葉亭四迷の『あひびき』も、二十一年頃の文學附録に出たのである。

かうして『國民の友』は、雜誌界に新興の氣運をも與へた。『國民の友』以前には、今日の『中央公論』の前身であるところの『反省雜誌』が、十九年一月に出たのであるが、其の影響は、未だ著大でなかつた。『國民の友』が出ると共に、其のハイカラな體裁や内容が、何人にも、フレッシュな感じを與へた。それと前後して『哲學雜誌』、『以良都女』、『出版月評』、『日本人』、『我樂多文庫』、『文』、『都の花』、『新著百種』、『女學雜誌』、『少年園』、『小説萃錦』、『大和錦』、『新小説』、『史海』などが續出した。二十二年十月には、鷗外の主宰した『柵草紙』、二十四年十月には、逍遙が主宰した『早稻田文學』などが出て、文學界は色めいて來た。

以上のうちで、文學的に最も密接な關係があつたのは『都の花』、『柵草紙』、『早稻田文學』、『新著百種』、『我樂多文庫』などであつた。『都の花』には、二葉亭の『浮雲』第三編を始め、矢崎嵯峨の屋の『初戀』、幸田露伴の『露園々』、山田美妙の『うちこ姫』、尾崎紅葉の『二人女房』などが載せられた。『新著百種』には紅葉の『色懺悔』、露伴の『風流佛』、柳浪の『殘菊』などが出た。

『柵草紙』と『早稻田文學』とは、當時に於ける文藝評論を主として載せた點に於て、文壇の思想を導くことに盡した上に於て、好いコンツラストとなつて居た。勿論、此の二雜誌が出るまでも、文學評論の筆を執つた人たちはあ

つた。私は、森田思軒や、石橋忍月や、高瀬文淵や、正直太夫(齋藤縁雨)や、八面樓主人(宮崎湖處子)などの人が、夙に評論を書いたことを知つて居る。けれども眞に文藝上に於ける嚴密な正しい意味の批評が、最初に書いたのは、どうしても、逍遙と鷗外の二人であつたと云ひたい。

(四) 文學評論の創始時代

在來の明治文學史には、小説を主として、それに併行すべき文藝評論のことを閑却して居るけれども、それは、大なる誤りである。

『柵草紙』と『早稻田文學』が出るまでは、矢張『國民の友』などに於ける文學評論が、一番、有力であつた。蘇峯は、嘗に政治に對して興味を有して居たのみならず、哲學、歴史、文學、美術の方面に於ても、相當の興味を有して居たので、どの方面にも、評論を試みた。文藝評論の専門化は逍遙、鷗外が、文壇に相角逐する迄は、未だ實現されて居なかつた。それで蘇峯の評論は、文學方面にも及んで、其の最初の時代にシリーズとして出した『國民叢書』には『進歩平退歩』、『人物管見』、『青年と教育』、『靜思餘錄』、『文學斷片』、『天然と人』などがあつて、到る處、蘇峯が文學に對する一家見を洩らしたところがある。さうした方面には、創見はないが、セント・ブアップや、マッシュウ・アアノルドなどの文學論などを讀んで得た文學上の新知識を普及した効果は、確かにあつた。湖處子の『歸省』のやうに、蘇峯の紹介や、批評によつて、文壇に認められた作品や、翻譯なども往々あつた。

政治記事の新しい書き方、新しい人物評、さうしたものは、蘇峯の趣味眼に映じて、始めて、文學化され、精彩を帯びて來た。それは、イギリスなどの新聞から暗示を得て、彼れが、何人よりも早く試みて成功したのであつた。人

物論も、勿論、昔からあつたにはちがひないが、其の新しい見方、精細な性格の解剖法などは矢張、蘇峯によつて、始めて模型を示されたのである。

蘇峯は、また一種の新書翰體を以て、其の意見を發表する様式を發明した。『國民新聞』の『東京だより』は、その結果の一つであるが、『熱海だより』に於て、頼山陽の歴史及び文章を論じたなどは、其の一例であつた。明治十九年頃から、日清戦争前後迄は、蘇峯が文學的に、最も油の乗つた時代で、才思が泉のやうに湧いて出て、抑へることが出来なかつた有様を想像し得る。

今日から見ると、蘇峯の文學批評は、新聞記者の文學觀を披瀝したもので、素より専門家の批評と同一視することは出来ないけれども、未だ文學批評の振はなかつた當時にあつては、文學の進歩に裨補するところがあつた。其の著『文學斷片』に於て「著者文學者にあらず、又た文學者たるを願はず。然れども文學を愛する、若し人間の通有性ならしめば、著者に於ても亦た之れなくんばあらず」と云ひ「非文學者の文學談、固より粗枝大葉なり」と告白して居るのは、必ずしも、表面の謙遜のみとは思はれない。遠慮なく言へば、粗枝大葉の觀なきを得ない。けれども、蘇峯が明治二十年七月『國民の友』に於て、政治小説の弊を論じ、次いで文學の目的、愛の特質に論及して、文學者に眞面目な態度を執るべきことを説いたのは、決して無益の言ではなかつた。たとひ、粗枝大葉でも、意義ある教訓であつた。

殊に『基督教の文學』を論じて、聖書の詩的價值に論及したことは、當時の文學界にキリスト教思想を流入して、清新な風趣を添へるべき一つの力となつた。蘇峯は、其の論文の一節に於て「試に新約聖書を繙け、主の祈禱文、山上の教訓、保羅の手簡等、何ぞ其れ質素なるや。野の百合花、空飛ぶ鳥、葡萄蔓、子羊の譬喩、何ぞ其れ優美にして

趣味多きや」と述べたのは、今日に於ては珍しくないけれども、明治二十年代にあつては、新しい考へであり、新しい刺戟であつたにちがひない。

(五) 蘇峰が創始した人物評論と政治記事の文學化

蘇峰が、人物評論の新しい模型を示したのは、明治二十一年三月發表した『新日本の二先生』であつた。それは、福澤と新島との二人物を對照して、評論したものであつた。其の書き方は、當時に於て、最も新しく、且つ情理を盡したものに庶幾かつた。

蓋し福澤君の教育上に於ける事業は、既に芽を發し花を開き實を結べり、新島君の事業に至つては、纔かに芽を發したる迄なり。故に福澤君の事業を論ずる時には、吾人は歴史家の資格となり、新島君の事業を論ずる時には、吾人は預言者の位地に立たざる可からず。斯の如く二君の事業は、其前後する所あれども吾人は二君を以て我邦教育世界の重なる感化力と謂はずんばならず。何となれば、二君は實に明治年間教育の二大主義を代表する人なればなり。即ち物質的知識の教育は、福澤君に依つて代表せられ、精神的道德の教育は、新島君に依つて代表せらる。

(前略)福澤君は鐵道の技術師にも非ず、電氣學者にも非ず、而して君が常に鐵道電信を云々して、口に絶たざる所以の者は、鐵道電信を愛するに非ず、鐵道電信を成就したる物質上の文明を愛するものなり。新島君は純乎たる僧侶に非ず、而して其の基督教を主張して止まざる者は、實に基督教の傳播を欲するに非ず、基督教の主義を人事に適用せんと欲すればなり。(下略)かうして、新しい人物論は、蘇峰によつて、開始されたと云つて差支へない。それと共に、政治論や、政治記事の新しい書き方も亦彼れによつて、始められた點があつた。二十年代に書いた『外交の憂は外に在らずして内にあり』、『支那を改革する難きにあらす』『隱密なる政治上の變遷』の如きは、蘇峰独自の新しい政治論であつた。『隱密なる政

治上の變遷』は、可なりに長論文で、第一から第五に亘つて居る。其のうちにて、中流社會の新勢力の勃興に論及して「我邦に於て從來中等民族無し、而して是れあるは實に今日に始まる。吾人は實に此の民族の社會に生ぜんとするを見て我邦の爲めに祝せざるを得ず。何となれば、此の民族の生ずるは、我邦が漸く平民社會に入るの兆候にして此の民族が愈々勢力を得るは、我邦に於て平民主義が愈々勝を制するの兆候なればなり。夫れ中等民族とは何物ぞや、獨立自治の平民なり、故に彼等は自治自活の社會に非ざれば、決して生長する能はず。若し社會の制度にして、唯だ主人と奴隸との二階級を以て組織するの時に於ては中等民族なる者は、決して存在すること能はず。何となれば、一は他を役し、一は他に役せられ、二者共に與に自治自立の人民たる能はざればなり。我邦從來の制度實に斯くの如くありしなり、焉ぞ之れに向つて、中等民族の生ずるを望まんや。而して現今に於て中等民族の生長せんとするは、即ち新日本の生長する所以にして、吾人は實に此の民族の生長を以て、我日本の新らたに蘇生したるを認む」と論じたのは當時の卓見であつた。

それから新しい政事記事は、第六議會の傍聽傍觀を書いた『解散！ 嘆呼解散！』などに徴することが出来る。其の冒頭に於て、

詔勅！ 詔勅！ 伊藤總理大臣の演説！ 來れ！ 直ちに、直ちに！

余は倉皇車を飛ばして衆議院に赴く。例に仍りて傍聽滿員の謝絶札は掛られぬ。但だ余は院内通行の特許券を有したれば、直ちに議長室に徑して、議場に沿うたる廊下に出づ。

青簾を隔て、議場を瞥見すれば、異形の人は、議長席を占めたり。果然整貌矜嚴なる楠本は參内し、豐顔平骨なる片岡は之に代れり。議場人少なく天下人多し。議員三三五五寓語するを見る。

と記した一節なども生硬で、歐文的ではあるが、當時の光景を簡約に、而も印象的に表現してゐる。乾燥な政治記事を文學化したのは、蘇峯の功であつた。

彼れは、かうして、隨所に新聞文學の新領土を開いた。そして一方に於て、極力、平民主義の鼓吹に力めた。日清戦争頃迄は、彼れの感化の下にあつた青年が少くなかつた。民友社の同人も亦多く、蘇峯の感化の下にあつた。すべての新機軸、新流風は、蘇峯が先づ作つて、他人に及ぼすと云ふ有様だつた。民友社が、有力な文士を輩出したのは當然だと云はねばならぬ。

(六) 民友社の人々

當時民友社の諸才人中に於て、蘇峯に酷似して居たのは、竹越三又、山路愛山の二人であつた。二人は共に、後に史論家として、其の長所を發揮したが、政論に於ても亦、各自、一家見を示した。愛山は、蘇峯と同じく、多方面で、時としては、文學論をも試みて、北村透谷と論戦したことさへもあつた。が、純文學方面に於て、當時専心、努力して居たのは、矢崎嵯峨の屋、宮崎湖處子、徳富蘆花の三人で、後に國木田獨歩が加はつた。蘆花は、民友社の初期時代には、海外文學の翻譯や紹介に力めて、未だ文名を馳せるところ迄行かなかつた。けれども一部の人は、既に蘆花の存在を認めて居た。花袋は、それについて「國民之友に出た蘆花君の翻譯になつた六號活字の外國文學の紹介、それは殊に私には有益であつた。まだ十分に外國の雜誌を読むことも手に入れることも出来ない私に取つては、未知の外國文學に入つて行く唯一の手引草であつた」と言つて居る。

矢崎嵯峨の屋の『初戀』は、二十二年一月『都の花』に出たが、在來の戀愛小説とはちがつて、筋は單純だが、純

な、あど氣ない、フレツシュな感じを與へる短篇であつた。嵯峨の屋も、二葉亭もひとしく、ロシア文學の研究者であつたから、自然、その方面の感化を受けて居た。殊にツルゲエネフの影響が、著しく現はれて居た。その他、彼れの作には『流轉』『夢幻境』『腐玉子』などの詩味豊かな佳篇があつた。其の文學は、言文一致で「ありません」調を始めたのは、彼れであつた。

嵯峨の屋の『初戀』よりは、一年餘遅れて湖處子の『歸省』が民友社から出た。それは、二十三年六月であつた。湖處子は、獨歩、花袋らと共に、後年『抒情詩』を出した人で、最初から、詩人的傾向を多分に有して居て、ワアズワアズに私淑した。『歸省』は、彼れが故郷に歸つて居た時の山水、風物人情を精寫した散文詩篇で、勿論、歐文を模したものであつた。此の書が當時、非常に愛誦されたのは、故郷に對する清新な詩的情味が横溢して居た爲めであつた。其の『山中』の一章に於て、「微かに痴き唐確の響きに、吾體は悠然として眠ると同時に、靈魂は戶外に忍びぬ。天上の月を採らん爲に、地上の星を拾はん爲に、清き流を嘗めん爲に、圓かの夢を捉へん爲に」の句は、當時、蘇峯が激稱したものであつた。

かうして、民友社は、蘇峯を中心として、主として、文明評論に貢獻したのみならず、傍ら純文學の方面にも、相應に寄與したところがあつた。其の背景となつて居たキリスト教思潮は民友社が文壇に勢力を増大しゆくに従つて、文學的青年の頭腦を支配する力を増大した。そして其の影響は、硯友社のやうに、小説にのみ限定せられないで、後には、各方面に分流して、日本の新文化建設の上にも、新聞文學、雜誌文學乃至小説、新體詩の上にも、廣く、影響したのである。

第四章 尾崎紅葉を中心とした硯友社

(一) 言文一致の創唱者山田美妙

硯友社が、明治文壇に致した貢献は、最も顯著なるものゝ一つであつた。硯友社の創立は、明治十八年二月で、丁度、逍遙の『小説神髓』が世に現はれる二ヶ月前のことであつた。其の最初の同人は、尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案らで、彼等は、何れも、當時、大學豫備門に於て、文學研究に熱中した結果、廻覽雜誌を作つて、互ひに其の才藻を競うたのである。

其後、間もなく、川上眉山、江見水蔭、巖谷小波らが加はつて、二十一年五月には、機關雜誌『我樂多文庫』を出すやうになつた。大橋乙羽、中村花瘦、廣津柳浪らが、加入したのは、稍後のことで、それは、山田美妙が、硯友社を去つてからであつた。

硯友社が、勃興して、文學上の新運動を開始するやうになつたのは、『小説神髓』『書生氣質』などによつて、強く新精神を刺戟された爲めであるが、今一つは、新時代が新しい小説を要求しつゝある風潮を自覺して、それについて舟を乗り出さうとしたのであつたらう。唯彼等の出發點が、江戸文學の系統を中心として、西歐文學の片影を加味したのは、ロシア文學から出た二葉亭、イギリス文學から出た逍遙乃至歐化的傾向の旺んだつた民友社一派に對して、餘程、變つた色合のものであつた。勿論、山田美妙のみは、最初から、純然たる歐化派で、紅葉その他が、西鶴、三馬などに傾倒して居たのとは、大分、趣を異にして居た。

硯友社の初期に於て、最も活動したのは、山田美妙と尾崎紅葉とであつた。美妙は、紅葉が『新著百種』に『色懺悔』を出して、始めて文壇に於ける地歩を確保し得たのにくらべると、遙かに早く活動を始めて居た。彼れが、最初、文壇に現はれた時は、水際立つて見えたほどの技術を示して、大きい反響を得たが、それは、主として、彼れが言文一致體を主唱し、創始した上にあつた。

山田美妙は、東京の人で、通稱を武太郎と云つた。明治元年の出生である。彼れは大學豫備門にある頃から、既にイギリス文學について、相當の造詣を有して居た。彼れが文學生涯は、明治二十年、女學雜誌『以良都女』の編輯主任となつた頃から始まつた。最初の文壇的成功のブリリヤントなるに比較して、中途、挫折して、晩年、不遇のうちに埋もれて了つたのは、紅葉と手を分ち、且つ其の夫人稻舟女史のことについて『早稻田文學』などで、嚴正な指彈を受けたのによる所が少くなかつたであらう。逍遙の『文學その折折』のうちに收めてある「小説家は實驗を名として非義を行ふの權利ありや」と云ふ文章が、それで、美妙非難の聲を揚げて居る。時は、明治二十七年十二月のことであつた。彼れが歿したのは、明治四十三年十一月二十四日で、享年四十三歳だつた。

山田美妙が、始めて、言文一致體の文章を創造した以前、其の伏線になつたのは、明治十七年に出來た「かなのくわい」及び十八年に創立されたロオマ字會などの運動である。當時、帝國大學の教授チャンバレンは『羅馬字雜誌』に於て、文明と言文一致との離るべからざる關係を説いた。また物集高見は『言文一致』と題する一小冊子を公にして、言文一致體の文章の必要を説いて、其の書中の上欄に源語、平家などの文章を掲げ、下欄にそれを言文一致に譯した文章を收めた。美妙は、それ等から刺戟を受け、また『イギリス文學史』などに啓發されて、愈々言文一致時代が近付いたことを痛感した。それで彼れは、明治十九年『風琴調一節』と題した言文一致體で書いた處女作を出して

見た。それは語尾を「何々したのだ。」……がそれだ。」といふ調子にしたのであるが、未だ舊文體を夢みつゝあるものが多かつた當時にあつては、それを、俗悪とか、下品とかの嘲罵の下に葬り去らうとしたので、今度は、語尾を「です」とするやうになつた。それ等の試みの作品を集めて二十一年、世に出したのが『夏木立』であつた。

(一) 美妙の『夏木立』と『胡蝶』

『夏木立』には、『柿山伏』『籠の俘囚』『花の茨』『武藏野』『仇を思』『贗金剛石』の六篇を収めてあつた。『柿山伏』は、當時の若い政治小説の作者を主人公として、政治小説の淺薄と非文學的な點とを諷刺したもので、その他は、抒情的散文詩乃至お伽話のやうなものであつた。二葉亭の『浮雲』の現實的で、文明批評があり、率先、自然主義の正脈を有して居たのにくらべると、美妙の作はロマンチックで、詩的色彩が多かつた。所詮、内容に於ては、『浮雲』に及ばない稚氣を持つて居た。

『夏木立』の價値は、矢張、文體の上にあつた。高山樗牛は、その點について「意匠嶄新にして文字亦瑰奇富麗を極む、其景物を叙するや、盛に聯合、照徹の巧を盡して之を修飾し、切りに直喩、隱喩若しくは活喩等を使用して讀者の奇を好むの心を樂ましむ」と云つたが、稍過褒の傾きがある。勿論、宜い方から見れば、文字の瑰奇と富麗とがあるけれども、どうしても、作り物と云ふ感じがぬけ切らないところがあつて、多分のアフエクテシヨンが纏ひ付いて居た。

夜は根城を明け渡した、竹箴に伏勢を張つて居た村雀は新に軍議を開き始め、闇の隙間から祈り込んで来る曉の光は次第に四方の暗を追ひのけ、遠山の角には穹の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼煙が立昇る。(『武藏野』)

當時にあつては、勿論、餘程の苦心を重ねたフレッツシュな書き方であつたらうが、今日から見ると、どうしても、幼稚であり、氣障であると云はねばならぬ。早曉の光景を戦争に喩へたのは、美妙の才氣のあるところではあるけれども、唯表面の美しさのみあつて、少しも明瞭な印象を與へないのである。これを二葉亭の叙景に比較すると、遙かに劣つたところがある。『浮雲』のうちに、月夜の光景を叙して「月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初め隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は縁側へ上つて座鋪へ這込み、稗時（ひら）の水に流れては金激澗、簷馬（やま）の玻璃に透りては玉玲瓏、座實の人に影を添えて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ簾によろばい懸る夕顔の影法師が婆娑として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が忽ち螢と成つて飛び迷ふ」とある方が、餘程、自然で、アフエクテシヨンの分子が殆ど無い。唯「金激澗」とか「玉玲瓏」とか、漢詩のうちにある文句を形式的に用ひたやうな點が、幼稚に感ぜられるばかりである。

が、歴史的に評價するならば、一概に非難し得ないかも知れない。當時、美妙は『夏木立』に於て、文壇的地歩を占取したのであるが、更に明治二十一年『都の花』に『花車』の一篇を出し、翌年『國民の友』春季附録に『胡蝶』の一篇を公にするに及んで、彼れの名聲は頓に揚つた。『花車』には「です調」の特色が、善惡共に出て居た。

「しかし、なア」……

何が「しかし、なア」です。友禪の長襦袢に男靴は「ぶる」の駄體です。連絡の無い無理な襖子は轟く胸の兆候です。「見た」と云ふ趣は言葉の外に髪髻として居る工合。悟つたか、相手の書生の眼には微笑の雲。

「目と眉とは宜いかはり口が如何にも見苦しいな。けれど後から見れば」……

思はず敏くなる力造の戯談。
と云つたやうな調子である。當時、批評家正直正太夫（齋藤綠雨）が、美妙の文章を嘲つて『美妙宗』と云ふ題目の下に、「この宗には秘藏のお経あり。言文一致と名く。飽迄お経に酔つて衣紋をつくらう外見上戸なり」と云つて、左の如く口調を摸して居るのは、適切である。

この宗の初級はマア斯うなるべし「向ふから来たのは男です、下駄を穿て居ます、が跡が減つて居ます、そして頭は刈込前の散髪です、フケの雪が襟の麓に積つて居るさうです、是が女ならどうでせう、鬘を結つて居るに相違ありません」又時々千古未發の新説を挿むことあり、その雛形は下の如し「酒は猪口に注げば猪口の形です、酒を斟に注げば斟の形です。實に酒は方圓の器に随ひます。水も亦其通りです。が水は酔ひません。けれども酒も水も流動體です」

美妙の言文一致には、かうした弊と癖とがあつたが、『胡蝶』は、より多く、彼れの美所を含有して居た。内容は、平家の末路時代に於ける一少女が、愛と忠義との板挟みとなつて苦悶する可憐の運命を詩的に描いたものである。其の文致は左の如く豊麗を極めて居た。

夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味はふといふ有様で反射の綾模様を浮織にして居る苦屋の板がさし、しかも春夜過ぎた春雨の足跡をば銀象簀とも見立てられる蜻蛉のぬらりに見せて居ながら、それで尚ほ水際立つて見える工合の美しさ餘情は以心傳心です。

當時の文章としては、可なりに巧緻なところがあるけれども、今日の文章とは、大分調子が變つて居る。『浮雲』の文章が、略ぼ今日のと變らないのにくらべると、幾分稚氣があるやうに思はれる。が、言文一致の上に於ては『浮雲』と相並んで、新興の機運を助長した効果が少からずあつた。殊に『胡蝶』が出た時は、其の挿繪に初めて裸體畫を添

へてあつたので、作品の優秀なものと相俟つて、評判が高かつた。中には、裸體畫を攻撃したのもあつた。また森鷗外のやうに、匿名で『讀賣』紙上で裸體畫美を論じて、保守主義者に一撃を加へたものもあつた。さうした評判を別として見ても、『胡蝶』は、歴史的に相當の好地位を占取すべき佳作と云はねばならぬ。

美妙は、其の後『いちご姫』『ぬれ衣』『此の子』などの作を發表したが、『胡蝶』や『武藏野』ほどには優れて居なかつた。『いちご姫』などは、會話に「侍る」候ふ」と云つたやうな文章語を用ゐて、地の文を言文一致としてあつたら、妙な不調和のあとが見えた。蓋し美妙には『胡蝶』を得意の頂點として、次第に緊張味を失つてゆくと云つた趣があつた。

(三) 紅葉の出世作「色懺悔」

美妙に對立して居た尾崎紅葉の出世作とも云ふべきは『二人比尼色懺悔』で、二十二年『都の花』第一編に出た。紅葉は、それ以前に『我樂多文庫』へ『風流京人形』『江島土産貝屏風』『紅子戯語』『娘博士』『怒氣鉢巻』などを出して、一九、三馬の口吻を模した輕妙な文章を示して、夙に彼れの才藻の非凡を示したけれども、未だ少數者の間に認められて居たに過ぎない。彼れが比較的の廣く知られるやうになつたのは『色懺悔』を出してからだつた。

紅葉は、イギリス文學などを幾分か讀んで居たであらうけれども、彼れが最も興味を以て讀んだのは一九、三馬、西鶴らの作品で、殊に西鶴には、餘程深く傾倒して居た。西鶴が、當時の新人を動かしたについては、抱月の『明治文學略史』のうちにあるやうに「文藝の方面に於ても必ずしも歐洲の思潮のみが永く其の源ではなく、此の頃からして元祿文學の復興と云ふ事が唱へられて來た。殊に最初に其の中心となつたものは西鶴で、後には近松が之れに繼い

だ。此の西鶴熱勃興に關しては、淡島寒月などいふ人が最も與つて力があつたと聞く。併しそれが新文學の源を開かんといふ明かな自覺から來たものであつたか、否かは知らない。兎に角、西鶴を埋れた趣味の中から掘り起こした爲に、明治の新文學は色どりを變へて來た。勿論其の西鶴も一面には徳川末の馬琴以下の拾收すべからざる空想文學に飽きた目には自ら『小説神髓』が唱へた寫實と云ふ精神の在る所を面白く感じたのであらう、結局は寫實の大勢に合するものとして西鶴は勢力を得たのである」と見たのは、穩健な解釋だと思はれる。紅葉が西鶴に共鳴したのも、畢竟、寫實的傾向に於て、新文學の範とすべき點があつたからであらう。それと同時に、國粹主義の提唱が、國文學復興の氣運を促がしたことも亦、かすかに影響したらうと思はれる。

『色懺悔』の有した價値は、『胡蝶』などひとしく、内容よりも、文章、體裁の上にあつた。即ち紅葉は、二葉亭、美妙の言文一致に對して、紅葉独自の新しいスタイルを『色懺悔』の上に試みて、ある程度まで成功したのである。彼れが、こゝまで來るには、文體について、餘程、苦心もし、研究もしたにちがひなかつた。それは藝術家らしい性格を最も鮮明に有して居た彼れとしては、勿論、當然のことであつたらう。

高山樗牛は『明治の小説』中に於て「美妙が國民之友附録に掲げたる『胡蝶』、紅葉が『新著百種』に掲げたる『色懺悔』、皆之れ二氏が當年の傑作、一時世人の喧傳せし所のもの、而して其文體を問へば、何れも言文一致ならざるは無かりき」と云つて居るのは、誤謬である。『色懺悔』の文章は、言文一致の範疇に加へられるべき種類ではない。紅葉独自のスタイルだ。

『色懺悔』の内容は、『胡蝶』と同じやうなロマンチックな史的哀話である。「時代を説かず、場所を定めず、ある時ある處にて、ある人々の身の上譚」として、木枯寒く吹きすさぶ山里の荒れた庵に主客二人の美しい尼が、一夜、偶然

話し合つて、主人の尼は夫が戦死したロマンスを、客の尼は、戀人が戦場に歿した悲みを語り合ふに及んで、其の人は主客二人の尼が互ひに思つて居た愛人と知れて、驚く時、夜は、ほのぼのと明け離れたと云ふ筋である。その篇中の人物は、在來のロマンスのうちに、いくらかもある類型的な物で、結構も亦殆ど舊套を脱しないけれども、其の文章は紅葉が、西鶴脈と歐文脈とを巧みに按配したもので、簡潔な文句を種々の句讀、記號を以て繋いだり、餘韻餘情を讀者の胸に残すやうに省略法を用ひたり、？の記號を以て、ロマンスを一夜の出來事のうちに縮めたりした點は全く紅葉の獨自のものであつた。島村抱月は、『色懺悔』が出た時分、其冒頭にある文句の美と清新とに驚嘆して、それを手帳に書き留めたと云つて居るが、其の一節は、左の如くである。

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も風の烈く。あるほどの木々の葉——峯の松のみ残して——大方吹落しぬれば。山は面瘦せ衰え、森は骨立ちて衰し。

茶の煙だに擧らずば。山麓も知らぬ谷蔭に誰か住む庵ぞ。かくても尙捨難き浮世の面影のこす菱垣。疎に結び縋し、竹は蝕み。繩朽ちたれど、枯葦の名残惜しく纏れるまゝに倒れもやらず。二本黒木を入口の標に茅葺の屋根は歳に黒み。落懸る檐風に傷はしく。風情は月にはばかりの破壁。強くは踏れぬ竹椽。切株の履脱より左に三尺。其處に寛の、水ほどにもなく絶えせぬ雫。關枷桶に滴る音の、やうく幽に疎に成りゆくは髓の口凍るにやあらん。夕暮の風寒し。

明治二十二年頃に書いたものとしては、立派な文章で、優麗な雅健な趣のある、鍛鍊を重ねたものだ。紅葉が独自の書き方、記號が最も著しいのは、左のやうな點である。

高きは林か。低きは野か。唯一面に白く。なほちらく名残をふらす曉の空。岡の片蔭に破れ硝子の薄氷に。露を取せし小澤近く。古りたる梅樹。下は幹を染分け——上は（紅蕊を包む——雪。誰……此美を亂し——此美を傷く……こは何事。低き梢に。切口より血汐を落す生首三つ結び付けて。こぼれ齒の長刀の朱に染れるを幹の二又に寄掛け。諸膝組んで雪を抱ふ若武

者——體は……草摺。小袖の下二段を萌黄に成し。上を白糸——其華美さ卯花威。いかに手痛き合職やしつる。射向の袖の菱縫の板はちきれ。草摺の板をほつれて、下る匂の糸。胴の威毛には。血液斑點に染むる散紅葉。鬚巻もなく鬢髪大重にふり亂し。額から眉を割つて斜に左眼の上を行くは斬疵か。紫ばめる唇の下に。三寸ばかりかすられて。朱ににじむ眼……うす青む面色。雪一口ごに呼吸せはし。

(四) 紅葉の人物と優れた藝術的氣稟

紅葉が、藝術的な氣稟は、既に此の時分から現はれて居たのだ。花袋も此の點を認めて『色懺悔』を評して「その文章に至つては言文一致でもなく、普通の雅俗折衷でもなく、また翻譯調でもなく全く一種オリジナルなものであつた。文章なども現今でこそ、全く和文漢文の領域を離れて立派な整つた體をなしてゐるが、『色懺悔』當時に於ては作家は文章の苦心といふことが大變であつた」と云つて居る。蓋し紅葉は、言文一致の冗漫に流れ易いのに満足せず、翻譯調のゴツゴツしたのを喜ばず、さればとて、在來の讀本、滑稽本にも嫌らない結果、西鶴の警拔な寫實的な含蓄の多いスタイルに共鳴して、それに歐文學の風味をも少しばかり加へて、一新體を得たのである。

かうして、紅葉の『色懺悔』は、美妙の『胡蝶』と匹敵し、若くは、それを凌ぐとの評判を得て、間もなく、二十二年五月の『新著百種』第三編の附録に『風雅娘』を出し、續々その後も新作を提供したが、明治二十三年中は大した作を見せなかつた。二十四年になつて一月には『新色懺悔』、八月には『二人女房』、十月には『伽羅枕』などの佳作を書いた。

尾崎紅葉は、名を徳太郎と云つて、慶應三年十二月十六日、東京に生れた。彼れは、三田英學塾、大學豫備門を経て、帝大

に入り、法學及び文學を各一年づつ修めたが、明治二十二年『色懺悔』を出して、文壇に認められると同時に、大學を去つて文學者生活に入つた。彼れは、生粹の江戸ッ兒で、快活な洒脱な肌合の人であつた。その作品から想像して、色男を氣取る人のやうに誤解したものもあつたが、其の實、彼れは義理を重んじ、友人を愛し、清貧に安んじ、いろいろの好尚な趣味を持つて居た紳士で、また門下の人々にも、親切な指導を與へて倦まなかつた。其のうちから、鏡花、風葉、秋聲、春葉らを出したのは彼れの文勳の一つであつた。彼れが早く世を去つたのは、無暗に濃い茶や、煙草や、菓子を受用した爲めだと云ふが、其の一半は寧ろ文章上の憊憊たる苦心、努力が、彼れの健康にわるい影響を及ぼしたものと見なければなるまい。彼れが胃腸で世を去つたのは三十六年十月三十日で、年僅かに三十七だつた。十一月二日、彼れを青山の墓地に葬つた時、會葬者は二千人に上つた。花袋の『東京の三十年』には『紅葉山人を訪ふ』と云ふ一章がある。其の他『十千萬堂日録』や、紅葉書翰集の類や、彼れのことに関する記述、評論、いろいろある。本間久雄著『尾崎紅葉』、國木田獨歩の『紅葉論』、後藤宙外の『美妙、紅葉、露伴の三作家を評す』、巖谷小波編『紅葉より小波へ』などは其の主要なものである。

私は、紅葉の『二人女房』、『伽羅枕』などを紹介し、批評する前に、作家としての紅葉について簡短に概論して置きたいと思ふ。紅葉の作品には、頗る嫌らない點とまた頗る敬服する點との二つがある。私が嫌らないのは、紅葉が自己の趣味に囚へられ、若くは戀愛、色慾の世界にのみ取材して、それ以外に力めて出ようとしなかつたことである。換言すれば、小主觀のうちに彷徨して、高大な理想、深刻な人生觀、社會觀乃至人間觀を有しなかつたことである。それに彼れの描寫も純粹な寫實主義に徹底せず、其の態度も、戯作者風のところを脱し切らなかつたやうな點に、稍不滿を感じざるを得ない。

私が紅葉に敬服する點は、天稟の藝術的な肌合を以て居て、一生文章に忠實で、倦まず、撓まずに、其の努力を續けて、『多情多恨』のやうな立派な文章を産出すると共に、今日の新文章の基礎を作つたことである。文章上の才能は

勿論、夙に彼れの有した特徴であるが、而も彼れは、一日と雖も、彼れ自身の文章に満足しないで、次きから次きへ新しい工夫を案出したのみならず、其の鍛錬や、推敲に多くの時間を費すことを惜まなかつた。此の點に於て、彼れは、明治文壇の第一人者と云つて差支へないほどの業績を残した。

私が紅葉に懐かない點については、彼れも晩年に、それを意識して『金色夜叉』の大作を書いたのであるが、矢張、これも、形式の方に餘計に苦心して、内容の方は、紅葉の意圖のやうに行かなかつた。當時の時代精神や、社會狀態を皮相的に描いた丈で、其の肉を抉り、髓を穿つと云ふところまで行かなかつた。けれども彼れが、こゝ迄辿りついたら就ては、彼れの藝術家としての努力と向上とを認めないわけに行かない。

が、紅葉が、もつと嚴肅な内觀を有して居て、哲學や、思想の方面にも、心を向けるやうであつたならば、彼れの文學は、もう少し深味を有し、痛切な内容を有したかも知れないのである。ところが、彼れの交友、彼れの周圍には彼れの趣味に一致し、若くはそれに共鳴するものばかりで、哲學や、思想の方に踏み込まうとしたものは一人も居なかつた。さうした傾向を有したものが稀れにあつても、紅葉一派乃至硯友社派に容れらるべき可能性がなかつた。そのため、紅葉は、深い省察も、内面的苦悶も、宜い加減にして置くと云つたやうな有様のうちに一生を終つた。彼れが小主觀に囚はれて居たのは、止むを得ないのである。

(五) 紅葉の「新色懺悔」と「二人女房」

更らに彼れの作品については、私は凡そ三期に分つて見たいと思ふ。第一期は、略ぼ西鶴の影響の下にあつた時代、第二期は西鶴の影響から離れようとした時代、第三期は略ぼ自家特有の内容とスタイルとを構成し得た時代である。

第一期は初期から二十七年頃迄の作品である。第二期は二十八九年頃から三十年頃迄である。第三期は三十年頃から三十六年迄である。第一期の主要な作品は『色懺悔』『新色懺悔』『二人女房』『伽羅枕』『心の闇』『三人妻』などである。第二期の主要な作品は、『不言不語』『多情多恨』『青葡萄』などである。第三期の主要な作品は『金色夜叉』『八重櫻』などである。勿論これは、大體の區分であつて第一期のうちでも、二葉亭の『浮雲』と似た『二人女房』のやうな作品がある。また『心の闇』のやうな自然味のある作もある。だから、以上は、大まかな區分と云はねばならぬ。けれども西鶴一流の色慾世界を主とした内容の上から見ると、以上の區別は、大まかではあるが、必ずしも不當ではない。

『新色懺悔』は、宇治の美しい少女が、思ふ人に嫁することが出来ないで、思はぬ老富豪の許に嫁して、次第に青葉時代の去りゆくのを悲みながら、いつしか自分も老いて了ふと云ふ筋であつた。紅葉の著眼は、慥かに宜いところを覗つたのであるけれども、さうしたはかない運命の女を描くのに、軽い調子の文章を以てしたので、少しも悲痛な味が出て居なかつた。表現の上に於て、失敗した作であつた。

『新色懺悔』の後に出了た『二人女房』は、紅葉が、始めて言文一致體を以て書いた佳作であつた。花袋が、當時紅春の直話だとして傳へたところによると「どうも山田美妙のでも面白くない、又「だ」調では、ぶつきら棒だし、「ありません」調は丁寧過ぎるし、どれも満足し得ない」と云ふ意味を語つたさうである。畢竟、紅葉は、それ等の不満足を除いた言文一致を創始する意氣込で「である」調を案出したのである。

勿論、試みの時代であつたから彼れも「である」調を以て「二人女房」を一貫して居るかと思ふと、さうでないところもある。「なり」「あり」と云つたやうな文章體の語尾をも往々、用ゐて居る。要するに、それも亦紅葉の苦心から出たことで「である」ばかりでも、單調だとして、語尾をいろいろに變へて見たのだらうと思はれる。

其の内容は、ある小官吏の娘二人を中心にして、運命や、境遇や、氣質から、自然、二人が、ちがつた方向を執つてゆく徑路を描いたもので、姉は美貌で、ある相當な官吏の妻となつて、一時、家庭の風波に悩み、妹は美しくないため、着實な職工の妻となつて、平和な家庭を作ると云ふ結末になつて居る。そして此の二人の娘の父母、姉の夫と其の母、妹の夫となる人などをからませてあるが、何れも典型的で、際立つて描かれてゐるのは、矢張、二人の娘である。

姉娘は、お銀と云つて、快活な伶俐な愛嬌ある女として描かれ、妹のお織は、無口で、苦勞性のある女として描かれて居る。さうした氣質は、ある程度迄、出て居るが、心理描寫の點になると『浮雲』ほど深く突込んで居ないのが物足りない。それに説明の多いことも目障りである。「若き女子は箸の轉けたも可笑く。笑ひ興する心の中にも仍苦勞絶えずして、老けぬ間に縁附きたや。好き婿取りたや。世帯持つとも苦勞なきやうにと、金持も容色美しもうづれか身のおさまりを案じて。朝暮の憂慮とせざるはなし」と云つたやうな説明が、往々出て居る。

が、お織の嫁入するときの心理を描いたところなどは、適切で、娘から妻にならうとする女の哀愁が、溢々出て居る。「姉様が澁谷様へ嫁く時には、別れるのが悲しくつて。袂につかまつて泣いたらば。姉様も泣いて。私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時、誰も残つてゐる人が無かつたらう。それほどは無かつたけれど。随分可厭な心持だつた。よく考へて見れば。かうして、御父様や御母様と一緒に來たやうなもの。今後は私一人置いて行かれるのだ。明朝から石黒の家の人になるのだ」と描いたあたりは、紅葉の宜いところが出て居る。けれども全體から見ると、作爲のあとがあつて、『浮雲』の如き自然味を缺いて居た。殊に『浮雲』のやうに、當時の文明や、時代精神を描くといふところまで、進んで居らなかつた。

(六) 紅葉の文學上に於ける一進歩

『伽羅枕』は『二人女房』を發表すると間もなく書いた作であるが、これは、雅俗折衷風の文體で、意地と張の強い一遊妓の生涯を告白させたものである。西鶴の『一代女』などを思はせるやうな趣のものだが、そして文章も、西鶴の匂ひが強くなるものだが、單にそれ丈で、紅葉の表現上の苦心を示したものに過ぎなかつた。

ところが『心の闇』になると、素直な作で、盲人佐の市が、千束屋と云ふ旅館の美しい娘お久米に戀した心持が、比較的同情を寄せて書かれてある。お久米が、佐の市に對する心の働き方、佐の市がお久米に對する煩悶、それが相應は表現されてゐる。お久米が愈々樂居と云ふ家へ嫁すると聞いた時の佐の市の絶望状態とお久米がそれについて佐の市を憐む心持とが、左のやうに描いてある。

佐の市は茫然として千束屋を出でぬ。其態は大晦に金遣せし人の住所無く、生死二者の分別に彷徨ひたらむ如く、涙を出さぬ泣顔も哀れに、やうく暇乞せし聲音の悲しさ、歸りて後までも耳の底に残りて、お久米は枕に就けども眠られず、心に懸る佐の市が變りし様子を念ふに、その理由は少しも分らず、不審の積る間に、明白に其とも無く、我身に罪のあらむやうに覺えて、異しう心快からぬを、そんな理は無けれども、今夜に限りてどうしたものか、口も碌にきかなんたのは私が悪い。不具者といふものは直に僻見を出して、些少の事をも氣に懸けるとやら。其中にも明の失いものは不便も一入なれば、何かに就けて優しう働つてやれ、と平素から父様のおつしやりつけ。明日の晩は機嫌好く話して、平生のやうに嬉しがらせてやりませう。十何年のあひだ出入して、顔を見ぬ日の無い佐の市なれど、私も近々に片附いてしまへば、今までのやうに會ふこともあるまい。(中略)と思ひつゝ寢ればや夢に佐の市は、寢間の窓より覗きこみてお久米様おめでたうござります。へへへと三聲の笑聲肝頭に徹へて凄じく、聲立てむとすれば吭塞がり、夜衣引被がむとすれば釘附のごとく、顔に袖して俯けば、佐の市は窓より

入らむとして、下駄の齒に葎を踏らす音、(中略)あ貴麗に見捨てられては生効の無い、佐の市、長らへてゐれば、言替はした女の他へ適くに、祝の表あはれを持って來ねばなるまい。いつそ死なう。死ぬ覺悟をした。其代り此恨は忘れぬと振放して飛鳥の如く窓より躍り出づるを、追蒐けむとする後より、お久米と呼ばれて振向けば、意氣なる洋服扮裝の築居喜一郎、慚かしやと思ひながら挨拶すれば、男も山高の帽子を脱るに刺立の坊主頭！それはと見る顔は佐の市。餘りの事に仰天して、儼々、拍子に夢は覺めけり。

『心の闇』は、全體として、能く纏つて居るのみならず、人物の結末を強ひて附けないで單に「言はずして思ひ、疑ひて懼る。是も戀か、心の闇」としたのは、當時にあつて、新しい書き方であつた。

(七) 『三人妻』の文章及び内容

『三人妻』は、興味中心の作品で、紳商葛城余五郎の愛妾才藏、紅梅、お艶の三人を、それぞれ氣質の上から、巧みに書き分けた作である。またある一面から見れば、明治の紳商が、女色に耽つた内部生活を暴露したものだと言へないことはない。其の文章は、華麗と濃艶とを極めて、錦繪をひろげ出したやうな感じを與へる。恐らく、紅葉が、西鶴風の文致から出發して、自己の文章を略ぼ完成して練熟の極致に達したものと云つて宜いであらう。要するに、第一期時代に於ける第一の大作と見るべきものである。が、内容においては、依然、西鶴のやうに色慾世界に彷徨して居たと同時に興味中心で書いた爲めに、場面の變化に氣を取られたり、誇張したところがあつたり、例の説明澤山の箇所があつたりしたのは、缺點であつた。

けれども、其の文致の華麗は、紅葉でなければ、到底、書けない妙趣がある。彼れが、此の長篇をタルミのないや

うにするために、鍛へた上に鍛へた文章の味は、左の園遊會の一節を見てもわかるのである。

曙の空曇りて如何を氣遣ひしに。風少し出で、麗なる日和を定めぬ。音羽なる笑青莊の門へは、翠柳の綠濃に、二十餘間の流水露地、垣の外なる密竹に暗く、此に心を籠めて幽情に造り、奥庭の木戸を入れれば、華美さに目覺むる一面の櫻林、何千本の枝頭重く、人は雲の中を行くがごとし、西の隅に一拱もあるべき普賢櫻の下に錦の幕を張りて、伶人袖を聯ねて妙なる音を立つれば、門に入るもの多時は此處を去らず。休憩の床几を幾處か木間に据えて、各十二なる女童の眉目麗しきを擲りて茶の給仕に付け、少しく距りたる物蔭の小屋に煮茶點心を司どるものあり。ほのくくと茶煙を落花の風に颺げたる、いと心憎し。(中略)或は黒の紋附袴裝の五七人、美男揃ひにて來るもあれば、母を劬り、子の手を牽き、妻を伴れたる殊勝なるもあり。衣香、帽影、響の光、黄金の鎖、マニラの煙、薔薇の風、女の顔は白く、男の艶は黒く往來織るが如く、笑語の聲の中を、反古染の袖無羽織に淺黄頭巾打冠りて、白酒や白酒を賣行くは、第四商塵の番頭清水某、これは御趣向と褒るものには、格別の大茶碗にて振舞ひ、向鉢巻にて難波鮓と箱燈け行くは第二商店の會計、老妓の島田ほどの舞包を行遣ふ童女、ことに一つ宛くれで通りぬ。チャリネの道化師様に裝束きたる男、首筋にその數二百許色々の風船球を結びつけて、西洋唱歌謳ひつゝ、道化女に裝りたる侶にワイオリンを弾かせ、拍子をかしく舞ひながら糸を斷れば、寶珠の玉の天上のごとく、小氣球天に満ちて、之も興になりけり。此外に種々の思附人笑せとなりて、いづれも花は餘所に、此上はお妾様は何處におはします、と足は皆掛茶屋に向きて急ぐ折柄から、木蔭より白鳥片手に衝と走出てたる女房あり。手織絹と見せたる京御召の小袖に、紋縮緬の赤前垂淺黄縮緬の平縫を片釋にして、横櫛露に置手拭したるは、茶見世の娘か酒買ひにゆくと見せて、水際の立ちたる美人、彼は誰と吃驚せぬもの無し。跡を追けよと口には出さねど、其心に違ひ無き一群、燕尾服着て目尻の垂れたる男が、先達になつて花の雲間に分入れれば、池の畔の鏡花亭の主、煮染の品々を砂鉢に盛りて、外見を不味々々しく、念の入りたる生稻が抱了、酌に付けたる小女郎の馴れたる舉止は其の筈、一粒撰にしたる柳橋の半玉ぞかし。

三間の出店にも各客満ちて、主婦は八方を斬持に、面白半分の仇口きゝて、應對の上手と姿の意氣なるに譁らぬものも此の

女こそ才藏と目を着けぬ。(下略)

園遊會に於ても、才藏が柳橋藝妓としての本來の俠な氣質を現はすと共に、紅梅とお艶についても「此處は紅梅の受持と聞けば、察する所、自身は姫君の扮装にて、彼几帳の蔭に小陰れ、今に現はれて、驚かされむ」と記し「心閑に茶筌を拵りて、颯々たる釜の松風に耳を清ます女はお艶なり」と記して、自然、其の性格趣味を仄かして居る。三人三様の女が、結局迄、いろ／＼に開展してゆく戀のロマンスは、興味中心的に成功して居る。要するに此の期に於ける紅葉は、色慾及び女性を描寫する上に特殊の優れた技術を示したけれども、結局共通的な女性の普通心理若くは情緒を描き得たが、特殊の個性を描き得なかつたのは、著しい缺點であつた。紅葉も亦「三人妻」を一轉機として何等か異つた方へ進まねばならぬことを心に感じて居たやうである。そこで、彼れの第二期時代が来る。

(八) 硯友社同人の文壇的活動

紅葉を中心として居た硯友社同人の文學的收穫を見ると、廣津柳浪は「殘菊」に於て、巖谷小波は「妹脊貝」に於て、川上眉山は「二おもて」に於て、大橋乙羽は「露小袖」に於て、石橋思案は「乙女心」に於て、何れも、文壇に認められた。

けれども彼等は、紅葉のやうに、際立つた藝術的收穫を示さなかつた。石橋思案の如きは、腦を病んだ爲めか、作家としては、一番早く進歩を中止して、文壇の圈外に出て了つたやうな有様だつた。巖谷小波は、最初から御伽話の作家たるべき傾向を有して居て、少年少女の可憐な面目を描き出す上に於て、特殊の才能を持つて居た。が、小説方面においては、餘りに淡白な洒脫な性質が、作品の内容に於ける深さ、表現上に於ける鋭さを缺如させたやうで、どうも、伸び得べき可能性を見出し得なかつた。果然、聰明な彼れは、早く御伽話の方に轉じて了つた。

巖谷小波は本名を季雄といひ、明治三年、東京に生れた。十八歳の時、硯友社に加盟、最初から少年文學に長じ、早くこの方面の開拓に先驅した。今日の童話の發達は、彼れの御伽話に負ふところが多い。二十九歳の時、ドイツに赴き、二年の後、歸朝、益々その独自の文壇を開き、四十歳の時、渡米、又博文館員として勤続二十餘年に及んだ。昭和八年卒去、年六十四。「小波御伽全集」には主要な著作が收められてゐる。

川上眉山は、當時、許六、也有などの俳文に傾倒して、洒落な軽い味のある美しい文章を書いて其の才能を示したけれども、小説作家としては、未だ何等の特色を發揮しなかつた。日清戦争後、觀念小説の時代がくる迄、彼れは、唯文壇の一方に籍を置いて居るに過ぎない有様だつた。

ひとり、廣津柳浪のみは、「殘菊」に於て、將來、所謂深刻小説乃至悲慘小説を以て著はれるであらうところの可能性を示して居た。元來、彼れは、山田美妙よりも早く言文一致體で、小説を書いたほどで、美妙が、夙に聲名を馳せたのにくらべると、遙かに遅く認められるべき損な運命の下に置かれて居たやうだつた。「殘菊」は、ある病める女の悲痛な心理を描寫した點に、他の硯友社同人とは、全く異つた傾向や、味を持つて居た。紅葉の如きは、流石に柳浪の力量を早く見抜いて、其の比較的に滋味のある書き方を賞揚して、市川團藏の藝と風格を同じうするやうに云つた相であるが、そこに、柳浪が、後來、めきめきと發達して、一時、紅葉を凌がうとする迄になつた本質が、略ぼ芽を吹き出して居たことを見るのである。

以上のほかに、江見水蔭、中村花瘦などが居たが、水蔭は、眉山とひとしく、日清戦争頃までは未だ其の才能を十分伸ばさなかつた。中村花瘦は、發達し切らないうちに、早く世を去つて了つた。その他、丸岡九華、岡田虛心亭な

ども居たが、一時、創作に筆を染めた丈で、中途、文壇を離れたので、文學的に何等の足痕をも印しないほどであつた。

第五章 紅葉に對峙した幸田露伴

(一) 詩人としての露伴と其の作品の特質

紅葉と略ぼ同時に文壇へ出て、其の聲名も亦紅葉と併行的に喧傳されたのは、幸田露伴であつた。彼れは紅葉のやうに、硯友社と云ふ一つの背景を持つて居ない孤立獨往の人であつた。其の文學生涯は、明治二十二年二月、處女作『露團々』を『都の花』に發表した時から始まつた。

彼れの出世作とも云ふべきは、同じ年の九月『新著百種』第五篇に出した『風流佛』であつた。『露團々』は、今日、見ても、可なりに風變りな作で、アメリカの老富豪が、其の愛嬢のために、婿の候補者を新聞紙上に廣告して求めると、多くの應募者があつて、老富豪が、それ等の人々を一々試験する、結果、其の愛嬢は、相思の男と結婚すると云ふ筋である。興味中心の作で、少しも、露伴の特色が出て居ない。單に其の漢文の素養が現はれて居ると云ふ迄のものである。唯露伴が、當時の歐化熱にかぶれて、頻りに、アメリカの風物などを敘して、異國情調を漂はせようとした點が、珍しいと云へば云へるであらう。

『風流佛』になると、露伴が、獨自の天地を開いて行かうとした意氣が見える。彼の特色は、それから漸次、發揮されて『一口劍』『縁外縁』『ひげ男』『艶魔傳』などから『血紅星』『五重塔』に至つて高潮に達した趣があつた。それは、二十二年から二十五年の秋頃迄の文學的收穫であつた。日清戦争前に於ける『風流微塵藏』なども、露伴の意氣、精力が正に旺盛であることを示して居た。

露伴は、紅葉と並稱されたけれども、それは單に文壇的地位の上のみ留まつて居て、其の人物性行、作品は、全然、ちがつてゐた。紅葉も、露伴も、略ぼ同年の出生で、共に生粹の江戸ッ兒であつたけれども、紅葉は、都會情調を熱愛した通人肌の傾向を有し、露伴は田園情調を嘆美した詩人肌の傾向を有して居た。紅葉は、西鶴の小説に傾倒して、其の文章内容までも、西鶴の影響を受けて、始終、色慾から離れなかつたけれども、露伴は、西鶴に傾倒し乍らも、單に文章上に於て、其の影響を受けた文で、内容は、大分異つた風味を備へて居た。

それで、露伴に對する批評家は、紅葉を現實派としたについて、露伴を理想派として、其の小説を理想小説だと云つたものもある。けれども私は、露伴に對して、別な見解を持つて居る。所詮、露伴は詩人だ、徹頭徹尾、詩人だ。彼れの小説は、其の詩想を披瀝しようとして假りた一個の形式に過ぎないと信するのである。勿論、彼れは、詩人として、佛敎的な思想を具備してそれを表現しようとする傾向を有して居た。換言すれば、一種の意力若くは藝術的情熱の強さを憧憬して、それ等にふさはしい材料を探り入れて、それを詩的表現の上に浮べようとする特殊な傾きを持つて居た。それは、現實派の眼から見ると、餘りに狭く、餘りに空想的、主觀的で、どの人物も、露伴式の類型に鑄込まれて居て、單調で、實感的でないにちがひない。けれどもそれと同時に、現實派の有しない一個超越的な詩の世界を有して居た。かうした見解の上で起つて、露伴の作品を眺めると、彼れ獨自の詩的情熱と詩的色彩とが、紅葉を中心とした硯友社一派に對して、燦として輝いて居るのを見るのである。

在來、明治文學史の上に於て、露伴を論じ、若くは、紹介するものは、唯時代的に有名な作品を批評する文で、露伴の詩人として小説以外の形式を假りて發表した紀行文や、小品の類を見逃して了つて居る。それは、畢竟、露伴を小説家の型に入れて、頭から、小説家として、彼れを律しようとするからである。若し彼れを詩人として見るならば

小説以外の形式を假りて發表した彼れの詩的小品の類にも言及しなければならぬのである。率直に云ふと、私は、露伴の小説としては『五重塔』その他二、三篇を讀めば、それで宜いと思つて居る。他は寧ろ歴史的評價の上に置くべきものが少くない。ところが、露伴の紀行文を集めた『枕頭山水』や『夢日記』などを今日も愛讀することを禁じ得ない。露伴も、小説と云ふ形式を離れて了つて、かうした方へ出て、自由に其の詩想を披瀝したならば、今一層、顯著な成功を收め得たであらう。

(11) 出世作『風流佛』の思想・文章

以上は、露伴の作品についての概観であるが、さて『風流佛』が、露伴の出世作となつた所以は、珠運と云ふ彫刻家の藝術家氣質にまつはる清純な戀を描いた點にあつたが、一篇のヤマは、珠運がお辰と云ふ花漬賣る女に戀したところが、其の女が實は子爵の落し胤とわかつて、戀仲を割かれても尙ほ其の美しい佛が忘れられないで、それを風流佛に刻み込むと云ふところにあつた。即ち戀の執念、藝術の一念が、一緒にからまつたところに露伴獨自の味があつた。

其文體は、西鶴風で「室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ねる處を得て氣も休まり、爰で天の恵み、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の烟となつて御法の風に舞ひ扇極樂に歌舞の女菩薩一員増したる事疑ひなしと様子知りたる和尚様隨喜の涙を落されし」と云つたやうな文致を示して居る。が、珠運が風流佛を刻むあたりの描寫は手に入つたもので、感興に乗つて書いたものと思はれる。

珠運は段々と平面板に彩浮ぶるお辰の像、元より誰に頼まれしにもあらねば細工料取らんとにもあらず、唯戀しさが餘りて

の業、一刀削りては暫く茫然と眼を瞑れば花漬めせと嬌音を洩す口元の愛らしき工合、オ、それ／＼と影を捉へて再一ト力、一ト堅突いては跡じさりして眺めながら、幾日の恩愛、扶けられたり扶けたり、熱に汗蒸れ垢臭き身體を嫌な様子なく優しき手して介抱し呉たる嬉しさ、今は風前の雲と消えて、思は徒に都の空に馳する事悲しく、なまじ最初お辰の難を助けて此家を出でし折、留められし袖思ひ切て振拂ひしならばかく迄切なる苦とはなるまじき者をも、戀ひしを恨む戀の愚痴。吾から吾を辨へ難く、恍惚とする所へ現るゝお辰の姿、眉付媚かしく生々として、嗜、何の情を含みてか吾與へし櫛にヂツと見とれ居る美しさ、ア、此處なりと幻影を寫して又一鑿、漸く廿日を越えて最初の意匠誤らず花漬賣の時の襦袢をも着せねば子爵令嬢の錦も着せず、梅桃櫻菊色々の花綴衣麗しく引纏はせたる全身像。(下略)

かう云つたところに露伴の特徴が能く現はれて居た。其特徴を、彼れは更に『縁外縁』と『一口劍』に示した。『縁外縁』は『對調體』とも題した一種の散文詩風のもので、ある詩人が、日光の山奥から上州へ行く山の中で、調體の假相だつた美人と一夜、語り明かしたことを書いたものである。色即是空若くは邪淫戒と云つたやうな佛教から出た思想が、明かに『縁外縁』の中軸となつて居たのであるが、それを露伴に現はしたのは、露伴の作品に共通した缺點で、觀念の儘でそれが具象化されず、折角の詩的幻想を破り易かつた。それに用のない記敘の筆や、感慨的な詞句が混入して居るので、ともすれば、うるさい感じをも起せるのである。けれども山中の調體に對して、詩的空想を逞うした點は露伴でなければ見られない味があるので、『風流佛』と共に、彼れの名を馳せしめた。

(三) 藝術家氣質を描つた『一口劍』

『一口劍』は『縁外縁』よりも、優れて纏つて居た作品であつた。そして『風流佛』とひとしく、藝術家氣質を描寫したものであつた。それは、刀鍛冶正藏が戀した女房お蘭のために主人の家を出て了つて、不遇の境涯に落ちたとこ

ろが、大名に見出されて、銘刀を鍛えあげると云ふ筋である。正藏の變人で、貧乏に安んじて、藝術家らしい氣品と自信とを有する性格が力を入れて描かれてある。此の作でも、『風流佛』の珠運が佛を彫むところのやうに、『刀を鍛えるところの描寫に最も見るべきものがあつた。

作れ、作れ、作るべし。當代第一の一刀を打つてあぐべし、古今無双の良刀を鍛ひ出すべし。我折れ、かたじけなくも御ンなさけ厚き仁君の恩命を頭に戴き、御家老様庄屋様がやさしき親切を身に締め、十餘年來師匠様が胸より我胸へ吹き込で下されし教の爲に、鈍いながらも勁くなりし此腕をふるつて、あはれ魂魄を金輪際生へ抜き置きの鐵砧と据ゑ堅め、陽の槌には恩に酬はん陰の鎧には義に背かじと齒をくひしばつて力を籠め打ち、未練の思ひは横に切り目、卑怯の心は縦に切り目の鑿を入れ、折りては返し割ては合はせ十五度鍛つて四を一に鍊りつゝめて、満身の熱血を地金と丸め、無垢の一念を双金と乗せ、此腹中の猛火熾んに幾度か煉したてて煉したて、結び付け、水打ち銑透し謹み／＼油断なく、双土を削つて扱其後こそ一期の大事の燒双わたり、湯玉を跳らす誠の涙に唯願ひ奉るは神力の加護、假令此身は即座に生命召さるゝとも露惜しからず、名利のために祈るにはあらざれば、あはれみ玉へ神も佛も。

かしようて出来上つた名刀を大名の前に差出した時、「美しいが能く切れるか」と問はれて、正藏が我を忘れて、勃然と縁の上に躍り上つて、仁王立ちに突立はだかつて、便々とした腹を叩いて「切れ、たしかに二つになつて見せむ」と云ふところで終つて居る。此の結末は確かに力があつたので當時有名な文句だつた。露伴は、此の一篇を作るために可なり苦心した消息を、彼れの『地獄谷日記』に洩して居る。それによると、百枚以上になりさうだつたのを、一晚かゝつて、三十七枚に書き縮めたのである。即ち六十三枚を抹殺し、削除して了つたのである。當時の露伴が、どんなに藝術的良心に鋭かつたかを想ひやる事が出来よう。

これは、餘計のことだが、私は露伴の紀行文が好きだ。『地獄谷日記』には、當時の彼れの文學生活が、はつきり出

てゐる。左に『一口劍』を書いた頃の日記の一部を抜萃する。

七月五日。民友社に送るべきもの書かではと筆を取り、憤發して原稿書き初む。蟬の聲しづかなり。頭痛烈敷して泣きたきほどなれど、讀賣新聞社へも原稿送らねばならず、やがてこれをも認め終る。

七月六日。朝やゝ曇る。昨夜よく眠るあたはざりしが、此日は極めて早く起出づ。日いまだ出でざる山中の景色何ともいふべきことの葉もなく、涙さそはるゝほど物淋しく嬉しく。夜また驟雨きたる。山中のわたくし雨といふものなるべし。

七月七日。一日靜座す。

七月八日。朝九時に起きいづ。昨夜寝ることおそかりし故なり。昨夜雨大きに降り、樹間遠近に「土鷲」の啼けるをきゝしに、降雨聲中に赤子の呱呱と啼くが如く、極めて悲しかりし。雨ふる時鳴くものなるよし。

七月九日。朝早く起きて散歩す。「サゴの樹」といふものをとる。實赤く美しく、葉に細く白き短き毬毛あり。「紅葉」といふものゝ木より生ひたるを初めて視る。色は烈火の如くして形は「猿のこしかけ」の如し。食ふべし、味美ならず香なし。

七月十日。一日靜座す。

七月十一日。天氣變りやすく、晴れては雨ふり雨ふりては晴る。夜土方人足と共に語る。極めてをかし。越後柏崎の話をかき、此者自らいふ、幼年の時、油を買ひにやられし途中、油壺をもつたるまま、ふと心かはりて故郷を去りたるより今に歸らずと。

(四) 代表作としての『五重塔』と佳作『血紅星』

露伴の『風流佛』と云ひ、『一口劍』と云ひ、彼れの佳作であるが、結局は、『五重塔』に至る過程に過ぎない。藝術家氣質、名匠氣質乃至其の一念の強さ、意力の強さと云つたやうなものが『五重塔』に最も鮮かに最も渾成的に表現

されたのである。『五重塔』は『血紅星』と共に明治二十五年十月『尾花集』のうちに收められて出た。『血紅星』は『縁外縁』と似た詩的幻想と一種の佛教的思想とを結合させた短篇である。私は『縁外縁』よりも、寧ろ『血紅星』が好きた。其の冒頭の「一も非なり二も非なり、三も非なれば四も非なり、五六七八九十、乃至百千萬億悉皆非なり、唯今は素より非今日も又明日も又々非に極まつたり」と云ふ書きかけも逸氣奔放してゐる。此の作は、萬事を非とし、虚無視する皆非居士と云ふ詩人が、二十年來、山中にひとり草庵を結んで、今迄辿つて來た人生行路の回想や、氣焰を吐き、ある夜、幻想に耽つた末、月界の嫦娥に詩思を寄せて、月宮殿に遊ぶと云ふ趣向である。

勿論、此の『血紅星』にも、露伴に共通する説明的な言葉や、議論めいた箇所もあるけれども、一篇の散文詩と見れば、比較的に纏りが附いて居る。主人公皆非居士の抱いた幻想に對しては、ある程度まで、同感させる。其の結末に「皆非先生御自身を題にして御筆揮ふていたゞきたし、さあ月宮ものゝ望み無理ではござりませぬまい、題は人間、皆非様と、柔和い聲にて云はるゝや否、腦沸え心裂け膽破れ、畏懼の氷胸に結び、無念の火腸肚を焦がし、鬱悶に半身の筋脱け力亡び憤怒に半身の肉動き脈躍ると齊しく、熱血霧となつて八萬四千の毛孔より飛び、黒烟頭上に發つて奥齒の軋る音烈しく、見る／＼眼は輝き渡り五體に火燄の燃え立つ途端、呀と一聲叫ぶ刹那、身を躍らすこと八萬由旬、血紅の光りを放つ星となつて流れ陥つる無邊際空」としたところなども、文字の奇聲を銜つた氣味もあるが、露伴の狂熱的なところが、閃めいて居て、一種の暗示的な味を帯びて居る。

『五重塔』は、露伴の名を不朽ならしめた傑作であり、彼れの代表作である。紅葉は、後になつて『多情多恨』『金色夜叉』などの代表作を示したが、露伴は、寧ろ其の初期の時代に優れたものを出した。『五重塔』以後、それに匹敵するやうな作品は、出なかつたやうに思はれる。

露伴が『五重塔』を書いたについては、彼れが、當時、どんな生活をして、どう云ふところから、さうした着想を得たかを述べる必要がある。其の時分、彼れは、『讀賣』に於て、紅葉と對抗したが、どうも面白くないので、『讀賣』から漸次離れるやうになつて居た。それは、彼れの友人で『梅花詩集』を出した中西梅花が狂氣したりなどしたこと、精神的に動搖して、谷中の草庵に獨棲して一時は、全く斷食、坐禪の生活を送つた。かうした境遇にあつた彼れの心は、唯ひとり藝術的に烈しく燃えて居た。其の時、彼れの眼に深い印象を與へたのは、雨の夜でも月の夜でも、高く樹間に聳え立つ五重塔の姿だつた。彼れは、そこに藝術の永遠性が明かに象徴されて居ることを感じた。人間は、はかないものだ、亡び易いものだ。けれども藝術の優れたものは、ひとり亡びない。さうしたことから、彼れは、暗示を得て、『五重塔』を書き始めたのだと傳へられて居る。

『五重塔』は、明治二十五年、『國會新聞』に連載されたのを、後に一冊としたのである。篇中の主人公のつそり十兵衛の藝術家的な性格は、鮮かに描かれてゐる。十兵衛の周圍に現はれる人物は、十兵衛の性格を鮮明にするための道具に用ゐられたやうで、一般に類型的であるが、大工の棟梁源太及び其の子分の清吉などが、一通り描かれてある。畢竟、露伴は、十兵衛に其の全心を傾倒して、他には、割合に力を入れなくても宜いとしたのかも知れない。

十兵衛は、のつそりとまで綽名された大工で、動作が遅鈍で、世辭が下手で、どこまでも一徹であり、頑固である。そして其の技術にかけては、専心一意、造詣するところが深い名人肌であつた。彼れが、感應寺の五重塔を作るに於いての希望は、火のやうに燃えてやまなかつた。彼れは、平生世話になつて居る親分川越源太が其の工事を引受けたことを聞きながら、尙ほ我慢が出来ないで、感應寺の朗圓上人に面會して、自分ひとりで建立して見たいと云ふ望みを述べた。朗圓は、十兵衛の名人肌に心を動かして、十兵衛に建立のことを擔當させようとした。それと聞いた源太

は、十兵衛と協力して、五重塔を作らうとしたが、十兵衛は、一切、この事ばかりは、源太の親切にも背いて、獨力、塔を仕上げようと決心した爲め、源太の感情を害した。源太の子分清吉は怒つて、十兵衛に負傷させた。けれども十兵衛は、唯五重塔の完成に夢になつて、到頭、立派にそれを仕上げた。落成の式が近付いた頃、大嵐が吹いたが、五重塔は、見事に其の自然の威力にも壓倒されずに、藝術の永遠性を示した。十兵衛は、嵐の荒れる夜、萬一、五重塔に事があつたら、塔の上から真逆様に身を大地へ投げ出して死なうと思つたが、幸ひに無事なることを得た。源太を初め、十兵衛の周圍のものは、始めて藝術家としての十兵衛を嘆美したと云ふのが一篇の要領である。

(五) 『五重塔』の名文章

以上のやうな十兵衛の性格は露伴が得意の人物である。其の面目が、生動するのは當然である。讀者は十兵衛の言動に對して、深い同情と共鳴とを感じるにちがひない。それと同時に、嵐の夜に於ける五重塔上の十兵衛については一種の崇高美を感じさせられよう。自然の大威力に對する人間の意力及び藝術的努力との争闘、それから來る最後の勝利、それが十兵衛の一身に體現されて居るところには、確かに崇高な趣が見える。此の點は『五重塔』のヤマで、露伴も、此の一點に向つて其の筆力を集中させたやうに思はれる。恐らく、これこそ、不滅の名文章であらう。

(前略)夜半の鐘の音の曇つて平日に似つかず耳にきたなく聞えしがそも、漸々あやしき風吹き出して眠れる兒童も我知らず夜具踏み脱ぐほど時候生暖かくなるにつれ雨戸のがたつく響き烈しくなりまさり、梢に揉まる、松柏梢に天魔の號びものすこくも、人の心の平和を奪へ、浮世の榮華誇れる奴等の臍を破れや、睡りを覺せや愚物の胸に血を濺打たせよ、偽物の面の紅き色奪れ、斧持てる斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭き劍は饑えたり汝等劍に食をあたへよ、人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽まで喰はせよ、飽まで人の膏血を餌へと、號令きびしく發するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜

又、矛もてる夜叉、饑えたる劍もてる夜叉、皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺まされて江戸四里四方の老若男女、惡風來りと驚き騒ぎ、兩戸の横柄子繫乎と挿せ辛張棒を強く張れと、家々ごとに狼狽ゆるを、可憐と見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけ／＼しく。汝等人を憚るな汝等人間に憚られよ、人間は我等を輕んじたり、久しく我等を賤みたり、我等に捧ぐべき管の定めを忘れたり、這ふ代りとして立つて行く狗、鬪者の母集作れる禽、尻尾なき狼、物言ふ蛇、露誠實なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得む。我等は長く侮らせて彼等を何時まで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らしたり、六十四年は既に過ぎたり、我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈悲の岩窟は我が神刀にて扯斷り棄てたり崩潰したり、汝等暴れよ今こそ荒れよ、何十年の恨の毒氣を彼等に返せ一時に返せ、彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に墮むで捨てよ、彼等の頭を地につかしめよ、無慈悲の斧の切味の好さを彼等が胸に試みよ、慘酷の牙噴志の劍の双葉と彼等をなし呉れよ、彼等が喉に水を與へて苦寒に怖れ顛かしめよ。(中略)暴れよ進めよ無法に住して放逸無慚無禮に暴れ立て進め進め、神とも戰へ佛をも擲ち、道理を壞つて壞りすてなば天下は我等がものなるぞと、叱咤する度土石を飛ばして丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも毫も止まらず勵ましたれば、數萬の眷屬勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばまして日の光をもほと／＼掩ひ、斧を揮つて數奇者が手入れ怠りなき松を冷笑ひつ／＼ほつきと斫るあり、矛を舞はして板屋根に忍ち穴を穿つもあり、ゆさ／＼と怪力もてさも堅固なる家を動かさし橋を揺がすものもあり。手ぬるし／＼酷さが足らぬ、我に續けと憤怒の牙噛み鳴らしつ／＼、夜叉王の躍り上つて焦燥ば虚空に充ち滿ちたる眷屬をたけび鋭くおめき叫んで遮に無に暴威を揮ふほどに神前寺内へ立てる樹も富家の庭に養はれし樹も聲振り絞つて泣き悲み、見る／＼大地の髪の毛は恐怖に堅立なし、柳は倒れ竹は倒るゝ折しも黒雲空に流れて椽の實よりも大きな雨ばらり／＼と降り出せば、得たりとます／＼暴るゝ夜叉、垣を引き捨て扉を蹴倒し門を破し屋根をもめくり軒端の瓦を踏み碎き、唯一ト揉に層屋を飛ばし二タ揉み揉んで二階を捻ぢ取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どう／＼と関をあぐる……(下略)

暴風雨を擬人的に描いて、一種の佛教的思想を托したところに、露伴の妙所がある。此の嵐のために「折角僅に出來なりし五重塔は揉まれ揉まれて、九輪は動き、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り楯をも貫くべき雨の打付り來る度毎撓む姿、木の軋る音復る姿、又撓む姿軋る音、今にも傾覆らざる様子」に十兵衛は驚いて駈付けて「上りつめたる第五層の戸を打明けて今しもぬつと十兵衛半身をあらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の、眼も明けさせず面を打ち、一つ残りし耳までも址斷らむばかりに猛風の、呼吸さへ爲せず吹きかくるに、思はず一足退きしが屈せず奮つて立出でつ、欄を握むで屹と睥めば、天は五月の闇より黒く、たゞ嘈然たる風の音のみ宇宙に充て物騒がしく、さしも堅固の塔なれど虚空に高く聳えれば、どう／＼どつと風の來る度毎ゆらめき動き荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情」に十兵衛も驚いて「流石覺悟を極めたりしも、又更におもはれて一期の大事死生の岐路と八萬四千の身の毛を豎たせ牙を咬定めて眼を睜り、いざ其時はと手にして來し六分鑿の柄忘るゝばかりに引綱むでぞ天命を靜かに待つ」と云ふところは、呼吸をつがせず讀ませる。イギリス文學、ロシヤ文學から來た新味とは、全く異つて、東洋的な味が漲つて居る名文章の典型である。露伴でなければ、誰も書き得ない独自の妙趣に満ちて居る。勿論、誇張のあとが幾分あるにしても、矢張、價値を減することはないと思はれる。

(六) 「五重塔」の缺點及び其の他の作品

田山花袋は「五重塔」について「空想と誇張と作爲の多いものだ」と言つて居るが、露伴の作品中では、比較的に渾然と纏つて居る方である。勿論、「五重塔」は、空想を土臺としたものだが、其の割合に現實味にも觸れて居て、其の作爲も誇張も、うるさい程度に達して居ない。それに露伴の常習であるところの説明や、教訓めいた言葉も、少く

なつて居て、目ざはりになるやうなところは無い。どの點から見ても『五重塔』は、露伴の長所、宜いところのみを集めた観があるので、代表作と見て差支へない。

其の他、此の期の作品には『艶魔傳』『風流悟』『ひげ男』がある。『ひげ男』は、紅葉の『伽羅枕』に對抗して書いた歴史小説で、武田勝頼の亡滅前後と其の時代に甲州勢のために氣を吐いたひげ男笠井大六の勇俠な佛を描いたものである。當時の評判は、可なりに宜かつたやうだが、其の實、露伴の作品としては、寧ろ平凡であり、常套的である。長篠の戦が始まる前に於ける武田方の老將が述懐するあたりは、幾分か詩的な感味があるけれども、他は普通の歴史小説に比して、特異のところもない。今日『五重塔』を読むのは退屈でないが、『ひげ男』を読むのは、少しく退屈である。が、歴史的評價の上から見たら、或は當時の評判の宜かつたわけを肯定し得られよう。

以上は、此の期に於ける露伴の主要な作品に對する概観である。彼等は、紅葉のやうに一般に歡迎されなかつたけれども、紅葉や、硯友社の人々が、到底、開拓し得なかつた方面を獨力で切り開いた。明治の文壇は、露伴によつて始めて佛敎的思想を背景とした詩的作品及び一種奇矯奔放な男性を主人公とする特異の小説を新たに得たのである。

第六章 評論壇に於ける逍遙と鷗外

(一) 文藝評論の先覺者

紅葉、露伴の他に、作家として、饗庭篁村、齋藤綠雨、須藤南翠、矢崎嵯峨の屋、依田學海、宮崎三昧、矢野龍溪などを數へることが出来るが、それ等の人々を紹介する前に、當時文壇に棹した二人の先覺者坪内逍遙と森鷗外の文學的業績について概略、論述せねばならぬ。

坪内逍遙は、既に『小説神髓』『書生氣質』などを出して、鷗外よりも少し早く文壇に現はれたが、鷗外は、ドイツから歸朝すると間もなく、明治二十二年、『國民之友』附録に譯詩『面影』を發表し、續いて同年十月、文學雜誌『櫻草紙』を出して、評論に、創作に、翻譯に各方面に向つて、其の新銳の手腕を揮うた。

紅葉と露伴とが、作家として、對比して評論されるやうに、逍遙と鷗外とは、評論家として、對比して、論ぜられる場合が多かつた。紅葉、露伴は略ぼ小説家として始終したが、逍遙、鷗外は、學者で、評論家で、翻譯家で、小説家、劇作者でもあつた。それに鷗外は、多年官吏として生活し逍遙は半生を教育家として生活した。二人の文學的生涯は、多方面であり、多角的である。従つてある時期は、評論に力を入れ、ある時期は創作に主力を注ぐと云つた具合で、いろいろに變化して居るが、鷗外の前半生は、評論と翻譯とが主要部分を占め、逍遙の前半生は、評論と創作——前半は小説、後半は脚本——とが主要部分を占めたやうである。そして鷗外の文學的活動の源流となつたのは、ドイツ文學思潮であり、逍遙の活動の源泉となつたのは、イギリス文學思潮であつた。かうして、文壇に於ける二人

の先覺者が、趣味、色彩を異にして居たのは、興味深い對照である。

鷗外の『柵草紙』は、明治文壇に於ける文學評論を主要部分としたものとしては、恐らく、其の最初のものであつたらうと思はれる。勿論、その以前に『國民之友』の文學欄があつたけれども、眞に文藝評論に十分の力を入れたのは『柵草紙』であつた。文藝評論の最初の形式、内容を教へたのは、坪内逍遙であるが、それに啓發せられて、石橋忍月、内田不知庵などが眞先に出た。續いて齋藤綠雨、森田思軒なども、評論の筆を執つた。此の四人は、批評家としても、各自、特色を具有して居た。忍月は雄健、不知庵は銳利、綠雨は皮肉、思軒は君子的であつて、皆相當の働きを見せたにちがひないが、眞に文藝評論の巨頭となつたのは、逍遙と鷗外とであつた。

茲に一言して置きたいのは、思軒を翻譯家として知つて居る人が多いが、思軒の長所は、翻譯ではなくて寧ろ批評の方にあつたことだ。綠雨も、小説家として一時名を馳せたが、此の人の長所も、批評にあつた。綠雨の『あられ酒』を見ると、初期の批評文などを収めてあるが『大に笑ふ』『酒の上』『一言』『正直太夫死す』などの短かい物にも、既に彼れの特色が出て居る。勿論、彼れの批評は、一種の寸感録で、皮肉の連続で、論理的に堂々の陣を張つたものではないが、鋭い直覺的判斷に、中々、侮り難いところがある。

(二) 談理を好んだ鷗外

鷗外は、ドイツ文學に精通すると共に、一面、漢文學、國文學についての素養を重ねることも力めた。彼れは、ドイツの哲學、美術をも研究して、其の精確な論理的方面、究理的方面の影響を受けて、文藝評論の上にも、それから來た影響を現はした。彼れの頭腦は一面、知力的に能く働くと同時に、一面、情感的にも能く働いた。其の知力

的に働いたのが評論となり、情感的に働いたのが創作となつた。が、いづれの分子が多いかと云へば、勿論、知力的分子が、稍情感的分子に勝つて居た。鷗外が談理を喜んだのは、畢竟、彼れの長所であつたからだ。

鷗外が『柵草紙』に於ける談理の筆は、當時の日本文學に及んで、作家及び評論家を啓發したが、また新しい思潮や、美術などの紹介に於ても、時人を指導した。彼れは、何人よりも早くハルトマンの美學や、レツシングの思想及び其の有名な『ララコン論』などを紹介した。繪畫、彫刻についての新しい意見をも發表した。小説に於けるロオカル・カラアと云ふことも鷗外が、ドイツのロカアル・コロリットと云ふ言葉を使用したのが、其の最初だつた。

鷗外が、批評、論理の筆を揮つた頃の最初の文章は、『今の諸家の小説論を讀みて』などを見るとわかるが、それは、馬琴の七五調の如きものが當然、新しい小説に於て存在し得ないことに論及して「余等は散文の音響を借らずして心を動かすものを以て、詩學上比較的純なるものとなせり此純なるものは十載の久しき何れの國にてもかの琅然憂然たるものに掩はれたるが如き迹なきにあらず。故に余は近世に至りて散文詩の勃興せるを觀て、此の純詩體の漸く將に暗黒裡より顯れんとするを喜ぶものなり。往時曲亭馬琴と云ふものあり。小説を以て一時鳴り、之れに繼續するもの皆その式を追ひて還ることを知らず。然れども其の得意の文は純正なる散文にあらず。美妙子の慧眼早くこれを看破したり」と云つたやうな調子で、ドイツ仕込の頭で、漢文の素養を活用して、精緻な文致を示して居た。

鷗外が、評論家としての力量を十分に發揮したのは、坪内逍遙の沒理想論に對して、非難を加へて、長い間、論戰を續けた時分であつたらうと思はれる。勿論、それ以前に於ても、文壇の識者は鷗外の實力を認めて、其の評論を敬重したのであるが、一般的に鷗外の評論の價値を認めさせたのは、逍遙と議論して、得意の談理を試みた時分からだつたらうと私は考へる。

在來鷗外は、逍遙と論戦する迄に、石橋忍月や、内田不知庵にも、鋒先を向けたことがあつたのだが、彼等は、一溜りもなく、鷗外に突き倒された。當時、鷗外の矢面に起つて、實力相対しい地位にあつたのは、逍遙のみであつた。鷗外のドイツ風の文學論、詩論に對して、逍遙はイギリス風の文學論、詩論を以て對抗し、鷗外の談理を重んじたに對して、逍遙は記實を重んじたと云ふ具合で、雙方好個の論敵を得たわけであつた。

(三) 『沒理想論』に就いての論戦

沒理想論の由來に就ては、在來出た文學史には、餘り記されて居ない。逍遙、鷗外が戦を開いた最初の動機は、『マクベス評釋の緒言』に於て、逍遙が、シエクスピアの作の内容が優れて、萬般の理想を入れて、餘りあることに就いて沒理想の新造語を以て、それに當てはめようとしたにある。「若しシエクスピアを稱美せんとせば、其人間の性情を活動せしむる技倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の著想の妙、これをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし、只其の理想をほめて大哲學者の如く高しといふは信じ難し、むしろ其の沒理想なるをたふべきなり」と逍遙は云つて、沒理想に就いて、左の如く言明した。

有と無とは二にして一ならざればにや、古人多くは沒理想の作を、やがて大理想と解釋して、其の作者を神の如く、聖人の如く、又至人の如く評したるものあれど、沒理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた沒理想と見ゆることあり。嬰兒の欲の極めて小なる、是れ有欲(悪)とも見るべく無欲(善)とも見るべし。鬼貫が一句、「なんで秋の來たとも見えず心から」、此十七字、強ひて解釋の辭を作らば、或は佛敎をも掩ふべく、或は東西哲學の幾體系をも埋むべし。木内宗吾が一時の義學も若し花々しきマコーレーが筆を借りて傳を作らば、ハムデン、ワシントンの輩と肩を比ぶる義學ともなりなん。必竟するに鬼

貫等佛人の作には、當人の註釋無く、木内宗吾の義學には詳傳無く、嬰兒の口には言語無きゆゑ、解釋見る者の心次第なり。恐らくはシエクスピアと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉くいへば、小説の體にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし、其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり。例へば、『キング、リアー』の悲劇は、馬琴の作に似て、勸懲の旨意といちじろしく見えたれども、作者みづからが評論の詞絶えて篇中に無きゆゑ、見るものゝ理想次第にて、強ち勸懲の作と見做すを要せず、別に解釋を加ふること自在なり。しかるに、曲亭の作を見れば、例へば、暮六夫婦の性格の如き、頗る自然に肖て活動したれども、吾人はこれを沒理想とは評せずして、勸懲の旨に成れりといふ、作者が叙事の間に明に然いへればなり。芭蕉が「古池」の句に、様々の解あるも、同理なるべく、『源語』の本意をいろ／＼に斷するも、同理なるべく。此の例證尙甚だ不足なれども、沒理想の、必ずしも大理想にあらざること、小理想の、時としては沒理想とも見ゆる由は、之れにては知らるべし。兎に角に、予は沒理想の作を、理想をもて評釋すること、いと／＼要なかるべきを信するが故に、此のたびの評釋にては、主として打見たる儘の趣を描寫することを力め、我が一了見の解釋をば加へざるべし、但し右とも左とも見らるゝ如き場合には、止むを得て故人の評釋をも引用し、予が卓見をも叙ぶることあらん。若し夫れ全體の解釋は、讀者みづから之れをなせ、理想、日本人ならん人は、日本國を「マクベス」の脚本中に見出だすべく理想萬古に亘らんには、Eternity を「マクベス」の中に見出だすべし。沒理想の詩の無限の興味は、實に其の度量の大洋の如き所にあるなり。

逍遙の沒理想の新造語は、以上のやうに解釋されたのであるが、語義の上から、沒理想については、多少、異つた見地を有して居た鷗外は、鳥有先生の名の下に、『しがらみ草紙』に於て、先づ論難の矢を放つた。それに對して逍遙は『沒理想の語義を辯ず』鳥有先生に答ふ」などに於て、其の意見を明かにした。爾後、双方、論難を繰返して、ここに評論壇の巨觀を呈するに至つたのである。

蓋し逍遙が、イギリス風の文學論乃至美學說と鵑外のドイツ風の文學論や、美學說は、互ひに相容れない點を持つて居た。それで、鵑外は、嘗に沒理想の意義若くは語義について、逍遙とは、別種の解釋を有して居たのみならず、『しがらみ草紙』に續いて出た『早稻田文學』が、談理を後にして記實を先にすると云ふことに對しても、矢張、懐らず思つて居たのである。従つて、論戰の二要點は（一）沒理想について（二）談理を先とすべきか、記實を先とすべきにかゝつて居た。

逍遙は『沒理想の語義を辯ず』と云ふ論文に「我が謂ふ沒理想は、沒却理想または不見理想の兩義を含めり。之れを無理想の義に解しても差支なけれど、我が旨は理想絶無、本來無理想といふとはおのづから別あり。そして彼の造化に對して用ふると、詩文に對して用ふるとの間に、本意に於て別を立てたり。造化に對しては、専ら方便の名目としてこれを用ひ、詩文に對しては目的即ちドラマの本體の一面を代表する名として用ひたり」と述べ、更らに進んで「漢々たる大造化は古今の萬理想を容れて（沒却して）餘あり、若し理想といふ語をもて今人が思議し得たる極致の名とせば、造化を名づけて沒理想といふも、不可なからん。沒理想といふ語は、今人の衆理想を沒却し、即ち埋没して、尙餘地ありといふ義に解せらるべければなり」と説いた。そして詩文に對して沒理想と云ふ語を用ふるについては「作家沒却して見えすといふ義なり。必ずしも作家に理想無しといふ意には非ず。此段大むねは、造化に對していふ時と異なることなければ、聊か差別あり」と云つて、左の如く述べた。

例へば、シエークスピアを沒理想といふは、勿論無理想の意にあらねど、さりとて人間以上の理想若しくは大理想ありとの義にもあらず、多數の批評家が彼れの理想なりとする所のものは、彼れの理想にあらざれば理想は見るに難しき意なり、さればドラマを沒理想といふは、ドラマの本體を説きたるにあらで單る其の客觀を評したる詞とも見るべし。我れ以爲へらく

ドラマは活きたる差別相と活きたる平等相とを兼ねたるものなりと。我が謂ふ活きたる差別相とは、個々の人物、おの／＼その特質を有し、作家の性情を脱離して云爲するをいふ、活きたる平等相とは、取も直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて作家の性情を脱離するといふことに外ならず、即ち沒理想なり、作家の性情を見る能はずの意なり。人間を支配すべき因果報の理法の一貫するを見れども、絶えて作家の小天地を現せずとの意なり。これを換言すれば、作家能く自己を脱離して個々差別の人物を描けるもの即ちドラマなり、といふ義なり。（下略）

以上によつて、略ぼ逍遙が、沒理想と云ふ新造語を用いた理由、意味を知ることが出来るのである。ところが、鵑外は逍遙に反對して「世界はひとり實なるのみならず、また想のみち／＼たるあり、逍遙は沒理想（意志界）を見て理性界を見ず、意識界を見て無意識界を見ず、意識生じて主觀と客觀と縊に分かる、所以をおもはず」老、莊、楊、墨、孔丘、釋迦、其他古今の哲學者が觀得たる世界を小なりとして自ら片輪なる世界を造らむ果敢なきさみならまし、後天にのみ注げる眼はダルキシが論を守りても事足るべけれど、それにて造化は盡されず、孔雀の羽のいろ／＼は、その翰より受くる養おなじきに、色彩の變化は一本ごとに殊なりその相殊なる色彩の合して渾身の紋理をなすは先天の理想にはあらざるか」と云ひ、理想及びそれに適へる極致あることを主張し、「破かねならぬ祇園精舎の鐘を聞くものは待人戀ひしとおもひ、寂滅爲樂とも感すべけれど、其聲の美に感ずるは一なり、沙羅雙樹の花の色を見るものは諸行無常とも觀じ、また只管にめでたしとも眺むれど、其色の美なりとは耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず、先天の理想はこの時暗中より躍りいでて此聲美なり、此の色美なりと叫ぶなり。これ感納^{カクニヤル}性の理想にあらずや」と述べた。

(四) 鷗外の逍遙の説に對する論難

鷗外は、また、逍遙が詩文に對する没理想についても、論難を加へて「若し没理想を説く人のいへるが如く、言葉のうちにおのが理想あらはれざる戯曲に長ずるためにシエ、クスビヤ大なり、おのが理想のあらはるゝ叙情詩若くは小説に長ずるためにバイロン、スキフト小なりといはば、これシエ、クスビヤとバイロンとスキフトとまたく其詩體を殊にせしために大小の別生じたるのみにてその本來の才分境地には大小なかるべし」と云ひ、左の如く、結論した。

英吉利古今の文士の戯曲を作りしもの幾百千家ぞ、その作りし戯曲幾千萬篇ぞ、この幾千萬篇か知れぬ戯曲は戯曲の體裁として作者自らが評論の詞を挿まざりしならん、皆所謂没理想なりしならん、さるに徒數百千家はその名、骨と與に朽ちぬ、ひとりシエ、クスビヤが威靈今にいたるまでいやりこなるは何故ぞ、彼數百千家は小家にしてひとりシエ、クスビヤの大詩人たるは何故ぞ、又叙情詩と小説とは作者の理想あらはるといひ、没理想に至ること能はずといはゞ、叙情詩に長ずる大詩人、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか、又叙事詩の旨は純粹なる客觀相にあれば、その没理想に至り易きこと迥に戯曲の上にあらむ、又没理想を説く人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ、おほよそ是等の間に答ふる人なき間は、シエ、クスビヤに理想なしともいはず、理想なきを大詩人の本相なりともいはず。

鷗外の見方は、ドイツ風の哲理的、美學の上に立脚したもので、逍遙のイギリス風の經驗的、美學の上に立脚したのとは、自然異つて居た。逍遙は、鷗外の非難に答へて『梅花詩集』を評した時の語を引用し、「詩人の筆に上る世界二つあり、心の世界と物の世界となり。甲は虚の世界にして理想なり、乙は實の世界にして自然なり。理想を宗

とする者は、我を尺度として世界を度り、自然を宗とする者は、我を解脱して世間相を寫す。前者は總稱して叙情詩人といふべく、後者は總稱して世相詩人といふべし。前者能く大なることを得ば、或は天命を釋し得て、一世の豫言たらん、後者能く大ならば、或は造化を壺中に縮めて、長永に不言の救世主たらん。理想家の作の大なるには作者著大にして乾坤を呑み、造化派の作の大なるには、造化活動して作者其の間に消滅す、されば叙情詩人には、理想の高大圓滿ならんことを望むべく、世相詩人には、理想の全く影を藏して、單に世態の著からんことを望むべし。又太だ小ならば、二者共に現在を離れ得ずして、叙情家は一身の哀觀を歌ひ、世相派は管見の小世態を描かん」と云ふことを以てした。要するに、鷗外の見地、立脚點が異つて居て、何事もドイツの美學原理によつて律し且つ哲學的に論じようとしたところから、出發して、結局、重に語義上の争ひとなつた形があつた。勿論、鷗外の云ふところにも一理はあるが、逍遙の眞意を辯明したところを見ると、イギリス風の美學に依據した其の説にも一理がある。鷗外は、先づ歸納から出て、演繹に行き、逍遙は演繹を先にして、歸納を後にしたと云ふ差異はあるが、彼れの哲學的とこれの經驗的とを換合したところに、正しい歸一があつたのだ。當時はそれが、別々になつて、各一派の見方を爲して居たのである。

(五) 談理と記實との問題

以上とひとしく、鷗外が談理を先にすると云つたのも、逍遙が記實を先にすると云つたのも、此の二つを換合したところに、正しい歸一があつた。が、當時の文壇に於ける状態から云ふと、逍遙が、記實を先としたのは、確かに卓見であり、有益のことでもあつた。鷗外のやうに、高く文壇に標置して、ひとり、高遠の説を吐く人にあつては、寧

る談理に力點を置くことの必要を感じたであらうけれども、逍遙のやうに一般的に著實を旨として、文壇の大勢を指導して行かうとするには、記實の必要が殊に痛感されたであらうし、また記實を先とするのが、正當だつた。それについて、逍遙は『早稻田文學』第三號に於て「博識卓見の學者は世間に其人いと多かり、佛人獨人の長ずる所は、吾人之を悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現實の報道を旨とし、偏にアングロサクソンの著實なる常見を師とすべし」と云つた。鷗外は、それを知らぬのではなかつたのであらう。けれどもドイツ流に何事にも、談理を好んだ彼れは、アングロサクソンの常見に慊らなかつた。それで、彼れはかう云つた。

羅馬なる聖、彼得寺塔を觀てミケランジェロが作りし雛形の美に驚くは建築を視る眼あるもの、皆能くするところなるべし、これを美なりと記さば、記實者の役済むべければ、談理者はそれにて足れりとすべからず、かの佛蘭西人それがしが如く、高等靜論の算法によりて古人が不用意にして、靜性の極處に至れるを看破してこそ、その美なる所以を知るべきなれ、若し美の義を碎いて理に入ることあらずば、審美學は起らざるべし、逍遙子が記實の文を讀むには大歸納の力を具へざるべからず、予が談理の言を聞くものには普通の理解力あれば足れり。

最後の言は、鷗外の誇張である。逍遙の記實の文は、自然、文壇の主流を讀者に會得せしむるよう、平明周到に出來て居たから、大歸納の力なくとも、讀んでわかるのである。鷗外の談理の方が寧ろ大理解力を當時の人々に要したと、これも主張して云へるであらう。結局、談理を高調した鷗外の説も、當時には必要で、文壇のレベルを高める上に多少の力があつた。けれども逍遙が、記實の上に於て一般に文壇の潮勢を導いた事の方が、大きく、廣く、文學的進歩の上に貢獻した。經驗的であり、現實的であり、かねて穩健な理路を追うた『早稻田文學』の彙報が、長く文壇に尊重されたのは、畢竟、逍遙の卓越した先見から生れた有力な收穫の一つであつた。が、談理を本位として、思想

的に浅い常識から解放された文學見を樹立し、進んで、美學の勃興を促がさうとした鷗外の功績も亦公平に認めねばならぬ。其の當時に於ける鷗外の論文は『月草』に收めてある。

(六) 評論界に於ける綠雨

論壇に於ける逍遙と鷗外とは、かうして、火花を散らして、勇ましく戦つたので、當時の文壇の人々は、いろいろの方面から、それに啓發された。鷗外、逍遙を中心として評論の筆を執つた人々のうちで、稍傑出して居たのは、内田不知庵(魯庵)であつた。彼れは、石橋忍月と併立して、文藝評論の方に力を入れたが、其の筆は辛辣で、諷刺的、嘲罵的などころがあつた。『文學者となる法』の如きは、當時の文人の弱點を鋭く抉つたものであつた。が、彼れは一方において『文學一斑』の如き眞面目な研究的なものを書いた。文學の定義、分類などが、未だはつきりしない時代(明治二十五年)にあつては、『文學一斑』の與へた効果は、没すべからざるものがあつた。畢竟、不知庵は、最初から文學に對して、極めて眞面目な考へを抱いて居たのだが、他の不眞面目らしく見える當時の文士の一半に對して大に慊らなく思つたことが、諷刺、嘲罵となつて、自然、彼れの胸中から吐露されたのである。

齋藤綠雨は、正直太夫の名の下に、批評の筆を揮つたが、非科學的な、隨筆風のものであつた。論理や方式に拘泥しないで、自己の江戸趣味や直覺を土臺とした皮肉な嘲罵諷刺を恣まに吐露した。勿論、そこには狭小な主觀があつて、獨斷的、感情的の弊を免れなかつたけれども、其の鋭い直覺や、忌憚のない言葉のうちには、偶まには、巧みに作家、批評家の弱點を突いたところがあつた。

綠雨は、純粹の江戸ッ兒で、慶應三年に東京本所區緑町に生れた。彼れが江東みどりの雅號を用ゐたのはそれがためであつ

た。彼れは最初、假名垣魯文の門に入つて、文學的素養を積み、明治十七年『都新聞』の前身だつた『今日新聞』に入つて、社長小西義敬に愛せられて、花柳界などの様子を熟知して、一種の通人的素質を作つた。そして單純な人情話などを書いて居た。が、眞に彼れの特長を示すやうになつたのは、明治二十三年頃『讀賣』などへ、文學批評を寄せて、皮肉な諷刺を試みた時からである。それと同時に『かくれんぼ』『油地獄』『門三味線』などの小説を発表して、文壇に於ける一方の大家となつた。彼れの著書で其の後に出したのは、『あられ酒』『雨蛙』『みだれ箱』などで、彼れの江戸人としての個性と特色とは、此の三種の小冊子のうちに最も能く反映されて居た。彼れが不遇のうちに世を去つたのは、明治三十七年四月で、年齢三十八歳だつた。

綠雨の文藝批評は、以上のやうに特色を有して居たが、畢竟、皮肉を云ひたい爲めの批評と云つたやうな趣があつて、文學上に積極的に貢獻した點が少かつた。それよりも後年に於ける『おぼえ帳』『ひかえ帳』などにある一種の鋭い、皮肉な社會的觀察の方に、より多くの長所を備へて居た。それは、別に紹介し、批評したい。

森田思軒の文藝批評は、一體に穩健であつたが、一面、稍保守的な傾向を帯びて居た。それは彼れが餘りに漢文學に拘泥して、漢文趣味に傾いたからだらうと思はれる。明治二十四年頃、文體の成行について、いろいろの論議が起つた時、思軒は、當時、漢字漢語に昏い著作家が、奇妙な新造語を捻出することを非難して「詞は物に隨て生ず、駁々たる社會は日に幾多の未だ會て有らざりし新物を齎す、則ち必ず之に應ずる新詞を出ださざるべからず、余輩は未曾有の新物に加ふるに未曾有の新詞を以てするを異します、亦徒らに新詞の帆影を望で駭走する亞米利加土人にあらす、唯だ元來本然の詞あるに之を索めず、一知半解の漢字を積累して不穩當熱せざるの熟字を私する者を咎むるなり、現時著作者が需用する所の詞は一部の史記若くは一部の東坡集、若くは一部の陽明集只だ手に觸るゝ所をとりて之を開かば雅馴妥當の熟字簇擁して其の眼下に現れ來らむ、且つ新物に逢て新詞を作るにも、先づ一應のエテイモロヂー

は略ぼ之を知らざるべからず、苟も詞の本義上と由來とに就て糸毫の知る所なく、叨りに詞を變化して經緯せむとする者あらば、誰か其膽の大にして顔の厚きに驚かさむ、而して現時著作者高等官の中には、實に幾個の斯の大膽と厚顔とを見るなり」と云つたのを見ると、穩健な考へのうちに、保守的なところがあることがわかる。

〇(七) 評論家としての北村透谷

其他、稍遅れて出た文藝批評家として、北村透谷が居た。彼れは、浪漫主義、主情主義の運動を開始した先驅者だつた。其の評論は、主として、其の運動についての宣傳であつて、人生と文學との交渉について、眞面目に考へたところに、彼れの態度の眞剣さがあつた。が、それは、自然主義者のやうではなくて、高踏的・超越的なものだつた。それは浪漫主義的傾向がある彼れとしては止むを得ないことだつた。其の思想は、一體に悲調を帯びて居たが、文學の權威を高調し、實利を以て、文學を律しようとする一派の説を斥けたのは、彼れの一見識を示した點であつた。また彼れの評論は、其の詩的空想を托したのもあつて、独自の色彩を帯びて居た。

北村透谷(門太郎)は、相州小田原の人で、明治元年に生れた。十四の時、東京へ出て、京橋の泰明小學校に學び、明治十六年、早稻田専門學校政治科に入つた。一時、政治家として起たうとしたことがある。が、後、小説家にならうと思つて、同志と雑誌『文學界』を創刊した。それは、明治二十六年一月である。同人には、島崎藤村、馬場孤蝶、上田柳村、星野天知、戸川秋骨、平田秃木らが居た。透谷は一面、キリスト教會に屬して、其の方のことも關係して、雑誌の編輯、傳道、翻譯などの仕事をした。其の文學生活は僅々二三年ばかり續けた丈で、二十七年五月十五日、自殺して二十七歳で世を去つた。原因は主として家庭上の不和や、生活難や、本來の神經過敏などが錯綜して居た爲めだと傳へられた。其の小説、新體詩、評論などは、何れも、浪漫主義、主情主義の色彩を帯びて居て、彼れ独自の領分を開いたものであつた。

透谷の評論中、其の代表的なものは『富嶽の詩神を懐ふ』及び『内部生命論』などであらう。前者は優れた詩的論文で、藝術の永遠性と富嶽の不朽美とを謳歌したものである。「寤果して寐か、寐果して寐か、我是を疑ふ。深山夜に入りて籟あり、人間盡に於て聲なき事多し。寤むる時人真に寤めず寐る時往々にして至樂の境にあり」と云ひ「詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり」と云つたところは、透谷にして始めて云ひさうなことである。

透谷は、また『内部生命論』に於て「内部の自覺と言ひ、内部の経験と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の内部の生命を語るより、外に出づること能はざるなるなり」と述べたのは、當時に勢力を有した一部の詩文人の群と全然立ち場を異にして、藝術の心核に觸れようとした透谷の思想にまつはる主情主義の閃きがある。

以上で、文藝評論家の主要な人々は、略ぼ盡きて居るが、尙ほ他に寺山星川、徳富蘇峯、高田半峰、山路愛山、櫻庭算村らの人々も亦評論の筆を執つて、文學上の事に論及した。蘇峯の新聞題を提供したことや、算村の創作に對する批評などは、幾分かの影響を當時の文壇に與へたやうに思はれる。また寺山星川は、哲學的傾向を有した點に一異色を有し、半峰は、政治家としての文學的意見の上に穩健な色合を示し、愛山は、史論家として、功利主義の上から文藝を論じたりなどした。

かうして、當時の文藝評論は、主として、逍遙、鷗外を其の中心勢力として、徐ろに進歩の道程を辿つたのである。そして科學的な専門的な批評が徐ろに生れつゝあつたのである。

第七章 硯友社以外の作家及び作品

(一) 逍遙の『細君』及び『一圓紙幣の履歴ばなし』

逍遙と鷗外とは、ひとり、評論の上に於て活動したばかりでなく、小説及び翻譯の上に於ても活動した。逍遙は『書生氣質』を出してから『内地雜居未來の夢』『妹背鏡』などを書き、二十二年の『國民之友』第一春季附録には『細君』を發表した。田山花袋は『細君』を評して「これを先の『書生氣質』などに比べると作としての價値は一層この方にある。一人の女中を點出して、その女の眼に映じ心に映つたその頃の紳士の家庭なるものが、よく書かれてある。周圍も見えてゐる。心理もある、作爲のあとも少なく、文章も滑脱自在な雅俗折衷體でさほど厭味がない」と云つて居る。『細君』に次いで『壹圓紙幣の履歴ばなし』が二十三年二月『讀賣』に出た。これは、後に『春廬家漫筆』のうちに收められた。花袋が「逍遙は『細君』以後、小説に筆を絶つた」と云つたのは間違ひである。『壹圓紙幣の履歴ばなし』以後に及んで、筆を斷つたわけである。

『壹圓紙幣の履歴ばなし』は、夏目漱石の『吾輩は猫である』と略ぼ同趣のもので、其の先驅となつたのである。一圓紙幣の自敘傳と云つたやうな形式の下に、輕妙な筆で當時の紳士の家庭生活や社交生活を寫し、時々、諷刺的な味を含ませてある。當時にあつては、新しいものであつた。

(二) 鷗外の處女作『舞姫』

鷗外の小説は、處女作『舞姫』を第一に數篇を發表した。『舞姫』は二十三年の『國民之友』春季附録に出て、鷗外が創作に於ける鮮かな手腕あることを示した。此の一篇は、同年夏に發表した『うたかたの記』及び『文づかひ』などと共に、鷗外の洋行土産から出た作品だつた。丁度、永井荷風の『あめりか物語』や『ふらんす物語』の一部に似たやうなものでつた。が、荷風は、小説として書かなかつたが、鷗外は、之を小説として書いた。

以上の三篇は、『水沫集』に收められてあるが、流石に鷗外の青春時代に書いたものだけに、全くの戀物語だつた。けれども其の書いた態度は、極めて眞面目で、其の描寫は、和文體を以てしたに關らず、洋文脈を加へて雅醇な風味と清新な趣致とに豊かであつた。單に讀んで面白いと云ふに留まらないで、人生の一面を暗示して、何となく、考へさせるところがあつた。二葉亭の『浮雲』が、當時の文明を描いたと云ふことが出来るならば、これは戀を中心とした人生の一斷面を略ぼ如實に描いたと云ふことが出来た。かうした作風は、鷗外が、ドイツ文學に精通すると共に、ドイツ語を透ぼして、歐洲文學の大體を知つて居たところから暗示を得たり、影響を受けたりした爲めだらう。それは二葉亭が、近代ロシヤ文學の感化を受けたやうに――

『舞姫』は、今日から見ると、稍自然主義的な傾向を持つてゐるが、大體に於て、『うたかたの記』『文づかひ』と共に浪漫主義的傾向を持つたものと云ひ得よう。戀のはかなさ、戀のなやみ、さうした點を咏嘆したやうなところが多い。そこにも、鷗外の青春時代の若々しさを、さながらに、象徴して居るやうに思はれる。

鷗外が云つて居るやうに『舞姫』はベルリン留學の記念、『うたかたの記』はミュンヘン在留時代の記念、『文づかひ』はドレスデン在留時代の記念である。『舞姫』は「小なる人物の小なる生涯の小なる旅路の一里塚」と謙抑して云つて居るが、作品としては、必ずしも、さうした貧小なものではない。ある日本の若い官吏太田豊太郎が、ベルリンに留

學中、不圖、女優エリスと熱い戀に落ちて子供を胎ませたが、結局、友人の計らひで、エリスに別れて涙を飲みながら、歸東することとなり、エリスはそれに絶望して發狂すると云ふ筋である。鷗外は可憐で一本筋なエリス、多感で、意志の弱い豊太郎の性格を、略ぼ描かうと力めて居るが、率直に云へば、エリスだけが最も鮮かに表現されて居る。私は、殊に左の一節が宜いと思ふ。

老婦は感動におのが無禮の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、眞白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の籠あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが内には白布を捲ひし臥床あり。伏したるはなき人なるべし。籠の側なる戸を開きて余を導きつ、この處は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、厚紙にて張りし下の、立たば頭の支ふべき處に臥床あり。中央なる机には美しき鏡を掛けて、上には書物一二巻と寫眞帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ價高き花束を生けり。そが傍に少女は羞を帯びて立てり。彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く曩なるは、貧家の女に似ず。老婦の室を出し跡にて、少女は少しく訛りたる言葉にて云ふ。許し給へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人たるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシャウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「キクトリア」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を折きて遣し參らせん。縱令我身は食はずとも。それもならず。母の言葉に。彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自ら知らぬにや。

和文體ではあるが、女優エリスの美しさが、常套的ではなく、清新な手法で表現されて居る。鷗外が『舞姫』によつて、其の創作上に於ける手腕を認められたのは、當然であつた。が、私は『舞姫』よりも『文づかひ』の方が、一

段優れて居ると思ふ。「うたかたの記」は、作爲的なあとが著しいけれども、其の女主人公マリイの性格は、『舞姫』のエリスよりも稍複雑で、一風變つて居て、強く心をひかれるところがある。そしてそれを取巻く情景も極めて詩的である。

(三) 鷗外の「文づかひ」

『文づかひ』の女主人公イ、ダ姫は、父が強ひて纏めた、許婚の年少士官メエルハイムに眞の愛情を感じないで、孤獨を守らうとする淋しい氣分に浸つた美人である。其の淋しさが、能く描かれてある。そして此の姫の周圍に於ける姉妹、貴族の家庭、質樸な軍人などの取合せも宜い。姫を慕ふ牧童を點出したのも詩的な味を加へて居るが、稍わざとらしく思はれぬではない。

最初に騎乗のイ、ダ姫を點出し、次ぎに食卓に於けるイ、ダの事を描いて、其の特殊の性質を有した點を讀者に印象させたところにも、鷗外の冴えた技巧が窺はれる。冒頭に馬上の姫たちを描いて、さて「すこし引下がりで白き駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵ぐるの馬のり衣裾長に著て、白き薄ぎぬ巻きたる黒帽子を被りし身の構けだかく、今かなたの森蔭より、むら／＼と打出でたる獵兵のいさまし見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心憎し」と叙して、其の名を明かさず、ピュロウ伯の晩餐會のところ、「食卓に就きてみれば、五人の姫達みなおもひ／＼の粧したる、その美しさいづればあらぬに、上の一人の上衣も裳も黒きを著たるさま、めづらしと見れば、これなんさきの白き馬に騎りたりし人なりける」と照應して左の如く、イ、ダ姫を描いたところは、優れた手際を見せて居る。

外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服襲めたまふ言葉の尾につきて「黒き地に黒き紐つけたれば、ブラウンシュワイヒの士官に似たり」と一人いへば、桃色の顔したる末の姫「さにてはなし」とまだいわけなくもいやしむ色を包までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汗盛りし皿の上に低れたれど、黒き衣の姫は陡だに動さざりき。暫しありて輝き姫、さきの罪購はむとやおもひけむ「されどかの君の軍服は上も下も黒ければイ、ダや好みたまはむ」といふを聞きて、黒き衣の姫振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帯びて叱りきと覺ゆ。われはこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならんといひしイ、ダの君とは、この人のことなるを。(中略)イ、ダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髪黒し。かの善くものいふ目を餘所にしては、ほかの姫たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黒き衣のためにや。

かうして、イ、ダ姫が、メエルハイムとの許婚についての悩みから、始終不満がちであることを、ほのめかして居る。篇中の日本人は、鷗外その人でもあらうか。それが、イ、ダ姫と塔上で話すところは、殊にロマンチックである。終にイ、ダ姫の悩みを告白させて、淡白に結末を付けて、其の歸着をはつきり述べて居ないのも宜いと思はれた。が『舞姫』でも『文づかひ』でも、氣品がある代りに、情熱に乏しいのは、鷗外の作品に共通するところの大きい缺點である。

(四) 小説家としての綠雨と篁村

他に、小説の方で、當時の文壇に異色を添へた人々を數へると、齋藤綠雨(正直正太夫)、齋庭篁村、原抱一庵らが居た。また傳奇小説の作家として、俄かに頭角を擡げ出した村上浪六を始め、矢野龍溪、村井弦齋、遅塚麗水、宮崎

三昧、依田學海、須藤南翠などの人々が居た。それから探偵小説の方面に於て、先驅者となつた黒岩涙香が居た。二十六年『讀賣』の懸賞歴史小説に當選した高山樗牛が居た。その他、西村天囚、矢崎嵯峨の屋、堀紫山、宇田川文海、井上笠園、渡邊霞亭、南新一、武田仰天子、幸堂得知、岡野半牧、半井桃水、田邊花園、石橋忍月、本吉欠仲らの人をも數へることが出来る。

綠雨は、作家として、際立つて新しい境地を開いたとは云へないけれども、其の皮肉な調子が、矢張、小説にも現はれて居て、紅葉、露伴以外に、彼れ独自の天地を持つた。花袋は其の代表作として『油地獄』と『かくれんぼ』を擧げて『かくれんぼ』については「彼の特色の最も顯著なもの、文章は舊式な雅俗折衷體で今から見れば不思議なものだが、内容は皮肉な痛快な面白いものであつた」と云ひ、『油地獄』については「これはお坊ちやんが藝者買を始めでん／＼と深味に入つてゆく心理的傾向を書いたもので、頗る細緻を極めてゐた。文章も彼としてはめづらしく言文一致で、例の皮肉な筆でえぐるところは飽くまでもえぐつてあつて面白い」と賞讃して居るが、それは畢竟、歴史的評價で、そこにまた綠雨の著しい短所があつた。

彼れの『油地獄』も『かくれんぼ』も題は奇抜であるけれども、共に無垢な青年が、藝妓買ひに浮身をやつす墮落的行徑を描いたもので『油地獄』の主人公の心理描寫とても、『浮雲』などに及ばない。唯當時にあつては、比較的細かいと云へる迄のものである。而して篇中の主人公とても、綠雨の皮肉を云ふ材料に供せられた形があつて、少しも、同情したところがないから、綠雨の筆に深刻さが少しはあつても、時には、それが嫌味に感ぜられる事も少くなかつた。痛快な諷刺、皮肉の味が却つて邪魔となるやうなところも、見受けられた。『油地獄』の冒頭で「大丈夫當さに雄飛すべしと、入らざる智慧を趙温に附けられたおかけには、鋤だの鉄だの見るも賤しき心地がせられ、水盃をも仕兼

ねない父母の手許を離れて、玉でもないものを東京へ琢磨きに出た當座は定めて氣に食はぬ五大洲を改造するぐらゐの畫策はあつたらうが、一年が二年、二年が三年と馴れるに隨て、金から吹起る都の腐れ風に日向臭い横顔を漸々かすられ、書籍御預り申候の看板が目につく程となつては、得てあの里の儀式的交通の下に雌伏し、果斷は眞正の知識と、着て居る布子の裏を剃いで、其夜の鍋の不足を補はれることは、今初まつたでもないが困つた始末」と書いたやうな皮肉な口調が、諸處にあつて、時には、痛快だが、時には、嫌味で、諷刺の痕も見えすいて居て、面白くない場合も多い。結局、綠雨は、批評家、雜文家としての方が、遙かに顯著な成功を収めたのである。小説家としては、十分、伸び得なかつた。それで、私は『かくれんぼ』などと前後して出た『小説評註』などの方に、より多く、彼れの才分を認めるのである。

饗庭篁村は、魯文や、金鷲の末流を追うた舊式の作家を代表して居た。彼れの小説の長所は、嫌味の少い滑稽味、洒落味乃至、軽い諷刺の味にあつた。彼れは平生江島其磧に私淑して『當世商人氣質』を書いたが、要するに、其磧の模倣以上に出なかつたやうに思はれる。けれども、紅葉、露伴が出現する迄、彼れが江戸文學の流派を繼承した最後の殿將として、一寸文壇を賑はした功績は没すべからざるものがある。彼の特質を知るには『當世商人氣質』のほかに『むら竹』と云ふ叢書を一讀すべきである。

篁村と略ぼ同じ系統に屬すべき人々は、南新一、幸堂得知などである。坪内逍遙は、當時『滑稽家』と題して「竹のや(篁村)の諷刺、幸堂の滑稽、南の諧謔、正太夫の冷嘲、いづれも獨得の風あり。皮相を評せんか、竹のやはちやかすが如く、正太夫は許くが如く、幸堂は胴樂、南は洒落、竹のやは滋味あり、南に酸味あり、正太夫に苦味あり、何の味とも無くて味あるは幸堂が黄表紙ぶりの滑稽か。竹の屋の諷刺は婉曲、正太夫の冷嘲は直截、幸堂と南とに至